



TITLE:

マダガスカル沿岸漁民ヴェズにおける市場経済の受容: その生業と家計経済に関する人類学的研究(Dissertation\_全文)

AUTHOR(S):

飯田, 卓

---

CITATION:

飯田, 卓. マダガスカル沿岸漁民ヴェズにおける市場経済の受容: その生業と家計経済に関する人類学的研究. 京都大学, 2000, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2000-05-23

URL:

<https://doi.org/10.11501/3170050>

RIGHT:



マダガスカル沿岸漁民ゲイズにおける  
市場経済の受容

—その漁業と家計経済に関する人類学的研究—

飯田 亨



# マダガスカル沿岸漁民ヴェズにおける 市場経済の受容

ーその生業と家計経済に関する人類学的研究ー

飯田 卓



# 目次

## 第 I 章 序論

I-1 問題の所在.....	8
(1) 広域的な社会経済に対する漁民の対処	
(2) ヴェズ漁民に関する研究動向	
(3) 本論文の構成	
I-2 調査地の概況.....	16
(1) 地理的環境	
(2) ヴェズの言語と社会	
(3) ヴェズ社会における世帯	
(4) ヴェズ社会における世帯間協同	

## 第 II 章 漁村における家計経済の概要－農村との比較を通して

II-1 はじめに.....	36
II-2 調査地と調査方法.....	37
(1) 調査村の概況	
(2) 調査方法	
II-3 生業活動の比較.....	41
(1) 漁撈	
(2) 農耕	
(3) その他の生業	
(4) 漁撈と農耕への時間配分	
II-4 食生活の比較.....	55
(1) 食生活の概要	
(2) 主食の品目構成	
(3) 主食の入手方法	
(4) 副食の品目構成と入手方法の違い	
II-5 考察：現金経済に強く依存する漁撈経済.....	71

## 第 III 章 村の地先の漁撈活動

III-1 はじめに.....	76
III-2 調査方法.....	77
III-3 漁法の概要.....	79
III-4 漁撈活動の諸側面：活動時間、漁法および同行者の選択.....	92
(1) 漁撈活動時間の日変化と月変化	
(2) 漁法選択の性差	
(3) 漁法選択の季節差	
(4) 同行者の選択	
III-5 漁獲の分配と消費・流通.....	102
(1) 漁獲の分配	
(2) 魚の加工・調理と流通	
(3) 特殊な海産物の加工と流通	



III-6	家計経済と漁撈活動：漁獲に関する事例分析.....	111
	(1) 全体的な労働投入量	
	(2) 男性による労働分担	
	(3) 漁法ごとの漁獲効率の比較	
	(4) 換金専門型の漁法と融通型の漁法	
	(5) 漁獲高	
III-7	考察：アンバシラヴァ村における漁撈活動と家計経済の特質	125
	(1) 漁場環境と漁撈活動	
	(2) 家計に対する漁撈の寄与：現金獲得とおかず供給	
	(3) 複合世帯内部における分業	

## 第 IV 章 遠隔地出漁

IV-1	はじめに.....	132
IV-2	調査方法.....	132
IV-3	ナマコ採取とサメ捕獲の歴史.....	134
	(1) ナマコ採取	
	(2) サメ捕獲	
	(3) 村外での活動	
IV-4	出漁先の概況.....	139
	(1) アンザミタルカ島	
	(2) ムルンダヴァ市	
IV-5	1990 年代における遠隔地出漁の実態.....	145
	(1) アンバシラヴァ村民の遠隔地への出漁	
	(2) サメ刺網漁	
	(3) サメ刺網漁による漁獲の加工と売却	
	(4) ナマコ潜水漁	
	(5) ナマコの加工と売却	
IV-6	考察.....	161
	(1) 遠隔地出漁の経済的意義	
	(2) 遠隔地出漁以前	
	(3) 遠隔地出漁以後の生計戦略	

## 第 V 章 結論

V-1	アンバシラヴァ村の漁撈経済についての総括.....	170
V-2	市場経済の受容と漁撈活動の展開.....	171

## 謝辞

## 参考文献

- 付表 1 調査対象となった世帯による漁獲  
 付表 2 主食品目と副食品目の月変化



# 図表目次

第 I 章	図 I-1	マダガスカル島におけるヴェズの活動領域.....	11
	図 I-2	ヴェズのカヌー.....	13
	図 I-3	ヴェズの活動領域と年間降水量.....	17
	図 I-4	調査地の位置と有棘林周辺の村分布.....	18
	図 I-5	ムルンベの月間平均降水量と月間平均気温.....	19
	写真 I-1	乾燥地域における有棘林 <i>ala</i> の景観.....	20
	写真 I-2	サンゴ礁の景観.....	23
	写真 I-3	アンバシラヴァ村.....	23
	写真 I-4	修理中の家屋 <i>tsano vondro</i> .....	26
	図 I-6	調査対象となった複合世帯の家系図.....	29
	写真 I-5	敷地を囲む柵 <i>vala</i> .....	31
	表 I-1	調査対象となった複合世帯のプロフィール.....	33
第 II 章	写真 II-1	アンキリマリニカ村 (K 村) .....	38
	写真 II-2	内陸部の主な交通手段、牛車 <i>sarety</i> .....	38
	表 II-1	2 つの村における出漁日数の比較.....	42
	表 II-2	各複合世帯の漁獲量と漁獲効率.....	45
	写真 II-3	K 村の畑の景観.....	47
	図 II-1	調査地周辺の主要作物に関する農事暦.....	47
	表 II-3	各複合世帯の農地作付け面積.....	49
	写真 II-4	F 村から K 村に至る道沿いでの塩採集.....	51
	表 II-4	2 つの村における漁撈と農耕への時間配分.....	54
	写真 II-5	食事のようす.....	56
	図 II-2	主食の調理方法.....	58
	表 II-5	副食の調理方法.....	60
	図 II-3	昼食と夕食における主食品目の違い.....	63
	図 II-4	F 村における主食品目の季節的変化.....	65
	図 II-5	K 村における主食品目の季節的変化.....	65
	図 II-6	主食を現金購入した食事回数の割合.....	67
	図 II-7	2 つの村における副食品目の比較.....	70
	図 II-8	副食を現金購入した食事回数の割合.....	70
第 III 章	表 III-1	アンバシラヴァ村でおこなわれている漁法.....	80
	図 III-1	刺網のつくりと部分名称.....	80
	写真 III-1	漁撈用の小型カヌー <i>ana-daka</i> .....	81
	図 III-2	追い込み刺網の広げ方.....	83
	図 III-3	まき網のつくりと部分名称.....	86
	写真 III-2	まき網漁のようす.....	86
	写真 III-3	磯漁りのようす.....	90
	図 III-4	小潮時の出漁時間の例.....	93
	図 III-5	大潮時の出漁時間の例.....	93
	図 III-6	出漁時間の日変化.....	94
	図 III-7	既婚男女の出漁日数の季節変化.....	96



表 III-2	各漁法がおこなわれた割合.....	96
表 III-3	2 人で出漁した場合の同行者同士の関係 (1).....	99
表 III-4	2 人で出漁した場合の同行者同士の関係 (2).....	101
表 III-5	3 人で出漁した場合の同行者同士の関係.....	101
表 III-6	4 人で出漁した場合の同行者同士の関係.....	103
写真 III-4	東方のオアシス地帯へ魚を売りに行く行商人.....	105
写真 III-5	加工のための魚買い付け.....	107
写真 III-6	塩魚の加工.....	107
表 III-7	各複合世帯による漁撈活動の頻度.....	112
表 III-8	各複合世帯が漁撈に投入した労働量.....	112
表 III-9	各複合世帯の成人男性による出漁.....	116
図 III-8	漁法ごとの漁獲効率の比較.....	119
図 III-9	漁法ごとの漁獲物売却率の比較.....	121
表 III-10	各漁法により漁獲された水族.....	122
表 III-11	調査期間中の漁獲量と主食購入費の比較.....	124

#### 第 IV 章

図 IV-1	調査地の位置.....	133
写真 IV-1	かつて農作物と物々交換されていた干物 <i>vendra</i> .....	138
写真 IV-2	ムルンダヴァ市はずれのキャンプ.....	143
図 IV-2	アンバシラヴァ村民が遠隔地に出漁した期間.....	146
写真 IV-3	サメ刺網漁の獲物.....	149
図 IV-3	フカヒレとして利用されるサメの部位.....	151
表 IV-1	調査期間中にとれたフカヒレの等級別内訳.....	151
表 IV-2	アンザミタルカ島における複合世帯 F1 の漁獲.....	153
表 IV-3	サメ刺網漁と通常の網漁の比較.....	153
図 IV-4	複合世帯 F1 が遠隔地出漁によって得た漁獲.....	155
写真 IV-4	ナマコ潜水漁の獲物.....	157
表 IV-4	ムルンダヴァと村の地先における潜水漁の比較.....	160
図 IV-5	複合世帯 F2 が遠隔地出漁によって得た漁獲.....	160

# 第 I 章

## 序論



## I 1 問題の所在

### (1) 広域的な社会経済に対する漁民の対処

小規模漁業 (small-scale fishery) や零細漁民 (peasant fishermen) に関する人類学的研究 (以下「漁民研究」と略) は、海洋という自然環境条件や広域的な社会経済条件との関わりを考慮しつつ、漁民の生活を明らかにしようと努めてきた。自然環境条件との関わりについては、漁民研究の包括的なレビューをおこなった Acheson が次のように述べている。これまでの漁民研究はすべて、「海洋環境がもたらす不確実さ (uncertainty) に人類はどのように適応してきたか」という問題に答えようとしてきた (Acheson, 1981)。いっぽう社会経済条件との関わりについては、海洋人類学 (maritime anthropology) を提唱した Smith が次のように主張している。世界各地の漁撈社会が食糧増産のための近代化を迫られているが、漁民は必ずしもその変化を受け入れようとしていない。短期的な効率向上は長期的な経済の安定性をないがしろにしがちであり、漁民自身が望まないような生活様式の変化をも強いるからである。したがって海洋人類学的研究では、先験的に「伝統」を仮定せず、市場経済など広域的な社会経済との関わりの中で文化や社会が遂げていく動態的な変化を記述する必要があるという (Smith, 1977)。

とくに Smith の問題意識は、生態人類学や人類学一般における今日的な問題意識と大きく重なり合っている。初期における生態人類学は、孤立した生態系内部における人間活動と環境の均衡にもっぱら関心を向けていたが (e.g. Rappaport, 1968)、近年における研究のほとんどは、いわゆるローカルな社会がより広い社会経済的状况に対して開かれていることを前提としている。実際、孤立しながら均衡している系や、その一部である人間社会というものは、現実にはほとんど存在しない (Moran, 1990)。このため多くの研究は、市場経済の浸透を含む外的影響のもとにローカルな社会や環境が被ってきた変化を取り

上げている (Lees and Bates, 1990; 須田, 1995a)<sup>(1)</sup>。こうした中で、ローカル社会の人々が単に一方的に影響されるだけでなく、ローカルな論理を用いて状況に抵抗する事実も着目されるようになってきている。とくにポリティカル・エコロジー論<sup>(2)</sup>にもとづいた研究では、ローカルな権威と国際機関が資源をめぐる起こす軋轢 (Gezon, 1997) などが論じられている。Smith のイメージしたような、主体的対応をおこなうローカル社会像が重視されるようになってきたといえる。

また人類学一般においては、とくに世界システム論の登場 (Nash, 1981) 以降、ヨーロッパとの接触が促す文化的覚醒の過程や、ローカルな社会が世界的状況に示す抵抗や流用、適応などが盛んに論じられている (山下・山本, 1997)。これらの議論では、ローカル社会は状況に一方的に巻き込まれてしまうのではなく、状況を受容しながらも対処する主体として捉えられる (松田, 1999)。このような「文化的抵抗」論におけるローカル社会のイメージは、Smith の提起する漁民像に類似するといつてよい。

このように、Smith の提起する「広域的な社会経済状況に対処する漁民像」は現在なお重要なトピックであるが、これまでの漁民研究では正面から取り上げられてこなかった。なるほど、古典的な研究に倣い、「近代的発展」(Firth, 1966) や「技術革新と変化」(Forman, 1970) に着目した研究は多い。また近年では、市場経済の動向に応じて漁場利用が変化していくなか、ローカルな資源利用の慣行を生かしつつ水産資源を持続的に利用する方途なども模索されてきている (Ruddle and Akimichi, 1984; Berkes, 1985; Cordell, 1989; Acheson and Wilson, 1996)<sup>(3)</sup>。だが、広域的な社会経済状況の中に漁民社会を位置づ

---

(1) とくに、生業など生活様式の変化が顕著な地域ではこの傾向が強い (e.g. 田中・掛谷, 1991; 田中ほか, 1996)。

(2) ポリティカル・エコロジー論については第 III 章の「はじめに」を参照。

(3) このような研究は、水産資源についてのみならず、林業資源や灌漑用水、牧草地などの利用一般に関して広くおこなわれている (Feeny *et al.*, 1990)。この動向は、共有資源研究 (study of common property) という学際的研究分野を形成するに至り、漁民研究は其中で重要な一角を占めている (National

けるだけでは、漁民の主体性は明確にならない。むしろ逆に、これまでの研究から浮かび上がるのは、いかなる条件下でも一様の過程で市場経済への依存を強めていく受動的な漁民像である。Smith が企図したように漁民社会の動態的变化を論ずるためには、まずこのような漁民像が妥当かどうかを再考する必要がある。そのためにも、市場など広域的な社会経済条件との関わりを考慮しつつ、さまざまな地域における漁民の動向を具体的に記述し分析する必要がある。

本論文では、ヴェズ (Vezo)<sup>(4)</sup>と呼ばれるマダガスカル南西部の漁民を取り上げ、その生業と家計経済について記述することを第一の目的とする。そして第二に、①海洋という不確定な自然環境と、②市場など外部に由来する社会経済条件という2つの条件に対処しつつ、ヴェズの人々がいかに生計を成り立たせてきたかを明らかにする。

## (2) ヴェズ漁民に関する研究動向

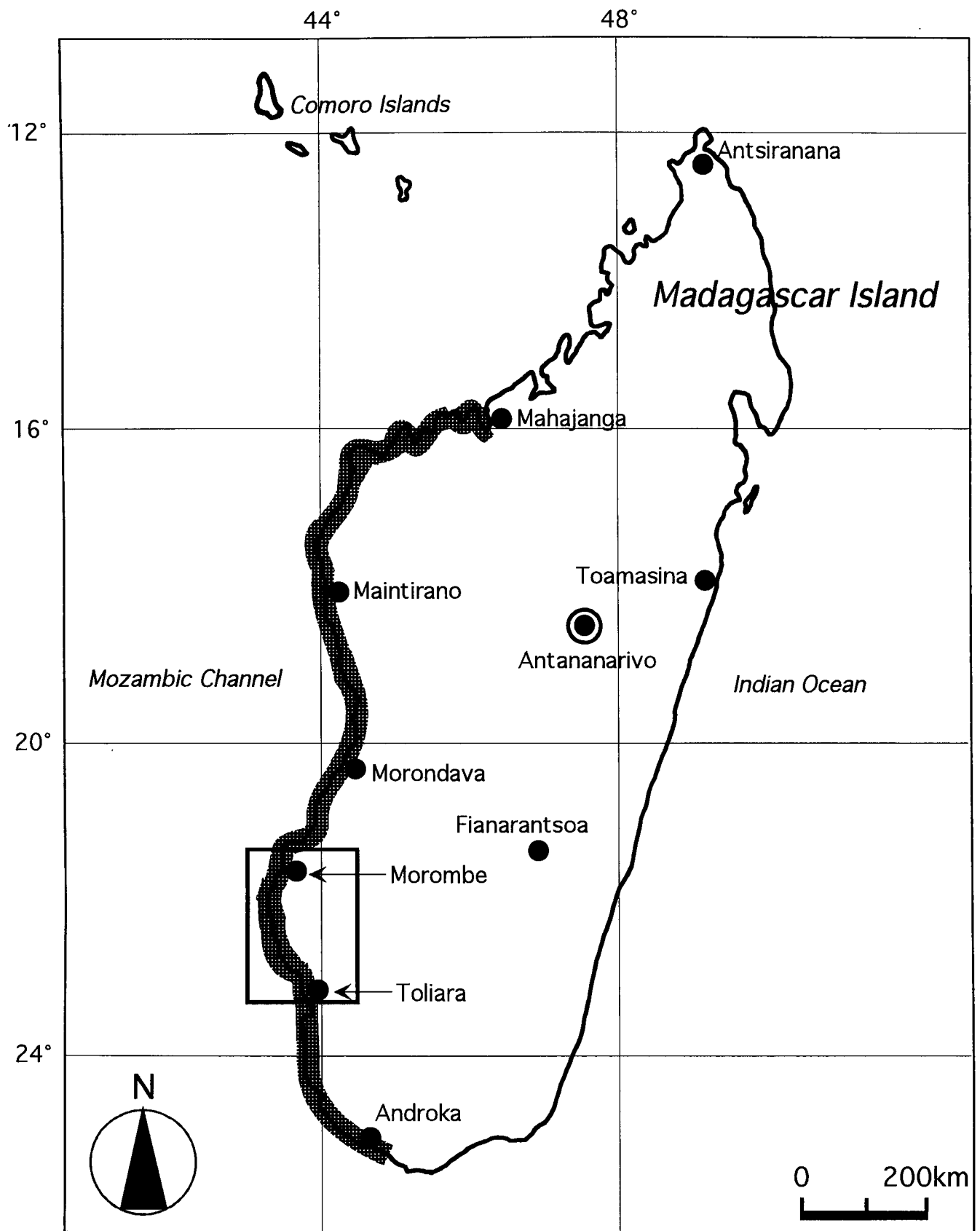
図 I-1 にヴェズの村や漁撈キャンプのある領域を図示した。居住域が海岸部に限られていることからわかるように、ヴェズは沿岸漁撈をおもな生業基盤とし、農耕や牧畜をほとんどおこなわないと言われてきた (Grandidier et Grandidier, 1908: 250; Koechlin, 1975a: 23)。厳密には、都市部に住み漁撈をおこなわないヴェズや、農耕を主な生業基盤とするヴェズも多いのだが (第 II 章参照)、大多数のヴェズ村落で漁撈が主な生業となっていることは疑いない。ヴェズのように1つの呼称で名指される人々が農耕や牧畜以外の生業に特化している例

---

Research Council, 1986; McCay and Acheson, 1987; Berkes, 1989; Bromley, 1992)。

(4) マダガスカル語の正書法では *o* が [u] と発音され、*u* の文字は用いられない。本論文では、マダガスカル語のローマ字表記にあたって原則的に標準語の正書法に従ったが、以下の点は正書法と異なる。正書法において *-ka* および *-tra* と表記される語末の音節は、ヴェズ方言の発音により近い *-ke* および *-tse* と表記した。ただし、地名についてはこのかぎりでない。また、正書法において [n] と区別されない [ŋ] の音は、*ñ* の文字であらわした。





図I-1 マダガスカル島におけるヴェズの活動領域（網がけ部分）  
 （Koechlin, 1984 をもとに作成。太い枠内は本研究の調査地、図I-4参照）

は、マダガスカルにおいては特殊である<sup>⑤</sup>。

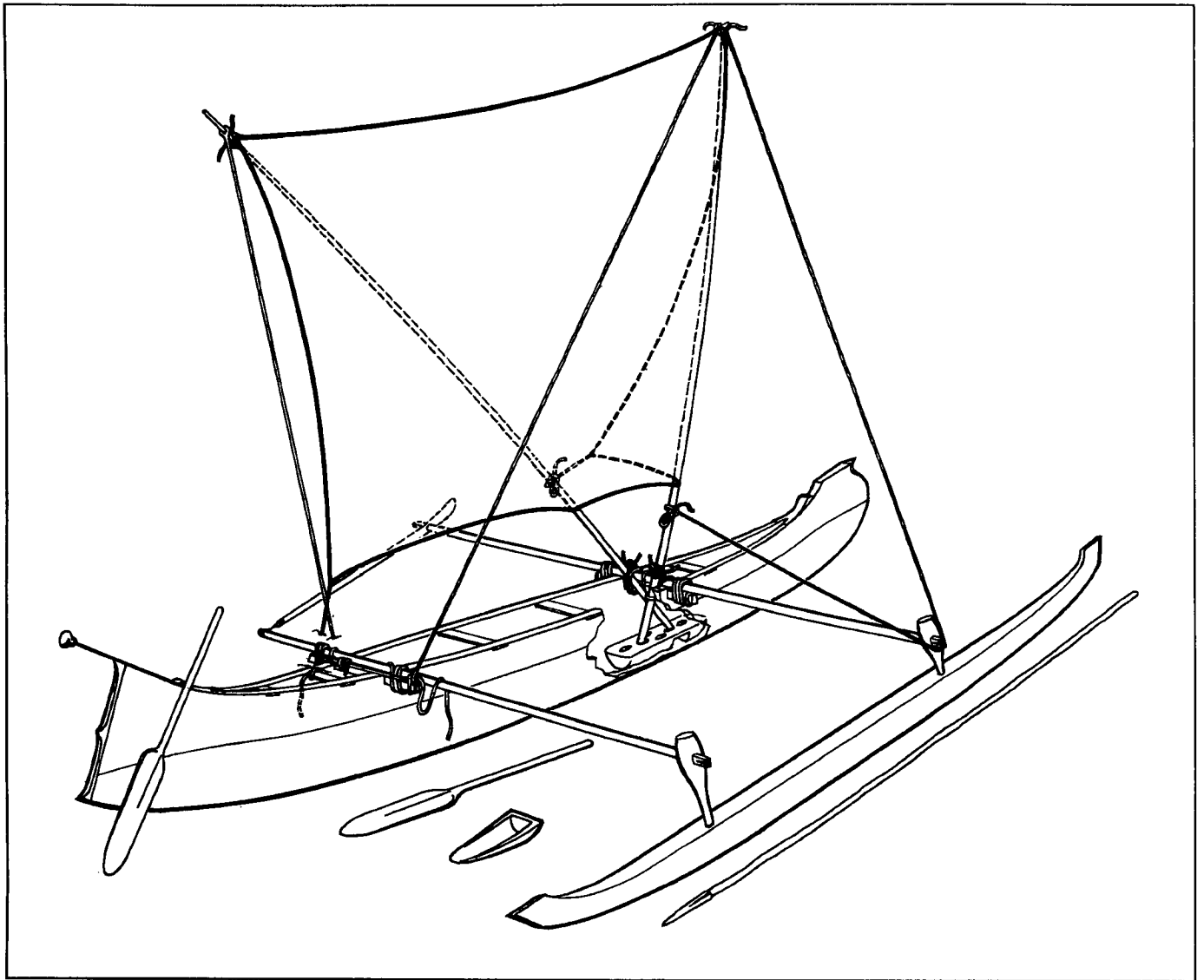
ヴェズが漁撈や航海に用いるカヌー*laka* (図 I-2) はシングル・アウトリガー式で、インド洋や太平洋の各地で用いられるものと類似している (Hornell, 1920; Faublée et Faublée, 1950; 戸川, 1977)。このためヴェズの文化や言語は、オーストロネシア系住民がマダガスカル島へ移住してきたルートを明らかにする手がかりとして注目されてきた。たとえばある言語学者は、インドネシア海域で漁撈に従事するバジャウ人 (Bajau) の分派したものがヴェズであり、ヴェズという名称はバジャウの転訛であると提唱している (Dahl, 1991)。彼によれば、かつてバジャウはインドネシア海域から東アフリカまでの海上交易にたずさわっていた。そして、スマトラ島に留まっていた原マダガスカル人の一団のマダガスカル入植に協力し、自らもマダガスカルに居住するようになったのだという。また、ヴェズの漁撈文化が東南アジア島嶼部の影響下にあるという議論もある (Nishimura, 1984)。ただし、これらの説を支持する資料は十分でない。このような議論を進展させるためには、今後における研究の進展と学際的検討が必要であろう。

ヴェズ社会についての詳細な報告は、Engelvin (1936) によるものが最初である。ラザリスト会修道士として派遣された彼は、ヴェズの暮らしを長期にわたって観察し、ヴェズの風俗習慣や信仰を記載するとともに、白人との接触後にキリスト教がどのように受容されているかを報告した。この報告を受けて、呪術 (Milot et Pascal, 1952) や憑霊信仰 (Koechlin, 1971; 1973) など、ヴェズの宗教慣行にかかわる一連の論文が発表されている。

人類学者による本格的な民族誌は、1970年代を待たねばならない。Koechlin

---

⑤ マダガスカル島において農耕・牧畜をほとんどおこなわない集団として、ヴェズのほか、ミケア (Mikea) という人々が知られている。彼らは、ヴェズ村落の分布する地域のすぐ東側に隣接して住んでおり、狩猟採集に特化した生業をいとなんでいるといわれてきた (Molet, 1958; Fanony, 1986; Stiles, 1991; 1998)。しかし、1990年代になって筆者が同地を訪れたところ、多くのミケアがトウモロコシ栽培に従事していることがわかった。



図I-2 ヴェズのカヌー (出典：ラクトゥマララ, 1985)

(1975a; 1984) は、「半漂海民の生態系の研究」という副題のもとに、人類学者として初めてヴェズの民族誌をまとめた。彼は、調査地における生物相を把握するとともに、それぞれの動植物の方名や利用法について記載するなど、ヴェズと海の関わりについて基礎的な資料を残した。しかし残念なことに、彼の記載は民族知識的な面にとどまっており、生業や経済についての記載や考察は一面적이다。彼はその後、民族技術や身ぶりの研究に関心を移してしまい (Koechlin, 1975b; 1987; 1992; Koechlin et Matras, 1971)、海との関わりからヴェズを論ずる視点を放棄してしまう。

1990年代からヴェズに関する研究を発表し続けている Astuti (1991; 1995a; 1995b) は、ヴェズ自身によるアイデンティティの問題について考察した。それによれば、ある人がヴェズであるかどうかはその人の出自には関係ない。海で生活するために必要な振る舞いを身につければ、人はヴェズになるというのである。彼女の記述はアイデンティティの問題にとどまらず、ヴェズの日常生活や親族関係・葬制にまでおよび、体裁よくまとまっている。だが、ヴェズのアイデンティティの根幹である漁撈の技術的側面や経済的側面については、不十分にしか記載されていない<sup>⑥</sup>。海の生活にアイデンティティの基礎をおくヴェズの社会を理解するためにも、漁撈活動をより詳細に記述するとともに、生業や経済の分析をおこなうことが不可欠であろう。

人類学以外の分野では、漁村発展をも視野に入れつつ、UNDP や FAO などの国際機関とマダガスカル政府がヴェズの漁撈について合同調査をおこなっている (e.g. Dasylyva et al., 1994)。また、地域経済に関する研究 (Ottino, 1963) や乾燥地帯の生活に関する地理学的研究 (Battistini, 1964) でも、農民との比較のためにヴェズの生活が簡単に記述されている。これらの研究には漁撈活動に関する重要な情報が含まれているのだが、いずれも住み込みによるインテンシブな調査が不十分であるため、たとえば漁撈の頻度など基本的な事項も不明

---

<sup>⑥</sup> Astuti はこのほか、性についてのヴェズの考え方 (Astuti, 1993; 1998) や、墓の設置と墓標の彫刻とのかかわり (Astuti, 1994) などについて論文を発表している。



なままである。また、従来の人類学的研究と同様に、市場経済などの動きに対する漁民の具体的対応が十分に述べられていない。

以上から、ヴェズ漁民に関するこれまでの研究では、漁民研究において問題とされるべき2つの点が軽視されてきたといっていよい。その一つは、とくに漁撈活動の場面における人と海洋環境の関わりを論ずることであり、もう一つは、広域的な社会経済条件に対する漁民の対応を論ずることである。これらの点を念頭に、筆者は、現地調査の結果をいくつかの報告にまとめてきた。ヴェズの漁村と農村における生業や食生活の違い（飯田, 1997a; 1997b）、ヴェズ漁撈に関する近年の変化（飯田, 1998a）、外部との関わりにより成り立ってきた漁民の生計（飯田, 1998b）などについてである。本論文では、これらの報告をもふまえつつ、より詳細な資料を提示するとともに、より包括的な議論をおこなう。

### (3) 本論文の構成

以下ではまず調査地の概況について述べ、続く第Ⅱ章では、近隣の農村と比較しながら調査漁村の生産活動や食材消費の概況を述べる。そして、漁村の家計が農村とは違った形で現金経済に大きく依存していることを論ずる。第Ⅲ章では、主要な生業である漁撈活動のうち、とくに村の地先で日常的におこなわれるものについて記述し分析する。そして、生業や家計経済のあり方に反映している自然的背景と社会的背景について指摘し、村の地先における漁撈の特質について論ずる。第Ⅳ章では、ヴェズの家計収入としてきわめて重要な、遠隔地における季節的な漁撈活動について述べる。そして、1970年代には盛んでなかった村外出漁が一般化していく時代背景について指摘し、ヴェズにおける家計維持のあり方が新たな局面を迎えつつあることを論ずる。最後に第Ⅴ章では、村の地先における漁撈活動と遠隔地出漁という、まったく性格の異なる2種類の活動がヴェズの暮らしにとって持つ意味について論ずる。そして、農民や賃金労働者でなく漁民としての立場を堅持しつつ、自然環境や社会経済条件の変化に応じて多様な漁撈をおこなってきたヴェズの「主体性」について結論する。

## I-2 調査地の概況

### (1) 地理的環境

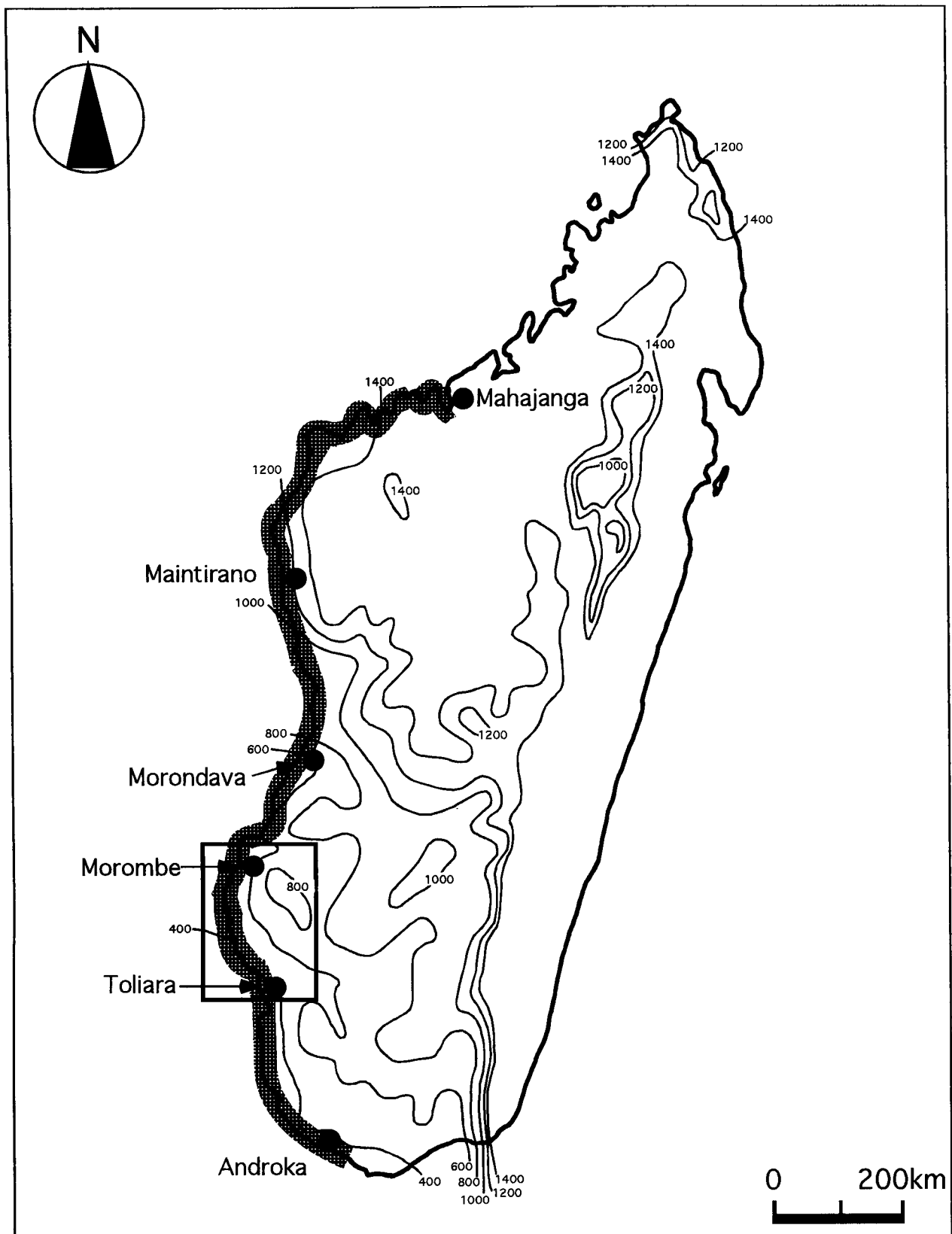
図 I-3 に示すように、ヴェズの活動領域は、マダガスカル島内でもっとも乾燥した南西部地域（Griffiths and Ranaivoson, 1972）を中心としている<sup>(7)</sup>。マダガスカル島南西部に降雨量が少ないのは、南半球の赤道付近で恒常的に吹いている南東貿易風のためである。南東貿易風は中央高地でさえぎられて上昇し、中央高地の東側に多くの降雨をもたらす。いっぽう、中央高地を越えて西側に下りてくる風は乾燥しており、島の西海岸では降雨が少ない。なかでも南西海岸部は、11月～4月頃に赤道から南下して降雨をもたらす熱帯収束帯にも影響されにくいいため、雨季にも雨が少ない。主な調査地となったアンパシラヴァ村（Ampasilava; 図 I-4）はこのような乾燥地域の海岸に位置し、行政的には Toliara 州 Morombe 県 Befandefa 郡に含まれる<sup>(8)</sup>。県庁所在地ムルンベ（Morombe）の気象観測データを図 I-5 に示したが、それによると、年間降水量が 453.7mm、年間降雨日数はわずか 32 日である。雨季と乾季の区別は明瞭で、月間降水量が 30mm を超えるのは 12 月～3 月の 4 ヶ月のみである。

植生については、乾燥地に適応した植物が優占する有棘林 *ala* (thorn bush) が広くみられる（写真 I-1）。マダガスカルにおける有棘林の分布の限界は、年間降水量が 600mm の線にほぼ対応している。このように降水量が少ないため、有棘林地帯では一般的に農業生産性が低く、人口密度も低い。有棘林において

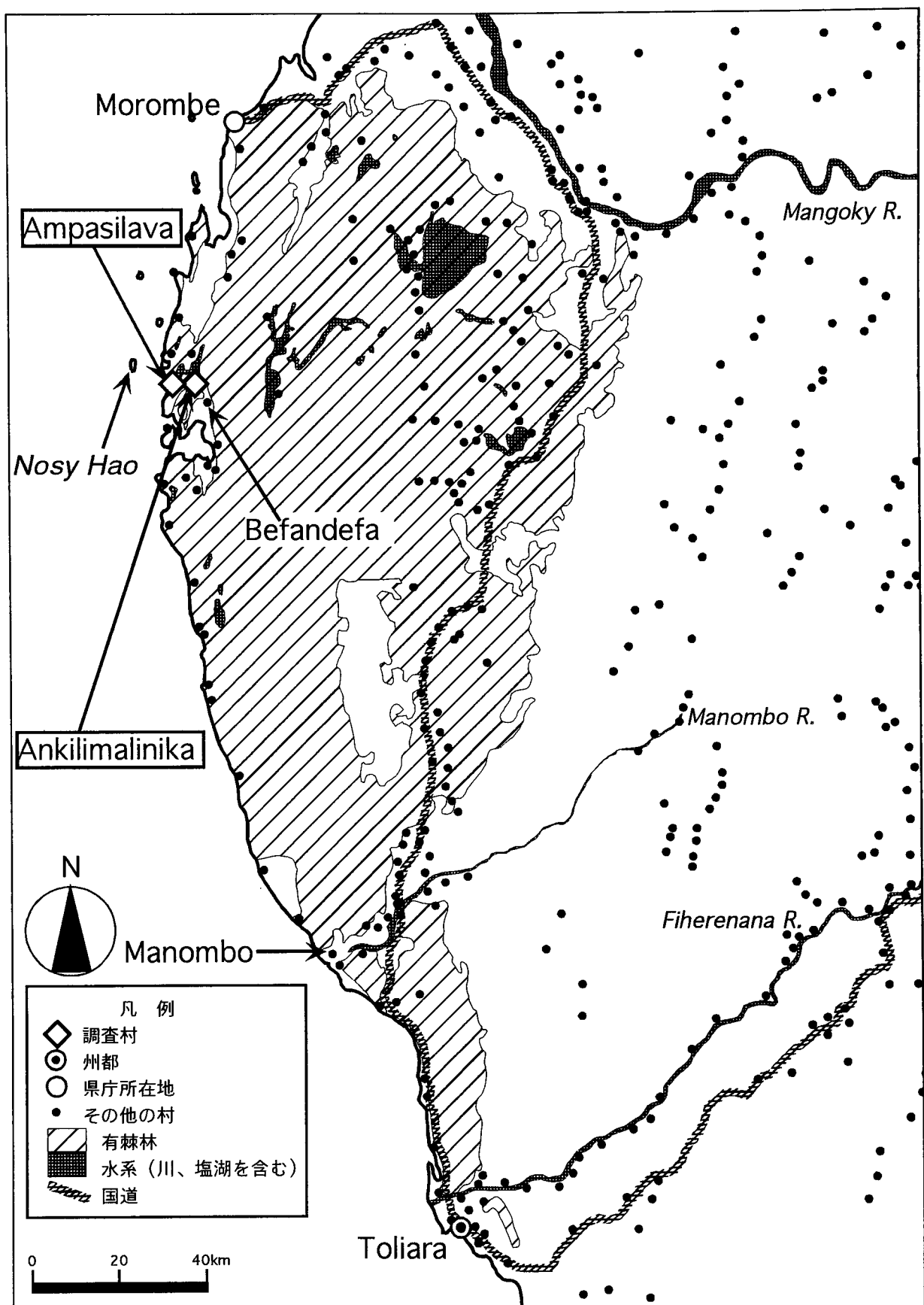
---

<sup>(7)</sup> 図 I-4 を見ると、年間降水量が 1000mm を超える北部地域でもヴェズは漁撈をおこなっている。しかし、そこではヴェズ村落の密度は低く、活動も比較的最近に始まったようである。たとえば、筆者の聞き込みによると、マインティラヌ（Maintirano）のヴェズ村落はマダガスカル独立（1960 年）後にムルンベ付近からの移住者によって形成されたい。つまり、ヴェズの活動の中心は南部地域のトゥリアラ（Toliara）およびムルンベの近辺であり、年間降水量が 500mm に満たないといってよい。

<sup>(8)</sup> マダガスカル共和国の行政制度では、国土は六つの州 *faritany* に分割され、州はさらに県 *fivondronana* に、県はさらに郡 *firaisana* に分割されている。

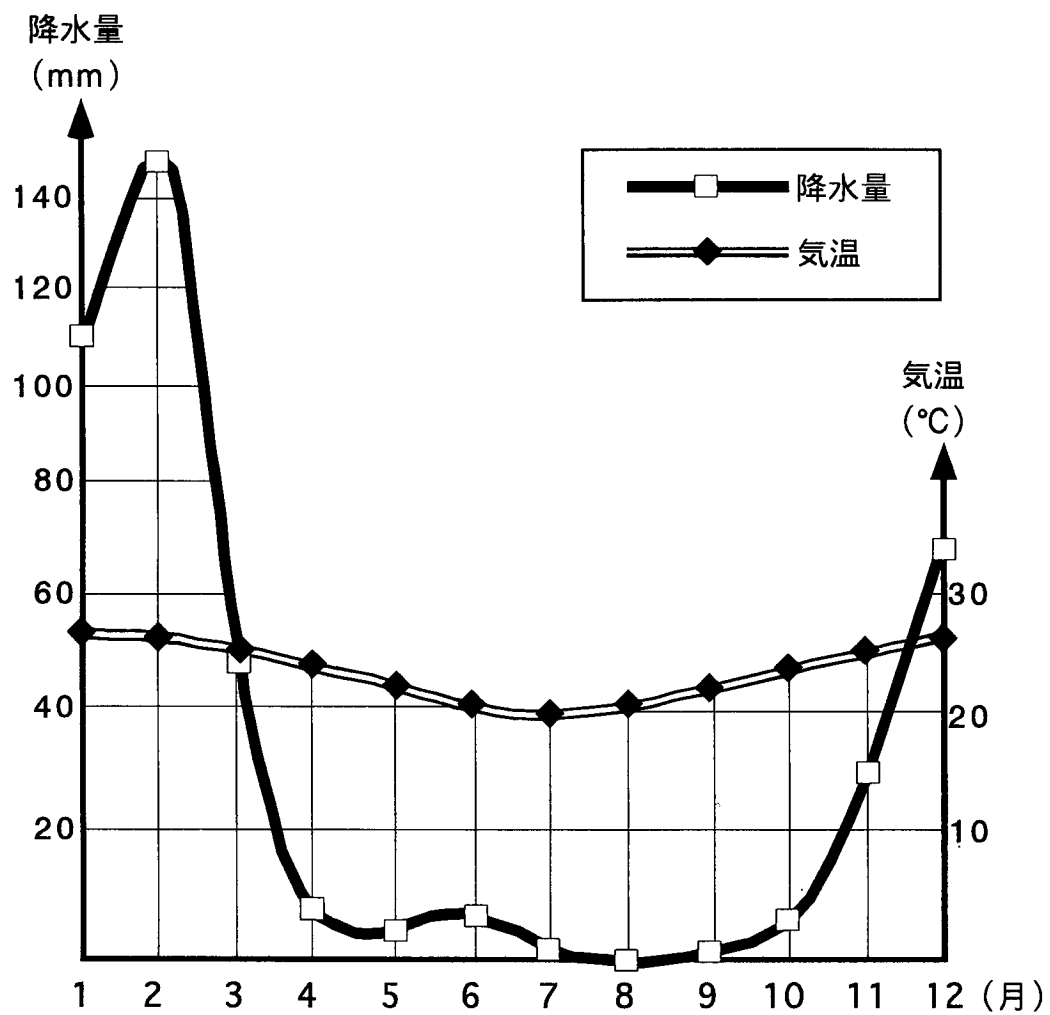


図I-3 ヴェズの活動領域（網がけ部分）と年間降水量（1400mm以下のみを表示）  
（Association des Géographes de Madagascar, 1969-1971 をもとに作成）



図I-4 調査地の位置と有棘林周辺の村分布  
 (Foiben-taosarintanin' i Madagasikara [1990, 初版1964] 発行  
 50万分の1地勢図をもとに作成)





図I-5 ムルンベの月間平均降水量と月間平均気温  
 (Association des Géographes de Madagascar, 1969-1971 をもとに作成)



写真 I-1 乾燥地域における有棘林 *ala* の景観

人口密度が高いのは、次の4つの地域に限られる（図 I-4 参照）。第一に、有棘林北辺のマングキ川（Mangoky）沿岸である。この川はマダガスカル四大河川に数えられる大河であり、沿岸では大小の灌漑によって水田が発達しており農業生産が高い。第二に、有棘林分布域の南端に近いマヌンブ川（Manombo）周辺である。ここでも灌漑農業がおこなわれていて人口密度が高い。第三に、人口密度の高い地域が国道9号線沿いにもあるが、これは、国道の位置する有棘林の東縁において、ベファンゼア川（Befandrea）<sup>(9)</sup>などの小河川がオアシスを形成しているためである。これらの小河川は西の海岸へ向かって流れるが、海岸近くでは伏流となって地下を流れており、オアシスを形成しない。したがって、オアシス地帯は有棘林東方に限られている。そして第四に、調査をおこなった海岸部である。これは有棘林の西縁に位置する。このように、人口密度が高い地域は、有棘林を包囲するかたちで分布している。

この地域の海岸部の特徴としては、サンゴ礁<sup>(10)</sup>が発達していることがあげられる。南西海岸部のサンゴ礁は、マダガスカル島の南端に近いアンズカ（Androka）まで断続的に分布している。マングキ川河口から南約70km 辺りまでは、海岸線近くに発達する裾礁<sup>(11)</sup>と、陸地からやや離れて海岸線と平行に発達する堡礁が交互に現われるのが特徴である（Pichon, 1972）。調査村の海岸は砂浜になっているが、堡礁の一部である。海岸線近くの礁原<sup>(12)</sup>や礁池のほ

---

<sup>(9)</sup> 標準語における [d] の反り舌音 *dr* は、ヴェズ方言では [dz] と発音されるので、カタカナ表記ではザ行の字をあてた。

<sup>(10)</sup> 中井（1990: 64）によれば、サンゴ礁とは「造礁サンゴをはじめとする造礁生物によってつくられた」地形的構造であり、かつ「潮間帯に位置する平坦なサンゴ礁原（reef flat）と、明瞭な遷急点によって境され、急勾配で水深を増す礁斜面（reef slope）」に特徴づけられる。

<sup>(11)</sup> 裾礁（fringing reef）とは、「幅が数百 m 以下の連続性のよい礁原が陸地を取り囲むように文字通り裾状に発達している」サンゴ礁である。これに対し堡礁（barrier reef）は、「陸地と礁外縁の礁原との間の水深が 10m（中略）を超えるような、深くて広い礁湖をもつ」サンゴ礁である（堀, 1990: 10-11）。

<sup>(12)</sup> 礁原、礁池、礁湖はいずれもサンゴ礁地形を指す語である。礁原については注 10 を参照。礁池（moat）は礁原の一部で、低潮時でも水面下にあるような水深 0～3m の場所のことである（中森・井龍, 1990: 39-40）。礁湖（lagoon）は、サンゴ礁と陸地またはサンゴ礁のみによって囲まれた水域を指す。

か、約 5km 離れたヌサオ島 (Nosy Hao) に至るまでの礁湖は、好漁場となっている (写真 I-2)。なお、河川の河口付近にはサンゴ礁に代わってマングローブ林 *honko* が発達するが、調査村の地先付近にはない。

調査地であるアンパシラヴァ村 (写真 I-3) は、県庁所在地ムルンベの南約 50km の海岸に位置する。1996 年の調査当時、世帯数は 37、人口は約 200 人であった。カトリック系キリスト教会の運営する小学校の分校があるほかは、目立った施設や公的機関はない。小さな雑貨屋が 1 軒あるが、その主人も漁撈をまったくおこなわないわけではない。また、畑を持つ者もあるが、他村の農民のように広い耕地を持つわけではなく、家計に対する農耕の寄与は少ない。アンパシラヴァ村の生活の基盤は、サンゴ礁における漁撈にあるといえる (第 II 章参照)。

なお、アンパシラヴァ村の比較対象として、農村であるアンキリマリニカ村 (Ankilimalinika) でも調査をおこない、家計経済などについて分析した (第 II 章)。また、アンパシラヴァ村民の出漁先であるアンザミタルカ島やムルンダヴァ市でも調査をおこない、遠隔地出漁の実態を分析するための資料を得た (第 IV 章)。これらの調査地については後述する。

## (2) ヴェズの言語と社会

ヴェズの人々が話す言語は、マダガスカル語南西部方言群に属する。本論文では彼らの言語をヴェズ方言と呼ぶことにする。ただし、ヴェズ方言と他の方言を明確に区別する基準はなく、両者の区別はあくまで漠然としたものである。ヴェズ方言は地域によって微妙な差異があるいっぽう、隣接地域に居住するマシクル (Masikoro) の言語にも類似しているからである。筆者はマダガスカル語習得期間の大部分をアンパシラヴァ村で過ごしているので、調査の際に用いたヴェズ方言はアンパシラヴァ村の方言に近いといっていよい。

ヴェズの人々の多くは、マダガスカルに 18 あると言われる民族集団 *karaza* (もしくは *foko*) の中にヴェズが含まれると考えている。しかし、これまでの





写真 I-2 サンゴ礁の景観（小型漁網で漁をするアンキリマリニカ村の漁師）



写真 I-3 アンパシラヴァ村

多くの研究者によると、ヴェズは、サカラヴァという「民族集団のひとつ」の下位集団にすぎない (e.g. Koechlin, 1975a: 26)。彼らによれば、ヴェズがサカラヴァと区別されるのは、漁撈という生業に強く依存しているためだという。ヴェズを独立した民族集団と見なすかどうかはさておき、ヴェズの生活が海や漁撈と深く結び付いていることはまちがいない (Astuti, 1995b)。ヴェズ自身もそれを認めている。ヴェズという言葉は「(カヌーを) 漕げ」という動詞命令形と同じであり、名詞としては「漁師」「海のことをよく知る者」という意味でも使われる。

ヴェズの人々は、マダガスカル島西部一帯に 17 世紀頃成立した強大なサカラヴァ王国の中で独自の社会的地位を保っていた可能性があるが、詳しいことは明らかでない (cf. Astuti, 1995a: 72)。確実なのは、ヴェズの社会内部で階層化が進んでいたと思わせるような報告がないことである。このことから、ヴェズ社会は古くから無頭制社会であったと考えられてきた。

遠隔地に居住しているヴェズどうしを文化的に結びつける営みとして、先祖に対する各種の儀礼がある。出自を同じくするヴェズはハズマンガ *hazomanga* (「青い木」の意) と呼ばれる木製の柱を共有しており、一族の最年長者が住む村にこれを立て、悪い事が起こった時や初めての子が生まれた時などにそこで供犠をおこなう<sup>(13)</sup>。しかし日常生活においては、このような出自集団が政治的・社会的に意味を持つ場面は多くない。本論文にとってはむしろ、親子関係やキョウダイ関係にもとづく居住集団こそ経済単位として重要である。以下の 2 節では、このような経済単位についての概略を述べる。

### (3) ヴェズ社会における世帯

もっとも基本的な経済単位は、食物を調理して消費する単位である。以下ではこれを「世帯」と呼ぶことにしよう。ヴェズの社会では、原則として、夫婦<sup>(14)</sup>

(13) このことについての詳細は、Koechlin (1975a: 126-130) を参照。

(14) ヴェズのあいだでは一夫多妻や一妻多夫はほとんど見られない。ただし、複数の村を生活の拠点とする



と未婚の子供たちから成る核家族が世帯として機能している<sup>(15)</sup>。それぞれの世帯は、主食となる農作物や副食となる魚、その他生活必需品などをおのおの調達しており、家計の単位であると考えてよい。世帯はまた、食事だけでなく1つまたは複数の家屋 *tsano* をも共有してそこに起居するので、最小の居住集団という側面も持っている。というより、家屋を共有する者たちが調理と家計を同じくするのだと言った方がよい。

筆者が調査地近辺で見た家屋の多くは、次のような形式に作られていた（写真 I-4）。家屋の大きさは南北 4m、東西 3m ほどのものが多い。西側（海側）の壁の北の方に入り口がある。寝台は南の壁に接するように置かれ、東を頭にするように寝る。家屋の骨格は木で組まれ、屋根と壁はガマ *vondro* の茎や葉で葺かれている<sup>(16)</sup>。床がない代わりにゴザが敷いてある。このような家屋を夫婦は最低1つ所有しており、他に炊事用の小屋 *lakoziny*（フランス語の *la cuisine* に由来）を所有していることも多い。炊事小屋は、出入りが便利のように家屋の西側に建てられ、東に入り口がついているのが普通である。幼少の子供たちは両親と同じ場所で眠るが、思春期に達して一人前の仕事を受け持ち、若者（男の場合は *pamaraky*、女の場合は *somonjara*）と認められるようになると、同性のキョウダイやイトコらとともに別の場所で眠るようになる。成人や若者が

---

男性には、それぞれの村に身の回りの世話をする女性がいることがある。これらの女性は「妻 *valy*」と呼ばれることが多いが、正式な結婚の手続き *fomba fanambalia* にのっとってすべての妻を娶ったわけではなく、1人を除いては非公式な「愛人」の位置づけにあるらしい。正妻と「愛人」が同じ村に住むという事例は、筆者の知るかぎり、ない。ヴェズにおける結婚の手続きに関しては、Koechlin (1975a: 138) および Astuti (1995a: 65) を参照。

<sup>(15)</sup> ただし、一度結婚した子供が配偶者と離婚したり死別したりした場合、「未婚者」として親のもとに帰って暮らすことがしばしばある。この子供にさらに子供が居た場合、食事と家屋を共有する「世帯」は3世代にわたることになる。娘が結婚しないまま出産した場合も同様である。

<sup>(16)</sup> ガマの茎や葉を利用したこの家屋 *tsano vondro* の建て方は、Koechlin (1975b) が詳しく報告している。このほか、壁を石膏で固めた家屋 *tsano sokay* や、壁にトタン板を用いた家屋 *tsano kaky* もある。これらはいずれもガマ製家屋よりも大きく、床がある。これらの家屋は大型で材料費がかかるため、村落部には少数しかないのがふつうである。



写真 I-4 修理中の家屋 *tsano vondro*

異性の親あるいは異性キョウダイと同じ家屋で眠ることは禁忌 *faly*<sup>(17)</sup>だからである。これら若者の寝場所は事情により異なるが、両親の炊事小屋や親戚の空き家であることが多い。しかし昼の間は、若者たちも各自の両親のもとに集まり、そこで食事をとって生活する。そして、結婚すると自分の家屋を持ち、新たな世帯として独立するようになる。

このように、世帯は家計や居住の単位として機能しているのだが、世帯に相当するヴェズ方言が存在するわけではなく、家屋を共有する (*miharo tsano*) という関係として言い表されるにすぎない。1つの家屋で生活をともにするのは親子 *mpianake* であるとヴェズ自身が説明することもあるが、異なる家屋に住んだり家計を別にするからといって親子関係が断ち切れるわけではない。つまり、世帯をフォークカテゴリーと見なすことはできないのだが、これに着目して調査を進めることにはいくつかの利点がある。第一に、食事の事例を集める際には、調理の単位である世帯をすべて訪問すれば重複がない。次節で述べるように、いくつかの世帯が集まって共食をおこなう場合もあるが、その場合でも調理は世帯ごとにおこなわれている。このため、食生活聞き込み調査(第II章)では、すべての世帯を対象とした<sup>(18)</sup>。第二に、すべての個人は同じ世帯の構成員の居場所や行動を熟知しているため、すべての世帯を訪問すれば不在の者の行動をある程度把握できる。以下の出漁聞き込み調査(第II章、第III章)や活動時間調査(第II章)においては、すべての世帯を訪問するという方法をとった。

---

(17) マダガスカルにおいては、家系ごとに禁忌となっている食物のほか、婚姻が禁じられた親戚関係にある異性、習慣的な手続きからの逸脱、あるいは単なる不作法などが一括して *fady* (ヴェズ方言では *faly*) と呼ばれている (cf. Ruud, 1960; 森山, 1996)。

(18) 食事をともにするという観点から世帯を区別した結果、複数の世帯と見なしうるところを1つとして扱ったケースが2つあった。第一に、親が年老いてしまって子ども夫婦の世話になっているケースである。この場合、老人を子ども夫婦の世帯に含めて扱った。第二に、未婚の姉と、未婚であるが子供を持つ妹が1つの家屋に起居していた場合である。この場合、妹の世帯に姉を含めて扱った。

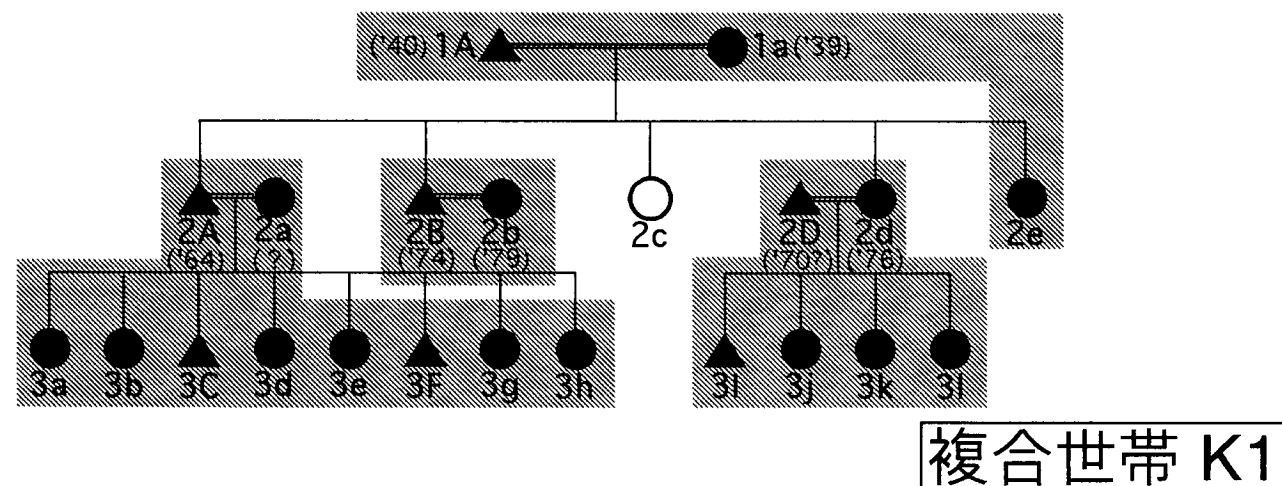
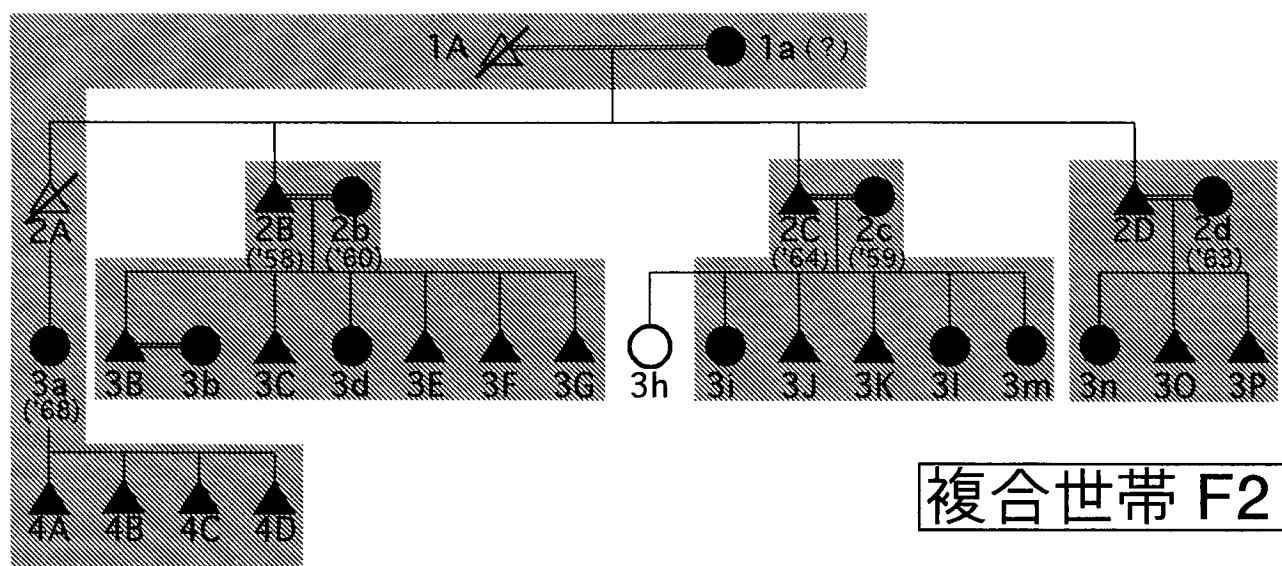
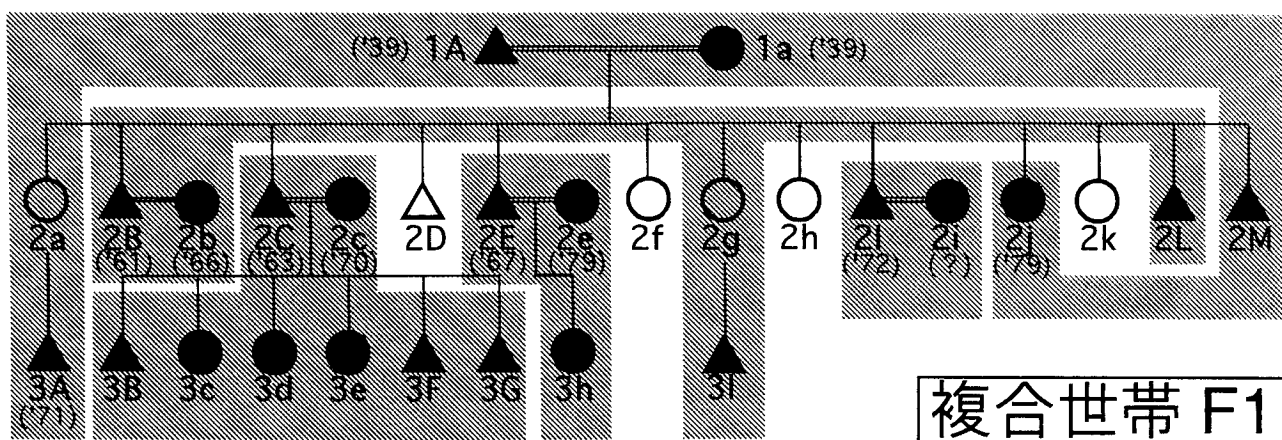
#### (4) ヴェズ社会における世帯間協同

世帯は家計の単位として重要ではあるが、複数の男性による協同を必要とするような漁撈活動では、世帯どうしの間でも労働力がやりとりされる。また、とくに頻繁に協同する世帯に対しては、一緒に出漁しなかったときにも漁獲が分配されるなど、物資の面でのやりとりも頻繁である。つまり、複数の世帯のまとまりが、世帯より上位の家計単位として機能する場合がある。以下ではこのような家計単位を複合世帯と呼ぶことにする。

複合世帯としてまとまる世帯の相互関係や、労働力や物資の具体的なやりとりの頻度は、場合によりさまざまである。しかし概ね、複合世帯内部の世帯は親子やキョウダイの関係により結びついており、家屋が互いに隣接し合う傾向にある。また、他の世帯に対するよりも頻繁に漁獲物が分配される傾向もみられる。図 I-6 に示した 3 つの複合世帯の具体例からこれを示そう。それぞれの複合世帯の内部では、まず漁獲物分配の面において、他の世帯に対するよりも頻繁なやりとりがあると筆者には思われた。とくに、網漁など比較的多くの漁獲があがる漁をおこなった場合、複合世帯内の世帯に漁獲が分配されないような例は稀であった。これに対し、他の世帯に対しては漁獲は現金で売却されるのがふつうであり、漁獲が分配されたのは、漁獲が多くかつ貰い手が明確に分配を乞うという特別な場合のみであった。

図 I-6 から、まず、複合世帯内部の世帯は夫婦と未婚の子孫によって構成されるといえる。唯一の例外は、F1 の成員 2B を中心とする世帯である。2B の弟にあたる 2L や甥にあたる 3I は、本来ならば直系の父祖 1A と同じ世帯に属するはずであるが、2B には子がないため、2L や 3I を養取したのだという<sup>(19)</sup>。この図から読み取れることの第二は、世帯の中心となっている夫婦のいずれかが、例外なく他の世帯の一員と親子またはキョウダイの関係にあることである。

<sup>(19)</sup>なお、子の養取にあたっては、第一子が生まれた場合と同様、子の実母の祖先に対して供犠 *soro anake* がおこなわれたという。*soro anake* に関しては、Koechlin (1975a: 133) および Astuti (1995a: 92) を参照。



凡例 ■ : 村に居住している者  
□ : 村に居住していない者  
☒ : 故人  
■ : 世帯の範囲

2C : 個人番号 (数字は世代、  
大文字は男性、小文字は女性)  
('70) : 生年

図I-6 調査対象となった複合世帯の家系図

拡大家族の一部が複合世帯として機能しているといってもよい。このことから、多くの複合世帯は、以下のように世帯が成長し分裂する過程で形成すると考えられる。世帯の一員である子供たちは、結婚すると親の世帯からは独立するが、しばしば親の家屋の近くに新しい家屋を建て、漁をおこなう際に労働力を融通し合ったり漁獲物を与え合ったりしながら親の世帯と親密な関係を保ち続ける<sup>(20)</sup>。

キョウダイ関係は複数の世帯を複合世帯としてまとめあげるが、逆に、キョウダイであれば同じ複合世帯に属するとは必ずしもいえない。例えば、F1の成員1Aには父母を同じくする兄がおり、同じ村の隣接した敷地で暮らしているが、この兄の世帯やその子たちの世帯に対してF1の各世帯が労働力や物資を融通し合うことはほとんどない。1Aとその兄は、結婚してしばらくは労働力や物資をやりとりしていたのだが、両親が死んでそれぞれの子や孫たちが増えてくるに及び、敷地を分けて境界に木の柵を立て、労働力や物資のやりとりが次第に減っていったのだという。つまり、複合世帯の規模は状況によってさまざまであるが、一定の規模を超えると複合世帯は分裂する。おそらく、日常的な協同の規模を超えて大きくなると成員間のコミュニケーションがとりにくくなり、労働力などのやり取りもうまくいかないためであろう。この兄弟の例から考えれば、複合世帯の規模がもっとも大きくなるのは、両親が高齢になった頃である。したがって、1つの複合世帯が10以上の世帯から成ることは稀であろう。

複合世帯の範囲は、漁獲物や労働力のやりとり以外の面でも明確な場合がある。敷地 *lakoro* (もしくは *foko*) に巡らされている木の柵 *vala* などその例である(写真 I-5)。図 I-6 の例では、家屋密度の比較的低い F2 や K1 の敷地に柵は巡らされていなかったが、F1 の周囲は木戸のついた柵で囲まれていた。なお、

<sup>(20)</sup> ヴェズの社会では夫方居住の傾向が強いため、ここで言う「子供たち」は男性である場合が多いが、それはあくまで傾向である。妻方居住の例は決して珍しくないし、どちらの両親とも関係ないまったく新しい土地で夫婦生活が営まれることもある。したがって、居住集団内の世帯は父系的な血縁で結びつく傾向があるものの、決して厳密ではない。





写真 I-5 敷地を囲む柵 *vala*

居住のための敷地を指すフク *foko* という語はもともと親族を漠然と示す語であり、身近に住む親族のみを指すことから転じて<sup>(21)</sup>、親族の住む敷地を意味するようになったと推測できる。このため、柵に囲まれた敷地内の親族すなわち複合世帯の範囲をフクと呼ぶことも多い。ただし、多数の親族が同じ村に住んでいる場合、フクの範囲は文脈に応じて変化しうるので、複合世帯に相当するフークカテゴリーと見なすことはできない。

また、複合世帯の内部では、世帯を超えた共食がしばしば見られる。調理はそれぞれの世帯の女性がおこない、食事時になると男たちが調理したものを持ち寄り、それを分かち合って食べるのである。この場合、女たちは、幼い子供たちと食べることもあれば、男たちと同じように食事を持ち寄って食べることもある。複合世帯 F1 の世帯では、男たちは昼も夜も共食しており、幼い子供を持つ者を除き女たちも共食していた。K1 でも、男性と女性に分かれて共食をしていた。F2 では、食事は世帯ごとにおこなわれていたが、1a の世帯に対して他の世帯が食事を差し入れることがしばしばあった。このように、生産だけでなく消費の面でも、複合世帯は世帯より上位の家計単位として機能しているといえる。

以下では、漁撈活動や家計収支の具体例を示すにあたり、これまでに述べた3つの複合世帯にとくに着目する。それぞれのプロフィールを表 I-1 に示した。F1 は、アンバシラヴァ村に住み漁網を所有する。F2 は、アンバシラヴァ村に住むが、漁網を長らく所有していなかった。K1 は、農村アンキリマリニカ村（後述）に住み、比較的頻繁に漁撈をおこなう。このように、3つの複合世帯は保有する生産手段や居住村が異なっており、調査地域における家計経済の多様性を把握するには適当と考えられる。

---

(21) ヴェズの村より内陸に村落を形成するマシクルの社会に関して、Lavondès (1967) は次のように述べている。フク *foko* という語は、特定の個人を起点とする双系 (*indifférenciée* または *cognatique*) の親族一般を指すが (*ibid.*: 46)、実際には空間的な限定を受け、村の特定の一角に共住する親族のみを指す場合もある (*ibid.*: 109)。この記述はヴェズについてもあてはまる。



表 I-1 調査対象となった複合世帯のプロフィール

番号	F1	F2	K1
居住村	アンパシラヴァ村	アンパシラヴァ村	アンキリマリニカ村
漁網所有の状況	所有	所有せず、のちに所有	所有（小型）
構成員数	22	27	21
成人男性数	6	4	4
成人女性数	6	6	4
少年数	4	10	1
幼児数	6	7	12

幼児は 6 歳未満、少年は 6~14 歳、成人は 15 歳以上とした

また、上記以外の複合家族について言及する際には、「同じ村に父母や祖父母を持たない夫婦（もしくはその一方）の世帯と、その周囲に隣接して居住する子孫の世帯の集合」として複合世帯を定義した。この定義に従うと、ごく少数の複合世帯では上記3つの複合世帯ほど緊密な協同が見られず、魚の分配も頻繁でない。また、両親を失って間もない兄弟がそれぞれ世帯を持っているような場合、世帯間の関係が親密であっても別の複合世帯と見なさなければならなくなる。しかし、親密さの度合を測定することが困難である以上、上の定義はもっとも妥当なものであろう。この妥当性は第Ⅲ章で検討する。

## 第 II 章

### 漁村の経済存立基盤

－農村との比較を通して－

## II-1 はじめに

本章では、漁撈に依存するアンパシラヴァ村における家計経済の特徴を明らかにするため、生産と消費のあり方を近隣農村と比較する。

これまでの研究においても、漁撈社会の特徴を明らかにする手段として、農耕社会との比較はしばしば採用されてきた。たとえば Firth (1966) は、マレー半島東岸地域の漁村と農村の間には次のような違いがあると指摘した。①農村では大量の収穫が季節的であるのに対し、漁村では労働投入直後に漁獲が得られること、②このため漁村では生産物の備蓄が長期的ではなく、備蓄が皆無になってしばしば困窮するために、仲買人に融資してもらってリスクを分散していること、③専業漁民は主食となる作物を生産しないために専業農民よりも強く交換経済に依存していること、④農村では家族の協業が広く見られるのに対し、漁村では主に肉体的な理由から男性が生産にたずさわり、大規模な集団を組織する場合が多いこと、⑤船や漁具など、漁撈における生産手段は破損したり流失したりする確率が高く、投資の際には比較的大きなリスクを考慮しなければならないこと。

これらの違いは、世界各地において普遍的に見られるわけではない。その主要な理由として、自然環境や社会経済条件が地域によって異なることがあげられる。たとえば、漁村において備蓄が皆無になる頻度は資源量によって異なるだろうし、仲買人が融資する程度も社会経済条件によって異なるだろう。つまり、漁撈社会と農耕社会には生産技術の差異に由来するさまざまな違いがあるが、その違いの具体的な内容は、地域の自然環境や社会経済条件により大きく左右されるといえる。

以上の点をふまえ、本章では、漁村と農村の比較によって明らかになった違いを地域的な文脈から考察する。なお、本章で比較する漁村と農村は、生業がそれぞれ漁撈と農耕に特化しているというわけではない。2つの村では漁撈活動と農耕活動がともにおこなわれており、どちらの活動を重視するかという違

いが村の性格の差異をもたらしている。

## II-2 調査地と調査方法

### (1) 調査村の概況

調査はアンパシラヴァ村（本章では以下F村<sup>(1)</sup>と略）と、そこから約4km 内陸に位置するアンキリマリニカ村（Ankilimalinika、以下K村と略）の2ヶ所でおこなった（図I-4参照）。1996年の調査当時、F村は人口約200人、世帯数38、複合世帯数17（1世帯のみで構成される7例を含む。I-2(4)参照）であり、K村は人口約170人、世帯数33、複合世帯数12（1世帯のみで構成される4例を含む）であった。両村の住民ともヴェズであると名乗り、近隣の村からもそのように認められている。

海岸と内陸という地理的条件の差は、2つの村の暮らしにさまざまな違いをもたらしている。住民の移動手段の違いもその1つである。内陸のK村は、県庁所在地ムルンベから郡役場所在地ベファンデファ（Befandefa）に至る道路沿いにあり、雨季以外は自動車の通行も可能である（写真II-1）。また、この道路からは多くの枝道が延びており、有棘林東縁のオアシス地帯や海岸部の村へ至ることが可能である。このため、K村の人々は、この道路を利用して2頭立ての牛車 *sarety*（フランス語の *charrette* に由来）で村の間を移動することが多い（写真II-2）。たとえ牛車を所有していない人でも、牛車を持つ親戚に買い出しを頼むなどしており、牛車なしには生活できないほどだといってよい。

これに対し海岸部のF村では、牛車を所有する世帯が1997年には3つに増えたが、それまではわずか1つだった。F村の主な交通手段は、舷外浮材（フロ

---

<sup>(1)</sup> Ampasilava という地名は、「An（～の場所）+fasy（砂）+lava（長い）」と分解できる。頭文字Aはマダガスカルの地名に非常に多いため、ここでは語根の頭文字であるFを村の略称として採用した。なお、Ankilimalinika という地名は、「An（～の場所）+kily（タマリンド）+malinika（小さい）」と分解できる。



写真 II-1 アンキリマリニカ村 (K村)



写真 II-2 内陸部の主な交通手段、牛車 *sarety*

ート) のついたシングルアウトリガー式カヌー (図 I-2 参照) である。村の間など長距離を移動する際には、キャンヴァス地の帆を張り風力を利用してカヌーを動かす。カヌーの欠点は、内陸の村にたどり着けないことである。しかし F 村の人々は、K 村やベファンデファなど近隣の村へは徒歩で行き、それより内陸の村を訪れることはほとんどない。多くの用事や買い物は、海沿いの県庁所在地ムルンベですませられるからである。むしろカヌーは、順風さえ吹いていれば牛車より早く目的地に着けるし、揺れも少ない。雨季でも運行不可能ということはない。このようなカヌーの利点は、K 村の人々も認めている。彼らも、遠くの漁村に農作物を売りに行ったり急な用事でムルンベに行ったりするときは、F 村の親戚や知人に頼んでカヌーを出してもらうことが多い。

## (2) 調査方法

### ① 出漁聞き込み調査

両村における漁撈活動の頻度を比較するため、毎日夕方に村中のすべての世帯 (I-2 (3) 参照) を訪問し、家族がその日にどのような漁をおこなったかを尋ねて記録した。調査対象は村内の既婚男女全員である。調査期間は、漁撈活動に影響する潮汐の周期が 14.7 日であることを考慮し、F 村については 1996 年 8 月 1 日から 14 日までの 14 日間、K 村については 1996 年 8 月 16 日から 29 日までの 14 日間とした。出漁聞き込み調査において 14 日間を単位としたのも同じ理由による。

### ② 漁獲調査と農地面積調査

漁撈への依存度を把握するために、前章で述べた 3 つの複合世帯において、漁撈活動時間と漁獲内容について調査した。1996 年 6 月 9 日から 22 日までの 14 日間、F 村に在住する F1 と F2 を 1 日交代で観察し、それぞれ 7 日分のデータを得た。また、K 村に在住する K1 については、1996 年 6 月 25 日から 7 月 7 日までの 13 日間、1 日おきに観察して 7 日分のデータを得た。観察の日に



は、午前 6 時から午後 6 時まで当該の複合世帯の敷地で過ごすようにつとめ、構成員が海に出た時刻と海から帰ってきた時刻を記録した。また、海から持ち帰った収穫物の個数と重量を種類ごとに記録し、どのように分配もしくは交換されたかを記録した。秤量には、携帯用のバネばかりを用いた。なお、この調査の詳しい結果は巻末の附表 1 に示した。

同時に、農耕への依存度を把握するため、この 3 つの複合世帯が作付けした農地の面積を測定した。実施したのは、1998 年の補足調査時である。作物が作付けられた土地は多角形と見なし、各辺の長さを歩測するとともに各角の角度を方位磁石によって測定した。これらの数値を、ベーシック言語で作成したコンピュータソフトに入力し、面積を割り出した。

### ③タイム・アロケーション調査

2 つの村の生業の違いを全体的に把握するため、時間節約型スポットチェック法 (Suda, 1994) により、村の既婚男女全員のタイム・アロケーション (time allocation)<sup>②</sup>を調査した。この方法は、日中のさまざまな時間帯を選んで村の端から端までを歩き、集落内に見える人々の活動を記録するというものである。ここでは、6 時から 18 時までの時間帯を 13 に区切り、毎日 1 回ずつ村を歩いて 13 日間ですべての時間帯の活動を観察した。不在の者については、行き先、目的、出発日時、帰宅予定日時を同じ世帯の構成員から聞き込んだ。調査期間は、F 村では雨季 (1996 年 1 月 15 日～27 日) と乾季 (同 8 月 1 日～13 日) に 13 日間ずつ、K 村では雨季 (同 1 月 2 日～14 日) と乾季 (同 8 月 16 日～28 日) に 13 日間ずつおこなった。

### ④食生活聞き込み調査

2 つの村における食生活の状況を把握するため、毎月 1 回、それぞれの村の

---

<sup>②</sup> タイム アロケーションは、複数の社会の活動を比較するための指標として、人類生態学や生態人類学の分野で盛んに用いられてきた (Gross, 1984; Mulder and Caro, 1985; Hames, 1992)。



すべての世帯を訪問し、前日の昼と夜にどのような食材をどのように調理して食べたかを聞き込んだ<sup>③</sup>。調査期間は 1995 年 10 月から翌年 9 月までの 1 年間と、補足調査時の 1998 年 1 月と 3 月である。1996 年 9 月と 1998 年 1 月および 3 月には、食材をどこでどのように入手したかも聞き込んだ。

訪問時に不在だった場合や、食事をしていたのが他の村や畑であった場合などは、有効回答としてあつかわなかった。また、1995~96 年の 12 回の訪問調査のうち、有効回答数が 7 以下の世帯は集計しなかった。この結果、F 村における 23 世帯と K 村における 22 世帯が集計対象となった。集計にあたり、1 回の食事で多種類の食材を食べていた場合には、1 回を種類数で等分して累積した。たとえば、1 回の食事で米とキャッサバを食べていた場合、それぞれを 0.5 回として計算した。この集計の詳しい結果は巻末の付表 2 に示した。

## II-3 生業活動の比較

### (1) 漁撈

表 II-1 は、出漁聞き込み調査（調査項目①）の結果を男女別に示したものである。ただし、調査期間中に 7 日間以上村を離れていた者は表から省いた。いずれの村でも女性より男性の方が頻繁に出漁しており、漁撈について男女分業の傾向があることがわかるが、これについては第 III 章で詳しく論ずる。男性だけを比べてみると、F 村では 7 日以上出漁した者が 4 割近くいたのに対し、K 村ではそのような者はまったくおらず、出漁日数が 3 日以下だった者が 8 割以上を占めている。平均出漁日数も、F 村では 5 日、K 村では 1.5 日と、F 村の

---

<sup>③</sup> 食生活については、栄養学や人類生態学および生態人類学において、秤量にもとづいた精緻な調査方法が確立されている（Dufour and Teufel, 1995; 口蔵, 1995）。この方法は食生活を栄養面から評価する際に不可欠であるが、家計経済の特徴を大まかに捉えることを目的とする本研究にとっては、データ収集効率の低さが難点である。掛谷（1974）も、焼畑農耕民の生計維持機構を明らかにするため、秤量以外の方法で食生活調査をおこなっている。

表 II-1 2つの村における出漁日数の比較（14 日間、単位：％）

	男 性		女 性	
	F 村 (23 人)	K 村 (20 人)	F 村 (25 人)	K 村 (17 人)
0 日	8.7	40	16	52.9
1～3 日	34.8	45	24	29.4
4～6 日	21.7	15	48	17.6
7 日以上	34.8		12	
合計	100	100	100	100
平均出漁日数	5 日	1.5 日	3.96 日	1.24 日
標準偏差	3.12 日	1.83 日	2.62 日	1.63 日

方が有意に多い (Mann-Whitney's U-test.  $U=77$ ,  $n_1=23$ ,  $n_2=20$ ,  $p<0.001$ )。この傾向は女性についても同様で、F村では4日以上出漁した者が過半数を占めたのに対し、K村ではまったく漁に出ない者が過半数を占めた。また、女性の平均出漁日数は、F村で3.96日、K村で1.24日であり、F村の方が有意に多かった (Mann-Whitney's U-test.  $U=85.5$ ,  $n_1=25$ ,  $n_2=17$ ,  $p<0.005$ )。すなわち、K村の人々も漁をおこなってはいるが、F村の人々の方が頻繁に漁をおこなう。しかも、遠隔地でナマコ漁をおこなっていたF村の若者の活動を含めれば、両村の出漁頻度の差は表よりもさらに大きくなると考えてよい。

F村の漁撈は第III章で詳しく述べることにし、K村の漁撈活動について簡単に述べておく。K村は海岸から歩いて約1時間の距離に位置しており、漁撈をおこなうには不利な条件下にある。たとえば、K村の人がF村の人と同じ量の魚を捕ろうとすれば、同じ漁具と技術を持っていたとしても、往復2時間は余計にかかってしまう。また、F村で用いている百尋もあるような網を持って2時間も歩くのは大仕事である。さらに、村へ戻る際にはカヌーを海辺に置いてこなければならないが、安全なカヌーの保管場所はほとんどない。これらの事情から、K村では漁撈が盛んでなく、せいぜい小型の漁具で時たま漁をおこなう程度で、カヌーに乗って沖へ出ることはない。

K村では3種類の漁法がおこなわれている。第一は、大潮の干潮時に干上がったサンゴ礁原でおこなう磯漁りである。磯漁りで得たタコやナマコはF村で売る。第二は、マングローブ林でおこなうワタリガニ漁である。これは、マングローブ林の泥中にあるワタリガニ *drakake* (Portunidae) の巣穴を探し、ヤスでワタリガニを突く漁である。マングローブ林から離れたF村の人々は、この漁をほとんどおこなわない。漁獲したワタリガニは、おかず用としてK村や近隣の農村で売る。第三は、片手で運べる程度の小型漁網を用いた網漁である。この網は、F村でもっとも小さな網の半分程度の長さ (約50m) であり、カヌーなしで行けるような浅い礁池で用いる。このような場所で捕れるのは、コトヒキ *jihy* (*Terapon jarbua*) やツバメコノシロ *bobokoro* (*Polynemus* sp.)、

ツッパリサギなどの幼魚が中心となるため、網の目合は細かく 40mm 程度である。捕れた魚は、K村や近隣の農村でおかず用として売る。F村では、小さな魚の商品価値がないためこのような漁をおこなわない。

以上の3つの漁法は、いずれもカヌーを用いず小型の漁具のみを用いる点で共通している。生産資本への投資が小さいF村と比べても、はるかに小さい投資で漁撈をおこなっているといえる。しかし、K村でおこなわれている漁撈の漁獲効率を割り出してみると、F村に劣らないことがわかった。表 II-2 に示したのは漁獲調査（調査項目②）の結果で、3つの複合世帯の男性による7日間の漁獲量と漁獲効率の比較である。K1が持ち帰った魚の重量はF2より若干少ない程度で、マングローブ林のワタリガニがとくに多かった。漁獲を金額換算<sup>(4)</sup>して漁獲効率を算出してみると、K1の漁獲効率は 1,043FMG/人・時間で、F1よりは低かったがF2よりは若干高かった。海までの往復時間をも考慮すると、実質的な漁獲効率はF1より高いかもしれない。そのもっとも大きな理由は、K村では魚の流通量が少なく価格が高いためであろう。K村で販売量の多い小魚類の単価は、F村の 1.7 倍にも達する（注 4 参照）。

このように、K村には、F村の漁獲効率に勝るとも劣らない例がみられる。しかしK村の漁師は、F村の漁師のように不定期ではあるが時に訪れる大漁の機会を望むべくもない。F村の漁師たちは、第 III 章で述べるようにやや沖合いの大型魚群に遭遇したり、第 IV 章で述べるように輸出海産物を求めて出漁したりす

---

(4) 1996 年の調査時には、1FMG（マダガスカル フラン）はおよそ 0.03 円程度に相当した。同年におけるマダガスカルの人あたり国民総生産（GNP）は約 100 万 FMG（250 ドル; Tudor, 1998）、ムルンベ近辺における学校教師の月給は 15 万 FMG 程度であった。なお、マダガスカル村落部では、しばしば 5FMG をアリアリ *ariary* と呼んで通貨を勘定しているが、ヴェズの人々もこれをジャラ *drala* と呼び頻用する。

F1 の漁獲の金額換算レートは III-5 を参照。K1 については次のレートで金額換算している。群をなして岸辺近くを回遊していた小魚（コトヒキ、サギなど）：1,700FMG/kg。群をなさずサンゴ礁に生息する小魚（ベラなど）：1,000FMG/kg。タコ：1,000FMG/kg。ワタリガニ：400FMG/kg。以上のレートは、売買された漁獲物を秤量して算出した。F村でまったく売れないコトヒキなどがK村で高価なのは、小さくとも数が多く、購入した世帯の内部で分けやすいためと思われる。

表 II-2 各複合世帯の漁獲量と漁獲効率（7 日間）

略号	F1	F2	K1
居住村 網所有の状況	F 村 所有	F 村 所有せず	K 村 所有（小型）
漁獲量（魚類）	56.3kg	25.3kg	19.3kg
// （タコ・イカ類）	1.5kg	7.6kg	3.2kg
// （エビ・カニ類）		1kg	24.1kg
// （その他）	ナマコ 1 個	ナマコ 17 個	
労働投入量（I）	45.28 人・時	45.4 人・時	39.02 人・時
総漁獲量（O）	59,570 FMG	45,840 FMG	40,700 FMG
漁獲効率（O/I）	1,316 FMG/人・時	1,010 FMG/人・時	1,043FMG/人・時

るため、調査結果よりも高い漁獲効率をあげることがしばしばある。

## (2) 農耕

F村とK村および近隣地帯では、トウモロコシ *tsako* (*Zea mays* L.) を中心に、サツマイモ *belè* (*Ipomoea batatas* Poiret)、スイカ *voamanga* (*Citrullus vulgaris* Schrad.)、メロン *kiseny* (*Cucumis melo* L.)、ササゲ *lozy* (*Vigna sinensis* Endlicher)、リョクトウ *antsiròka* (*Vigna radiata* R. Wilczek) などの間作 (intercropping) がおこなわれている。また、キャッサバ *balahazo* (*Manihot esculenta* Crantz) やサツマイモを単作する畑もある。畑はいずれも常畑で、同一の耕地が数十年にわたって利用されている (写真 II-3)。

F村およびK村の農事暦は図 II-1 のように示すことができる。まず、雨季が近づく 10 月終わりから 1 月初めにかけて、スイカやメロンなどウリ類とトウモロコシの播種をおこなう。ササゲやリョクトウなどマメ類の播種もこの頃である。12 月から 1 月にかけて雨が降りだすと、適当な長さに切ったサツマイモの茎を植え付ける。1 月から 2 月にかけては短い雨季である。この時期には、作物が生長すると同時に雑草も繁茂するので、除草が主要な仕事となる。除草には、鉄製の刃のついた鋤 *antsoro* が用いられる。雨季の終わりにあたる 2 月末から 3 月にかけて、スイカやメロンの収穫がおこなわれる。雨季が終わった 3 月から 5 月頃には、トウモロコシやマメ類の収穫がおこなわれる。トウモロコシは、収穫後すぐ乾燥させてから脱穀し、袋詰めにして出荷する。6 月から 8 月にはサツマイモの収穫がおこなわれる。サツマイモの一部も、収穫したのちスライスして乾燥させる。また、キャッサバを栽培している農家では、この時期にキャッサバの収穫および植え付けをおこなう<sup>⑤</sup>。塊根を掘り出したのち、茎の一部を適当な長さに切り取り、掘り出した場所に再び挿し木するのである。

⑤ 有棘林西方の海岸部では、キャッサバ栽培はあまり盛んにおこなわれていない。これは、この地域でキャッサバを植えても苦くなるだけだからだという。また、キャッサバをこの時期にかぎって収穫するのは、それより早いと未熟である (*mbo sisny*) からだという。



写真 II-3 K村の畑の景観

	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
トウモロコシ	播種			収穫・乾燥								
スイカ メロン	播種				収穫							
サツマイモ			植付						収穫・乾燥			
キャッサバ									収穫・植付			

図 II-1 調査地周辺の主要作物に関する農事暦

以上のような農事暦と作業内容は、F村とK村でほとんど違いがないが、農耕への力の注ぎ方はまったく異なる。まず、両村において畑を所有する世帯の割合は、F村では34%(38世帯中13世帯)にすぎないのに対し、K村では100%(33世帯中33世帯)である。それだけでなく、K村の男性は未婚の時から畑を耕し始め、年を経るにつれ新しく土地を開いて複数の畑を持つようになるので、畑の総筆数がF村に比べてはるかに多い。

畑の数が多いだけでなく、作付け面積もK村の方がはるかに広い。その一例として、調査対象となった複合世帯による農作物の作付け状況(調査項目②)を表Ⅱ-3に示した。F1とF2はF村における数少ない畑所有者で、なかでもF2の所有する畑はF村内でおそらくもっとも広い。いっぽうK1では、熱心に漁撈をおこなっていたことから推察されるように、K村の他の世帯に比べて特別に畑が広いわけではない。それにも関わらず、K1の作付け面積は、F1やF2にくらべて明らかに大きい。K1では畑所有者の数が多いほか、それぞれの畑がF1やF2に比べて広い<sup>⑥</sup>。

さらに、作物の収穫量を定める畑の手入れの質についてみると、K村ではF村よりも熱心に畑を手入れしており、除草される畑の面積もはるかに広い。それだけでなく、F村では牛による作物の被害が多いため、せっかく植えた作物が全滅するという事態も頻繁におこる。F村で食害が多い理由は、畑が放牧地帯にあって監視が十分にできないことと、柵の手入れが行き届いていないことによる。1998年には、F村で畑を所有していた13人のうち2人が、3月中旬の時点ですでに作物を全滅させていた<sup>⑦</sup>。これに対してK村では、畑がきちんと柵に囲まれており、そうした被害はまったく聞かれなかった。

---

⑥ K1-2Bの畑が狭い理由の1つは、広い畑を持つK1-1Aを頻繁に手伝い、自分の畑を耕す労力が十分でなかったためである。

⑦ 付近ではF村の牛も放牧されているが、放牧頭数から考えれば、被害を与えたのはK村など近隣農村の牛である可能性が高い。しかし、このような事件について被害者が農民に不満を訴えることはない。被害者は、柵の保守に不備があることを承知していながら、柵が壊れても長期間放置する傾向にあるのである。



表 II-3 各複合世帯の農地作付け面積（単位：m<sup>2</sup>）

F1		F2		K1	
所有者	面積	所有者	面積	所有者	面積
F1-2B	484.7	F2-1a	3,264.0	K1-1A	11,971.8
				K1-1A	4,906.7
				K1-1A	1,458.1
				K1-2A	4,975.6
				K1-2B	986.4
				K1-2D	4,230.6
				K1-2D	925.6
合計	484.7	合計	3,264.0	合計	29,454.8

所有者名のうち、最初の2文字は複合世帯名に、  
最後の2文字は図 I-6 の記号に対応

### (3) その他の生業

F村とK村には、漁撈と農耕のほかにいくつかの補助的な生業がある。第一は野生動植物の狩猟と採集で、野鳥を罠で捕らえたり木の実を集めてきたりする。しかし、これらを頻繁におこなうのは主に子供たちであり、家計のためというより楽しみや娯楽の要素が強い。また、狩猟採集によって得たものはスナックとして消費されることが多く、正式な食事に出されることはほとんどない。

第二に、家畜と家禽の飼養である。両村とも、牛 *aomby* (*Bos primigenius*) やヤギ *bengy* (*Capra hircus aegagrus*) などの家畜や、七面鳥 *vorotsiloza* (*Meleagris gallopavo*) や鶏 *akoho* (*Gallus gallus*) などの家禽を飼養している。ヤギと家禽はもっぱら食用だが、祝い事などの特別なときに殺されるだけで、普段の食生活への貢献は少ない(II-4 参照)。牛は、牛車を引かせることを主目的とすることが多く、雌牛を含む多数の牛を群で放牧していたのはK村における2つの世帯のみであった。F村とK村で牛を所有していた他の世帯は、去勢牛を2頭だけ飼っていたにすぎない。牛乳はせいぜい間食に飲まれている程度で、食生活への貢献は小さく、有刺林の東方や北方で利用されている乳製品 *abobo* も調査地では見かけなかった。牛は、食料の供給源としてよりも、必要が生じた時に売却し多額の現金を得る手段として重要である。

第三に、雨季直前の塩の採集である。F村からK村に至る道筋には、イネ科およびカヤツリグサ科を中心とした草本の群落がパッチ状に広がっている。これは、雨季に窪地が水没して植物の生育を阻むためである。高潮時にはこの水たまりに海水が流入するので、雨季が終わって水が引いても土壌には多量の塩分が残される。このため、雨季になって最初の雨が降ると、塩分を含んだ水分が蒸発して地表に塩が結晶する。村人たちは、最初の雨が降った直後の2週間ほどの間、この塩を盛んに採集する(写真 II-4)。雨季が本格的になると塩が雨水に溶け、窪地も水没するので、次の年まで採集できなくなる。このような塩の売り上げは短期的な収入源としては無視できないが、年間を通してみると、



写真 II-4 F 村から K 村に至る道沿いでの塩採集

採取される塩の量はそれほど多くない<sup>(8)</sup>。

第四に、F村やK村では、次のように小規模な商業活動もおこなわれている。

- ①生産物の他村での売却。主な対象は、F村でとれた海産物やK村で収穫した農産物、および両村で採集された塩などである。売却先までの輸送には、生産した個人がそれぞれの輸送手段を使う。売却先は、ムルンベ市や近隣の農漁村および東のオアシス地帯であるが、F村では牛車などの陸上輸送手段が限られているため、ムルンベ市が主な売却先である。
- ②他人の生産物を買取り、他地域で売却して利潤をあげる仲買い。ヴェズの人々はこれをキナンガ *kinanga* と呼んでいる。F村では、魚やタコ、ナマコなどを買い付けて乾燥させ、ムルンベ市の仲買人に売却している（III-5 参照）。またK村では、漁村で買い付けた魚を燻して保存食に加工し、東のオアシス地帯で売却する。逆にオアシス地帯からは米やキャッサバ、ピーナッツなどを仕入れて、K村やF村で売却する。キナンガは、商店経営のように莫大な資金を必要としないため、臨時の収入などを元手として誰でも気軽におこなえる。しかしキナンガで得られる利潤は、元手が少ないだけに、漁撈や農耕からの収入に比べてわずかである。
- ③ムルンベの町から定期的に品物を仕入れてきておこなう商店 *dokany* の経営。F村とK村に1軒ずつある商店は、規模が小さいためキナンガに分類することもできる。しかし商店経営は、わずかの臨時収入を元手におこなえるものではなく、長期的な資金運用が必要である。両村の商店で売っているのは、米、キャッサバなどの主食や、砂糖、植物油などの調味料、タバコなどの嗜好品、石鹼、灯油などの日用品などである。これらの商店を経営するのは村人自身であり、漁撈や農耕をおこなう点で他の村人と大き

---

<sup>(8)</sup> 麻袋1杯(約20kg)の塩はF村で1,500FMGであったが、塩田のない村やムルンベの町では4,000FMGで売れる。1998年初旬にF2が採取した塩の量は正確にはわからないものの、明らかに麻袋20杯に達していなかった。いっぽうF1では、塩魚加工を頻繁におこなって多量の塩を必要とするため、自分たちの集めた分では足りずに他の者からも塩を購入していた。

な違いはない。

第五に、買い入れた材料に手を加えて別の商品を作る加工業もみられる。両村でもっとも多いのは、パンケーキやコーヒーなど、間食用食品の加工と販売である。K村では魚のフライなどがこれに加わる。これはキナンガと同様、少額の資金で始めることができるが、家計への寄与からすれば副次的である。このほか、F村ではカヌー製作がおこなわれている。F村では、2つの複合世帯がカヌー製作を受注しており、ムルンベ県一帯では随一の仕上がりという評価が高い。そのうちの1つはF1である。F1の製作したあるカヌーは、材料費が35.5万FMGで100万FMGの価格がつけられていた。言い値どおりにカヌーが売れば64.5万FMGの利益となるが、これは、このF1が2ヶ月半で消費するトウモロコシの価格である。

以上のように、F村とK村では、漁撈と農耕のほかにさまざまな活動がおこなわれて生計を補助している。しかし、商店経営とカヌー製作を除くと、それらの活動による家計への貢献は少ない。また、商店経営とカヌー製作をおこなうのは少数の村人に限られている。これらを考慮すると、F村においては漁撈が、K村においては農耕が主生業であると言ってさしつかえない。

#### (4) 漁撈と農耕への時間配分

本節のまとめとして、両村の村人が漁撈と農耕にどれだけの時間を割いているかについて見ておく。表II-4は、両村の男性の活動時間調査（調査項目③）の結果で、F村の既婚男性32人とK村の既婚男性30人が漁撈と農耕に各々どの程度の時間を割いているかを示した。まず、雨季の漁撈について見ると、F村では日中の14.7%の時間が日帰りの漁撈に費やされているのに対し、K村では2.6%にすぎない。それが乾季になると、F村では日帰りと泊まりがけを合わせて13.0%、K村では3.9%の時間が漁撈に費やされている。いずれの季節においても、F村の方がK村よりはるかに長く漁撈に従事しているといえる。

次に農耕活動についてみる。ここでいう農耕活動とは、作物を直接世話

表 II-4 2つの村における漁撈と農耕への時間配分（単位：％）

	雨 季		乾 季	
	F 村	K 村	F 村	K 村
漁撈（日帰り）	14.7	2.6	6.3	1.3
漁撈（泊まりがけ）	1.7	0	6.7	2.6
農耕（日帰り）	2.4	55.1	0.5	17.4
農耕（泊まりがけ）	0	0	0	22.6
その他・集落周辺での活動	65.6	25.1	56.3	29.5
その他・他村での活動	15.6	17.2	30.3	26.7
合計	100	100	100	100

することだけでなく、畑づくりのための伐採や畑の柵の手入れなど、畑でおこなう活動をすべて含んでいる。雨季には、泊まりがけの農耕はまったくおこなわれていない。日帰りの農耕については、F村では2.4%、K村では55.1%の時間が費やされている。乾季になると、F村では農耕をおこなう時間が0.5%に減る。K村でも農耕をおこなう時間は短くなるが、それでも17.4%の時間が農耕に費やされており、日帰りと泊まりがけを合わせると40.0%に達する。いずれの季節においても、K村の方がF村より長く農耕に従事しているといえる。

既婚女性の活動についても同様の分析をおこなったが、ほぼ同じ結果が得られたので、ここでは詳述を控える。以上から結論できるのは、F村では漁撈に、K村では農耕に多くの時間を割いており、両者の生業形態が対照的だということである。とくに、F村において農耕が副次的活動にすぎないことは、畑の所有率や面積、畑に対する手入れの仕方、農耕にかかる時間のいずれからも明らかである<sup>(9)</sup>。

## II-4 食生活の比較

### (1) 食生活の概要

ヴェズがふつう食事 *sakafo*<sup>(10)</sup>と呼ぶのは、昼と夜の2回だけである（写真II-5）。朝は食べないこともあるし、食べてもお茶などで簡単に済ませることが多いため、朝食と間食を区別することはむずかしい。栄養的にも分量的にも、ヴェズの人々が重視しているのは昼食と夕食である。そこで以下でも、昼食と夕食のみを食事と呼ぶことにする。

<sup>(9)</sup> これに対し、漁撈に熱心でないK村の人のことを「本当のヴェズではない」と考える者もいる。このことは、ヴェズという語に「熱心な漁師」という含意があることを示している（cf. Astuti, 1995a; 1995b）。

<sup>(10)</sup> *sakafo* はもともとマダガスカル標準語から借用された語と思われる。この語に相当するヴェズ方言は *hane* であろう。しかし、ヴェズのあいだでは、*sakafo* は家族が集まって食べる正式な食事のみを指し、*hane* は他に食物一般をも指示する。



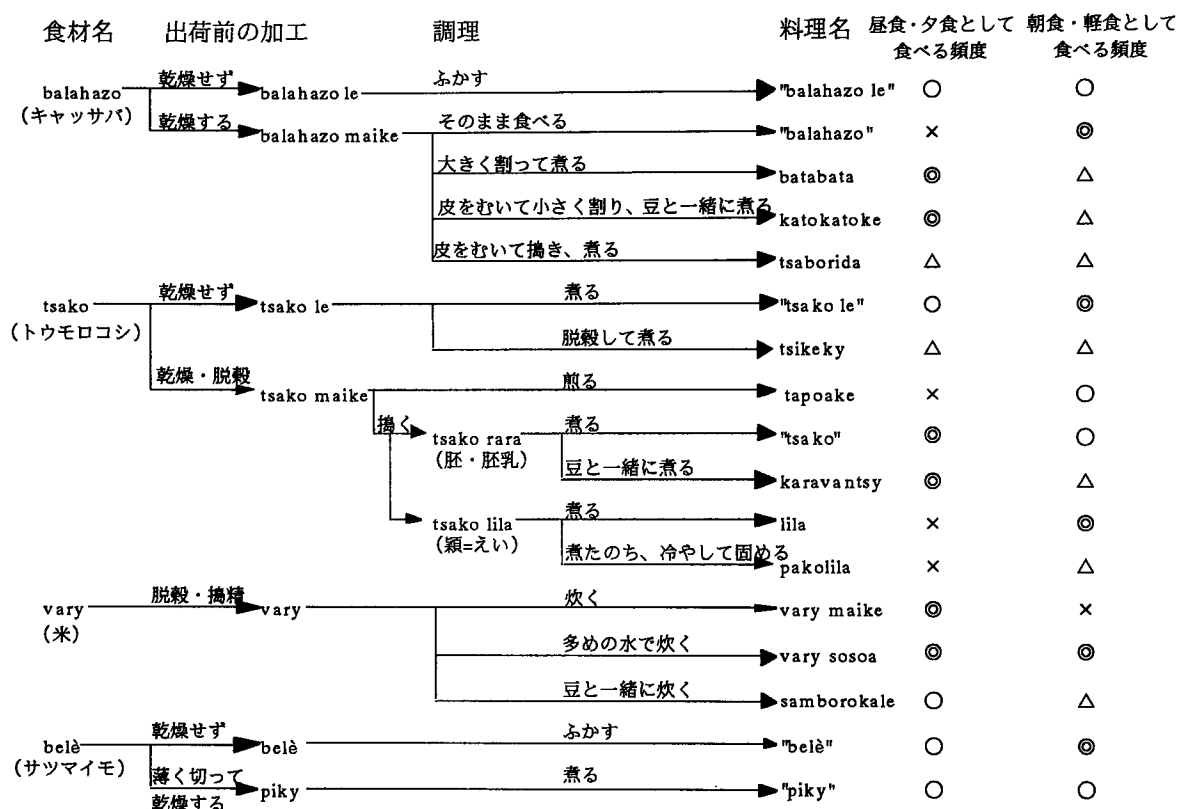


写真 II-5 食事のようす（トウモロコシ、副食はなし）

食事のさいに食べられる食材は、主食と副食に大別できる。ただし、主食に対応する語はヴェズ方言にはない。ここで主食と呼んでいるのは、他の食材に比べて量的に多く食べられ、炭水化物を主成分とする食品である。米、トウモロコシなどの穀物類や、キャッサバ、サツマイモなどの根菜類がこれにあたる。「(食事として)何を食べたか(Nihina ino?)」という質問に対しては、主食の食材名で答えるのがふつうである。これに対し副食は、主食に添えて出される少量のおかず(英語の *side dish* に相当)である。ヴェズ方言では *laoke* と呼ばれ、明らかに主食と区別されている。副食は、量的には主食に及ばず、省略して食べないことすらある。これは、食事時に必ず主食を食べることとは対照的である。副食となる食材は、魚や肉や豆類など、蛋白質に富む食品である。ただし、以下で副食と呼ぶのは、主食と別に調理されるおかず *laoke* だけではない。豆類のように、米やトウモロコシなど主食と一緒に少量だけ炊き込まれているものも含んでいる。主食とともに炊き込んだ豆類を *laoke* と呼ぶことはないが、このような場合はしばしば他のおかずが省略されるので、副食に含めた。

主食の調理方法を図 II-2 にまとめて示した。食材の種類は少ないが、多様な調理法があることがわかる。ただし、いずれの食材においても、乾燥保存された食材を煮てやわらかくするという調理法がもっとも頻繁に用いられる。調査地近辺において、主食となる作物のほとんど(米を除く)が収穫直後に乾燥されるのは、次の収穫まで保存がきくようにするためである。生のキャッサバやトウモロコシ、サツマイモなどは、収穫期直後にしか食卓に上らない。

キャッサバは、ヴェズがもっとも好む主食である。多くのヴェズは「キャッサバを食べないとすぐ腹が減る」と言い、キャッサバを「ヴェズの食べ物 *hanem-Bezo*」と呼んでいる。しかし、II-3 (2)で述べたように、調査地近辺ではあまりキャッサバを作付けていない。調査地にキャッサバを供給しているのは、主に有棘林の東側および南側の人口稠密地帯である。F村はもちろんK村においても、多くのヴェズはキャッサバを商店で購入している。キャッサバが商店



食事頻度に関する凡例 ◎:非常に高い ○:高い △:低い ×:非常に低い

図 II-2 主食の調理方法

に出回らない季節になると、「早くキャッサバを食べたい」という声をしばしば耳にする。

これに対し、米 *vary* (*Oryza sativa* L.) は高価で腹持ちが悪く (*tsy mahavintsy*)、「外国人の食べ物 *hanem-Bazaha*」と考えられているが、来客をもてなす時に出す料理としてはむしろ「よい食べ物」とされている。葬儀における会食で出されるのは例外なく米であるし、死者供養の際にも米以外の主食が捧げられることはない。このように、米もまた重要な主食ではあるが、水の少ないこの地域ではまったく栽培されていない。この地域に米を供給しているのは、主に有棘林の北側にある人口稠密地帯である。

トウモロコシが日常的な食事に頻繁に登場するのは、この地方で作付けられている唯一の穀物だからであり、キャッサバや米のように肯定的な評価が与えられているためではない。ヴェズの主食の大部分は、キャッサバ、米、トウモロコシの3品目でまかなわれている。聞き込み調査によると、主食とされる食材として、ほかにサツマイモ、スイカ、メロン、ライマメ *kabaro* (*Phaselous lunatus* L.) などがある。サツマイモ、スイカ、メロンは、後で述べるように、K村で季節的に食べられているだけである。ライマメが主食として食べられていた例はわずか1例で、通常は主食品目とは見なされていない。

副食の調理方法については表 II-5 に示した。多様な調理方法があるが、主食の場合と同様に、日常적으로こなわれる調理方法はかぎられている。食材の種類にかかわらず、もっとも頻繁な調理方法は、塩を加えた水煮 (*ketsehe*) である。これは、手間と材料費がもっともかからないからであろう。魚介類は熾き火で焼くだけの方法 (*atono*) もあるが、これはむしろ間食として食べる場合に用いられる。主食に添える副食は、スープまたはソース状のもの *ro* でなければならないとヴェズの人々は言う。水煮はもっとも簡単な *ro* であるが、これにさらに手間をかけたものがカレー煮 *kary* である。タマネギや香料とともに食材を少量の油で揚げたのち、水を加えて煮込む。油によってこくが出るほか、タマネギや香料の風味がつくために、水煮とは違った味わいがある。ヴェズの人々

表 II-5 副食の調理方法

食材名	料理法	手順	備考
魚 (サメ類を含む)	ketsehe	塩を加え水煮	
	atao kary	油焼きしたのち、タマネギや香料で煮る	
	atao hosy	ゆでてほぐした魚肉を肝臓の油で炒める	肝臓に脂肪分の多い魚にかぎる
	endaze	油焼き	間食として食べられることが多い
	vendrane	干物	ketsehe にしてから食べるのがふつう
	asale	いぶし焼き	同上
	atono	おき火で焼く	正式な食事ではなく間食となる
タコ・イカ	ketsehe	塩を加え水煮	
	atao kary	油焼きしたのち、タマネギや香料で煮る	
	vendrane	干物	ketsehe または kary にしてから食べるのがふつう
	atono	おき火で焼く	正式な食事ではなく間食となる
貝類	ketsehe	塩を加え水煮	
	atono	おき火で焼く	正式な食事ではなく間食となる
カニ・エビ	ketsehe	塩を加え水煮	
	atao kary	油焼きしたのち、タマネギや香料で煮る	
肉	ketsehe	塩を加え水煮	
	atao kary	油焼きしたのち、タマネギや香料で煮る	
	atao kitoza	干し肉	ketsehe または kary にしてから食べるのがふつう
	atono	おき火で焼く	正式な食事ではなく間食となる
豆	ketsehe	塩を加え水煮	
	atao kary	油焼きしたのち、タマネギや香料で煮る	

は、カレー煮をおいしいというが、材料費がかかるために日常的に食べてはいない。むしろ、油を摂取しすぎると体によくないと考えている。

魚類は、両村でもっとも頻繁に食べられていた食材である。ヴェズの人々は、コチ *toho* (*Platycephalidae*) など味の悪い魚やゴンズイ *fiandolo* (*Plotosus lineatus*) など有毒の魚、小さな魚などをのぞき、近海でとれる大部分の魚類を食用としている。ただし、サカタザメ *soroboà* (*Rhinobatidae*) など大型の魚類は、イルカ *fesoke* (*Odontoceti*) やウミガメと同様、特定の家系において禁忌 *faly*<sup>(11)</sup>とされている場合があった。魚類のほかには、カニ、エビなどの甲殻類や、タコ、イカ、巻き貝などの軟体類も貴重な蛋白源となっている。

家畜や家禽の肉を食べるのは、それらが死んでしまった場合か、来客時やクリスマス *noely* などの祝い事、祖霊に対する供犠 *soro*<sup>(12)</sup>、あるいは葬儀の場合などに限られている。日常的な食事のために家畜や家禽を殺して食べることはほとんどない。また、現金で肉を購入する機会もほとんどない。葬儀の際に食べるのは牛、供犠の際に食べるのは牛かヤギ、来客時に食べるのは七面鳥か鶏である。豚は都市の肉屋で売っているが、村で食べることはほとんどない。これは、もともと食べる習慣がないためと、ヴェズの人々が信仰する憑依霊 *doany* (もしくは *tsomba*)<sup>(13)</sup>が嫌うと考えられているためである。憑霊信仰が盛んでない村では現金獲得のために豚を飼っているが、筆者の聞いたかぎりでは日常的な食事には供されていない。また、ヴェズの人々は、野鳥や野生動物を捕ら

<sup>(11)</sup> 第 I 章注 17 参照。

<sup>(12)</sup> 祖霊に対する供犠は、近代医療が治せない病気を癒す方途として、病人から相談を受けた呪医 *ombiasy* や憑依霊 (注 13 参照) がしばしば要めるものである。このほか、祖先自身が夢枕に立って供犠をおこなうよう求めた場合や、夫婦の間に第一子がもうけられた場合 (*soro anake*; 第 I 章注 19 参照) にもおこなわれる。また、稀にはあるが、守護の見返りとして憑依霊が供犠を求めることもある。

<sup>(13)</sup> 一般的には *tromba* と呼ばれ、西海岸部を中心にマダガスカルで広く信仰されている (Estrade, 1985)。憑依霊となるのは、さまざまな時代や場所に生きていた死者であるが、人間とはかぎらず牛や豹である場合もあるという。これら憑依霊は特定の海域やタマリンドの木などに宿っているが、霊媒者が求めればその口を借り、願いをかなえるための方途を指示する。霊媒者は、特定の病 *arety doany* に罹ることによって霊媒の能力を獲得し、憑依霊に感謝を捧げる儀礼を年に 1~2 度催す (cf. Koechlin, 1975: 150-188)。

は、カレー煮をおいしいというが、材料費がかかるために日常的に食べてはいない。むしろ、油を摂取しすぎると体によくないと考えている。

魚類は、両村でもっとも頻繁に食べられていた食材である。ヴェズの人々は、コチ *toho* (*Platycephalidae*) など味の悪い魚やゴンズイ *fiandolo* (*Plotosus lineatus*) など有毒の魚、小さな魚などをのそき、近海でとれる大部分の魚類を食用としている。ただし、サカタザメ *soroboà* (*Rhinobatidae*) など大型の魚類は、イルカ *fesoke* (*Odontoceti*) やウミガメと同様、特定の家系において禁忌 *faly*<sup>(11)</sup>とされている場合があった。魚類のほかには、カニ、エビなどの甲殻類や、タコ、イカ、巻き貝などの軟体類も貴重な蛋白源となっている。

家畜や家禽の肉を食べるのは、それらが死んでしまった場合か、来客時やクリスマス *noely* などの祝い事、祖霊に対する供犠 *soro*<sup>(12)</sup>、あるいは葬儀の場合などに限られている。日常的な食事のために家畜や家禽を殺して食べることはほとんどない。また、現金で肉を購入する機会もほとんどない。葬儀の際に食べるのは牛、供犠の際に食べるのは牛かヤギ、来客時に食べるのは七面鳥か鶏である。豚は都市の肉屋で売っているが、村で食べることはほとんどない。これは、もともと食べる習慣がないためと、ヴェズの人々が信仰する憑依霊 *doany* (もしくは *tsomba*)<sup>(13)</sup>が嫌うと考えられているためである。憑霊信仰が盛んでない村では現金獲得のために豚を飼っているが、筆者の聞いたかぎりでは日常的な食事には供されていない。また、ヴェズの人々は、野鳥や野生動物を捕ら

(11) 第I章注17参照。

(12) 祖霊に対する供犠は、近代医療が治せない病気を癒す方途として、病人から相談を受けた呪医 *ombiasy* や憑依霊(注13参照)がしばしば奨めるものである。このほか、祖先自身が夢枕に立って供犠をおこなうよう求めた場合や、夫婦の間に第一子がもうけられた場合(*soro anake*; 第I章注19参照)にもおこなわれる。また、稀にはあるが、守護の見返りとして憑依霊が供犠を求めることもある。

(13) 一般的には *tromba* と呼ばれ、西海岸部を中心にマダガスカルで広く信仰されている(Estrade, 1985)。憑依霊となるのは、さまざまな時代や場所に生きていた死者であるが、人間とはかぎらず牛や豹である場合もあるという。これら憑依霊は特定の海域やタマリンドの木などに宿っているが、霊媒者が求めればその口を借り、願いをかなえるための方途を指示する。霊媒者は、特定の病 *arety doany* に罹ることによって霊媒の能力を獲得し、憑依霊に感謝を捧げる儀礼を年に1~2度催す(cf. Koechlin, 1975a: 150-188)。



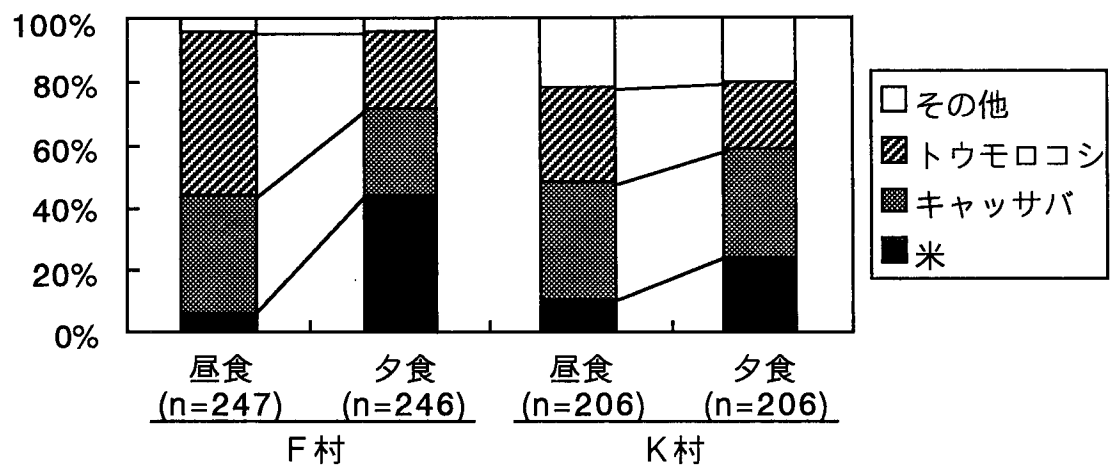


図 II-3 昼食と夕食における主食品目の違い

$p < 0.001$ . K村:  $\chi^2 = 14.82$ ,  $df = 3$ ,  $p < 0.01$ )。これは、「米は腹持ちが悪い」という評価に由来する。つまり、昼食は夕食と違って午後の行動を控えた食事であるため、腹持ちの悪い米を食べることが避けられているのである。

以上は、F村とK村における食生活の共通性である。そこで今度は違いについて述べる。図 II-4 に、F村における毎月の主食品目の割合を示した。この図では、昼食と夕食を区別せずそれぞれ 1 事例として数えた。これを見ると、キャッサバを多く食べる時期とトウモロコシを多く食べる時期があるのがわかる。これに対し、米を食べる割合は年間を通じてあまり変化していない。キャッサバを多く食べるのは 10 月から 2 月にかけて、トウモロコシを多く食べるのは 3 月から 7 月にかけてである。このような季節的変化が生じる理由は、キャッサバの供給が年間を通じて一定でないことに関係している。キャッサバはふつう通年利用が可能と考えられているが、気候の季節変化が著しい調査地では明確な収穫期がある。大生産地帯である有棘林東方では、雨季が終わって 3 ヶ月ほど経った 6 月から 7 月頃に収穫が始まり、数週間のうちに収穫してしまうと、乾燥してただちに売却する。このためムルンベの商店では、7 月末から 10 月頃までのあいだに倉庫をキャッサバでいっぱいにしてしまう。その後は農家からキャッサバの入荷がなく、在庫量が減るとともに単価が徐々に上がっていく。雨季が終わる 3 月頃になると、商店にはキャッサバの在庫がなくなり、いくら高い金を出してもキャッサバは買えなくなってしまう。これに対しトウモロコシは、商店から在庫がなくなることがないうえ米ほど単価が高くないため、キャッサバの在庫がつきる 3 月から次の入荷が始まる 7 月にかけて頻繁に食卓にのぼる。

食生活におけるキャッサバとトウモロコシの割合の季節的変化は、K村でも同様に観察された。しかしK村の場合、変化のパターンはより複雑である。図 II-5 を見ると、F村ではあまり食べられていない作物が特定の季節にあらわれている。それは、6~9 月にかけてのサツマイモと、1~3 月にかけてのウリ類である。ウリ類にはスイカとメロンの両方が含まれている。正確に言えば、サツマ

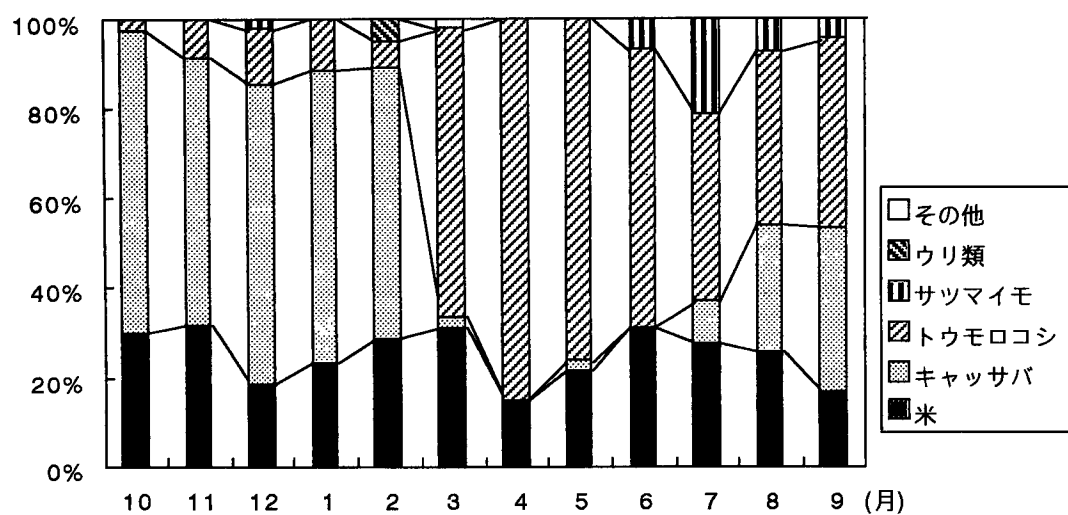


図 II-4 F村における主食品目の季節的变化

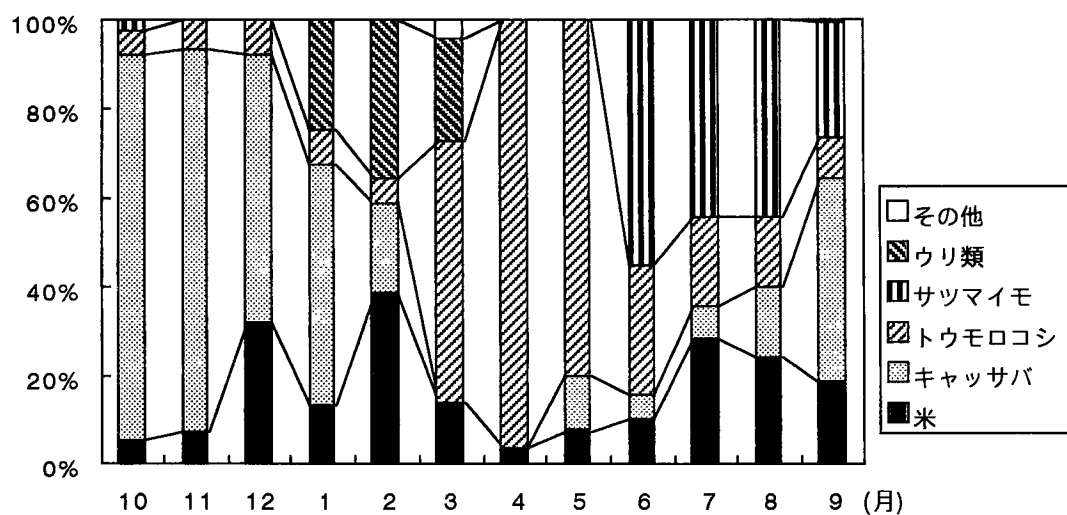


図 II-5 K村における主食品目の季節的变化

イモとウリ類がF村で食べられないわけではない。朝食時や間食時には、F村の人々もこれらを好んで食べていた。つまり、F村ではスナックとしてこれらの作物を食べているのである。これに対してK村では、まさに主食としてサツマイモやウリ類を食べる。筆者の聞いた話によると、1回の食事で13個ものスイカを食べたという男性がいた。これらの作物は、市場に出しても売れ残ることがわかっているため、かなりの量が自家消費にまわされて結果的にK村の家計を支えているのであろう。

### (3) 主食の入手方法

以上から、F村とK村では家計経済の立て方が根本的に異なっていると推定できる。F村では、毎日の食費が家計支出の大きな部分を占める。ところがK村では、自分たちで栽培した作物を主食にまわしているため、F村に比べて食費が少なくてすむ。サツマイモの収穫期（6~9月）およびウリ類の収穫期（1~3月）には、その差がとくに顕著になる。図にはあらわれないものの、おそらくトウモロコシの収穫期（3~5月）にも同様のことがいえるだろう。

このような主食自給率の違いは、両村の主食構成にさまざまな相違をもたらす。たとえば、統計的検定を試みると、F村とK村で同じ程度に食べられている作物はキャッサバのみであった（ $\chi^2$ -test,  $\chi^2=1.33$ ,  $df=1$ ）。米を食べる割合は、K村で有意に低い（ $\chi^2=7.62$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ ）。これは、現金収入の少ない農民にとって米が高価だからであろう。逆に、トウモロコシを食べる割合

（ $\chi^2=18.11$ ,  $df=1$ ,  $p<0.001$ ）と、サツマイモとウリ類を含む「その他」を食べる割合（ $\chi^2=62.37$ ,  $df=1$ ,  $p<0.001$ ）は、K村で有意に高かった。農民はこれらの作物を自給できるためであろう。

このような主食自給の違いを明確にするため、主食を現金購入した事例と自給した事例の割合を図II-6に示した。親族や知人に主食を分けてもらった事例は、自給した事例に累計した。9月のデータは1995~96年の調査時のもので、1月と3月のデータは1998年の補足調査時のものである。1998年3月にはK

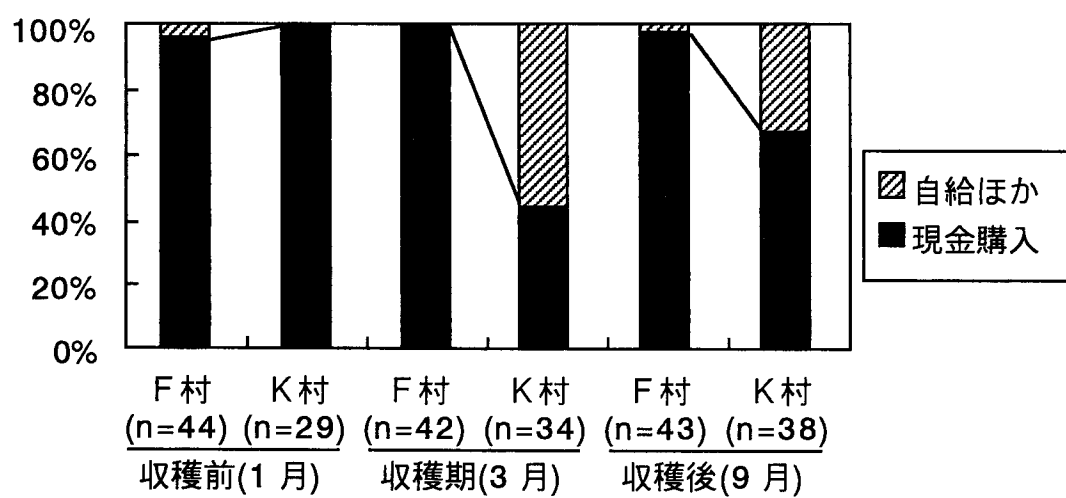


図 II-6 主食を現金購入した食事回数の割合

村の人口の大部分が畑で起居しており、有効回答数が少なかったので、村でなく畑でとった食事の事例も有効回答の中に含めた<sup>(14)</sup>。

まずK村についてみると、収穫前の1月にはすべての世帯が主食を現金購入しているが、収穫盛期の3月になるとその割合は44.1%にまで下がり、収穫後しばらく経った9月には66.7%となる。この数字は、主食作物を生産する農村にしては自給度が低いことを示している。K村の人々は穀倉のようなものを持たず、収穫した作物の大部分をただちに売却してしまう。そして、次の収穫期までの間、小規模な商業活動を営みつつ主食作物の一部を少しずつ現金購入しながら生活するのである。自分で収穫した作物をほとんど蓄えない理由について、K村のある者は「親族が食べ物をおねだりから (*Satsia, mangatake hane longon-teña*) 」であると答えた。収穫した農作物を長い間とっておくと、親しい者にねだられた時に断りきれず、同じ世帯以外の者に消費されてしまうというわけである。

ところがF村では、決して自給自足をしているとは思えないK村に比べてみても、現金購入した主食を食べる場合が多い。「自給など」に含めた例は、1月の2例と9月の1例のわずか3例にすぎない。しかも、これらの事例はすべて、遠くの知人が土産として主食を持ってきたというケースで、厳密には自給とはいえなかった。また、収穫直前の1月には農村でも現金購入した主食を食べることがほとんどであったものの、収穫期である3月と収穫後の9月にはその割合が低く、F村の主食自給度はK村より有意に低かった ( $\chi^2$ -test. 収穫期:  $\chi^2=31.30$ ,  $df=1$ ,  $p<0.001$ . 収穫後:  $\chi^2=13.83$ ,  $df=1$ ,  $p<0.001$ )。この傾向は、3月から9月までの他の月にも同様だと考えられる。K村における農耕は、現金獲得だけでなく、自家消費する食糧の獲得にも大きく寄与しているのである。

#### (4) 副食の品目構成と入手方法の違い

<sup>(14)</sup> 3月におけるK村の有効回答数34のうち、村でとった食事の事例は9件にすぎず、残りは畑でとった食事である。なお、食事品目の構成は、村と畑のあいだで大きな違いはなかった。

副食に用いられた食材の割合も、昼食と夕食のあいだで大きな差がなかった。この割合は調査時期によって変化してはいたが、主に天候による漁獲の有無が原因であり、季節的な要因によるものではない。そこで、すべての調査時期の昼食と夕食をまとめて、F村とK村における副食品目の違いを図 II-7 に示した。これを見ると、副食として魚を食べた割合はF村(48.0%)の方がK村(22.8%)よりはるかに多く、統計的にも有意である( $\chi^2$ -test.  $\chi^2=63.80$ ,  $df=1$ ,  $p<0.001$ )。いっぽう、他の食材を食べた割合は、F村でもK村でもほぼ等しかった<sup>(15)</sup>。K村に多いのは「副食なし」の場合で、F村では31.2%であるのに対しK村では56.3%にものぼり、その差は有意であった( $\chi^2=58.77$ ,  $df=1$ ,  $p<0.001$ )。K村ではF村に比べると魚が手に入りにくいいため、その分副食を食べない人が多いのである。

これらの副食を現金購入した割合を、図 II-8 に示した。これをみると、いずれの時期においても似た傾向があることがわかる。それは、F村で副食を自給する割合が高く、K村で副食を現金購入する割合が高いことである。統計的な有意差は、1月に現金購入した割合( $\chi^2$ -test.  $\chi^2=17.84$ ,  $df=1$ ,  $p<0.001$ )と、3月に自給した割合( $\chi^2=6.72$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ )にのみみられた<sup>(16)</sup>。このことから、F村ではK村よりも副食を自給する割合が高いといえる。しかし、注意しなければならないのは、副食の自給度に関する両村の差が、主食作物の自給度に関する差ほど大きくないことである。また、主食作物は毎日大量に消費され、欠かされることが決してないのに対し、副食はしばしば食べずにすまされる。このため、食糧供給の安定性について考えるときには、副食の自給度が高いことを過大に評価してはならないだろう。

<sup>(15)</sup> ただし、魚類以外の海産物を食べた割合は、K村の方が若干多かった( $\chi^2$ -test.  $\chi^2=4.96$ ,  $df=1$ ,  $p<0.05$ )。これは、K村の住民が、マングローブ林内のワタリガニ類や貝類を頻繁に採取するためである。

<sup>(16)</sup> ただし、1月の調査時には状況が特殊だった可能性がある。調査時には普段(1995年10月～翌年9月)と比べ、K村で豆を食べた割合が48.3%と極端に高く、逆に何も食べなかった割合が20.7%と極端に低かったからである。



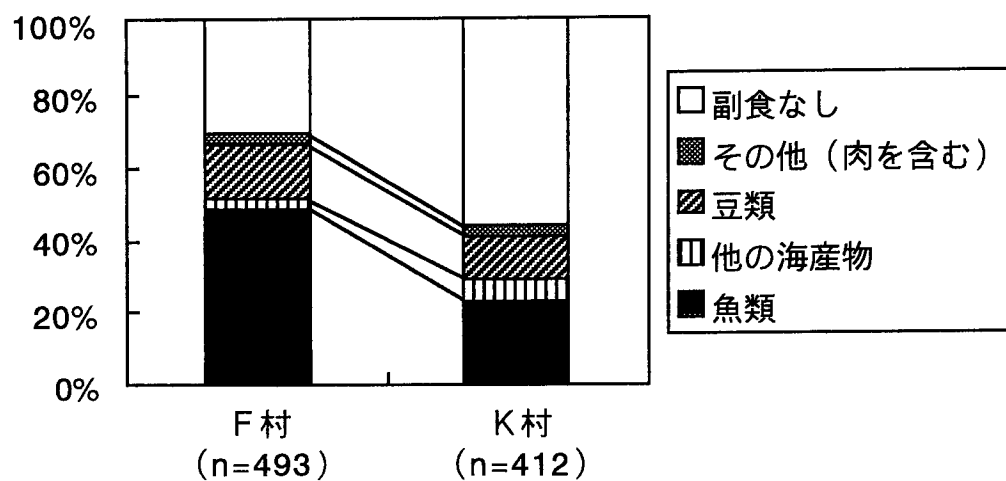


図 II-7 2つの村における副食品目の比較

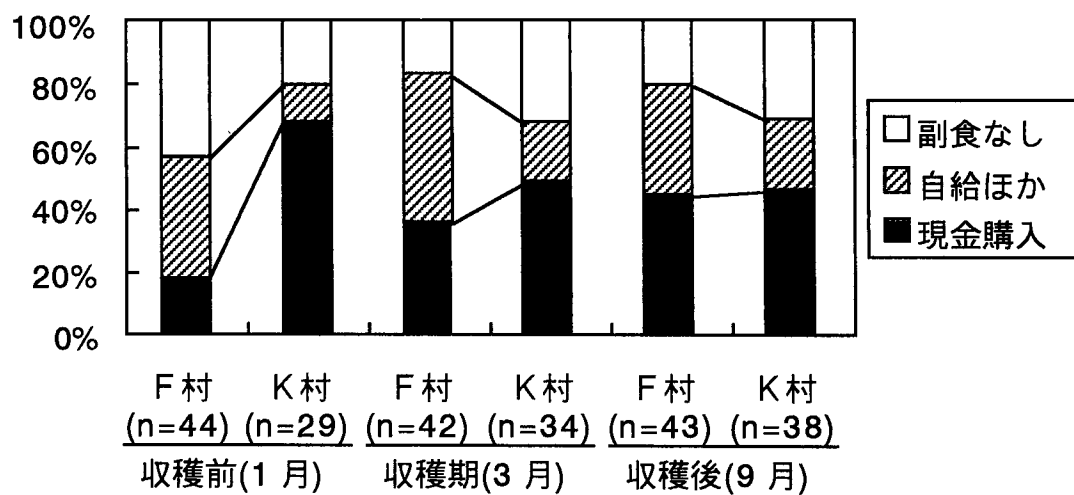


図 II-8 副食を現金購入した食事回数の割合

## II-5 考察：現金経済に強く依存する漁撈経済

以上から、F村とK村では生業だけでなく家計戦略も異なっていることが明らかになった。K村では、生存に必要な主食の大部分と副食の一部を自分たちで生産している。このように生産物がある程度まで自給するという小農（peasant）的な家計戦略は、市場経済が浸透すると自給傾向を弱めていくが（Cancian, 1989）、アフリカ地域では現在でも自給用食料生産が比較的活発である（坂本, 1998）<sup>(17)</sup>。これは、自然と社会の両面において不確実性が高く、小農は食料を自給することでリスクを軽減するためと理解されている（cf. 高橋, 1998）。ただし、これらの農村でも完全に自給自足を達成しているとはかぎらない。とくに、貧しい農家では、売値が低いにも関わらず収穫直後に農作物を売却し、他の時期には同じ農作物を現金購入することがある（Shipton, 1990）。その理由はまさしくK村の農民が語っていたとおりで、周囲の者たちが農作物を売却してしまった後には、自分だけのために農作物を備蓄することが難しいためである。K村では、食料の自家生産と食糧備蓄に際してのコストを同時に重視する結果、主食の自給度が収穫期前後に高く他の時期に低いという現象が見られるのである。

ところが、K村からきわめて近いF村では、家計戦略のあり方がまったく異なる。F村では、K村に比べればやや副食の自給率が高いものの、主食作物をほとんど自給できず、漁獲を売却して得た現金で購入する。F村の家計戦略の主眼は、現金獲得にあるといえる。このように漁村が農村に比べて市場経済に

---

<sup>(17)</sup> 国家的な視野に立てば、この傾向は農業部門の開発を阻害すると見なされることが多い（児玉谷, 1993）。このため、国際通貨基金と世界銀行は、農業部門の市場経済化を促すような構造調整政策を実施するよう各国に求めてきた（原口, 1995）。マダガスカルでは1982年から構造調整政策を開始している（Tudor, 1998）が、K村ではそれ以前から収穫直後に大量の農産物を販売していたらしいので、農民の市場依存が構造調整政策の結果であるとは考えにくい。

強く依存することは、本章の冒頭でも述べたように、他の地域でも珍しくはない。しかし、調査地域のような発展途上地域では、他人の生産した主食作物を現金で購入するという家計戦略にはリスクがともなうことがある。このことを念頭に、F村の家計戦略が成り立つ背景をもう少し詳しく検討したい。

調査地域は降水量が少ないので、K村では旱魃など自然災害のリスクが高い。いっぽう、F村では農作物価格の高騰という経済的なリスクが高い。1970年代半ば以降におけるマダガスカル<sup>(18)</sup>の経済的不振とそれにともなう物価上昇<sup>(18)</sup>を考慮するなら、農作物壊滅という事態が頻繁でないかぎり、K村のように最低限の主食作物を自給する方が安全なように見える。もちろん、F村の後背地が耕地化できなかったり、漁撈による生産性が農耕より明らかに高ければ話は別である。しかし、実際には後背地に余裕がないわけではなく、日常的な漁獲も多いといえない。漁獲量の詳細については次章で述べるが、たとえば7日間で59,750FMG相当の漁獲をあげた複合世帯F1では、その期間中に家族全員を養うため、少なくとも54,445FMGの主食購入費を必要としていた。最低限の生活を維持するだけの漁獲しかあがっていなかったといえる。また、Firthが述べたような仲買人による融資(II-1参照)が見られたわけでもない。このような状況下において、主食作物をほとんど生産しないF村の人々が楽観的に漁撈を続けていられる背景とは何であろうか。

F村の生計戦略について考える際には、現金獲得だけでなく、漁撈という生業に着目する必要がある。Astuti (1995a: 45-46) は、ヴェズの漁撈経済と農耕経済の違いを指摘し、「[漁撈] ヴェズの食糧探索は、その日その日に新規に始められる (a day-by-day affair)」と述べている。つまり、ヴェズの漁撈では、労働投入の成果がその日のうちに漁獲となってあらわれる。厳密に言うと刺網の漁獲は翌日になることもあるが、いずれにしろ、きわめて短期間で労働

(18) 1980年から1987年までの期間、マダガスカルにおける1人あたり国内総生産(GDP)は毎年0.3%の割合で減少しており、その間の物価上昇率は平均17.4%であった。この物価上昇率は、サハラ以南アフリカ地域の平均値よりも高い(Hodd, 1991)。

の効果があらわれることに変わりない。ヴェズの漁撈は、Woodburn (1982) の言う「即時的利得システム (immediate-return system)」と見なしうるのである<sup>(19)</sup>。このことは、乾燥気候のために栽培される農作物の種類が少ない調査地においては、とくに魅力的であっただろう。

また、長期間の食糧をまかなうほどの現金収入は得られなくても、数日間の食費程度の漁獲を得る機会が1年に何度も訪れるだろう。しかも、第IV章で述べるように、潜水などによって特殊な海産物を得る技術があれば、1週間ほど働くだけで数ヶ月分の食費に相当する漁獲があがる(飯田, 1998a; 1998b)。このように年間を通して現金収入の機会があり、その年間合計が決して少くないということが、F村の人々にとって沿岸漁撈の魅力となっているようである。

以上のようにヴェズ漁民が農耕民より深く現金経済に関与しているという指摘はこれまでもあったが(Battistini, 1964: 129)、実証的なデータまでは提示されていなかった。互いに近距離にある2つの村の生計戦略がこのように対照的であることは興味深い。両者はほとんど同じ気候条件のもとにありながら、生業の比重の置き方の違いのために、外部の社会や経済に対して異なったスタンスをとっているといえよう。つまり、現金経済と深くかかわるF村では、食糧生産の大部分を他地域に委ねており、外部社会に依存する度合いがK村より高い。このことは当然、外部社会との関わりによって進行していく近代化のあり方にも影響するだろう。F村は、K村にくらべて、積極的に外部社会からの影響を取り込まざるを得ないからである。だとすれば、2つの村の差異がますます広がる可能性もある。生業の比重のわずかな違いは今後どのような経過をたどるのか。それについて見守り考えていくことは、アフリカ地域の近代化と

---

<sup>(19)</sup> Woodburn がこの概念を用いたのは、狩猟採集社会が平等主義的傾向にあることを示すためである。しかし、現代ヴェズ社会では獲物の分かち合い (sharing) が広範かつ頻繁に見られるわけではなく、平等主義的傾向はあまり顕著ではない。これは、ヴェズ社会が現金経済と親和性が強いためと思われる。「即時利得システム」にもとづく社会においても、現金経済が浸透すれば、分かち合いとは別の再分配原理が採り入れられることが知られている (Tanaka, 1991)。

いう問題を考えるうえでも重要となろう。

## 第 III 章

### 村の地先の漁撈活動

### III 1 はじめに

近年、ローカルな社会と環境との関わりを論ずる視点として、広域的ないしグローバルな社会経済的文脈を重視するポリティカル・エコロジー論が脚光を浴びている。この潮流は 1980 年代初頭に地理学の分野を中心に起こったもので (Watts, 1983; 島田, 1999)、現在では多くの生態人類学者の関心と呼ぶとともに (Biersack, 1999; Kottak, 1999)、ポスト構造主義やフェミニスト理論などの影響をも受けて多様に展開しつつある (Peet and Watts, 1996; Escobar, 1999)。その特徴は、ポリティカル・エコノミー論 (Roseberry, 1988) の視点を援用しつつ環境問題を扱うという点であり、グローバルな資本主義システムに内在する広義の権力関係こそが第三世界の環境を劣化させた最大の原因だと説く (Bryant and Bailey, 1997)。

このような視点はマダガスカル漁民の生活を扱う本論文にとっても重要であるが、それ以前にまず、人々の生活に自然環境条件がいかに関わっているかを明らかにする必要がある。この過程は理論的にはあまり重視されていないが、これを怠ると、ポリティカル・エコロジー論を標榜しながら環境問題を扱っていないと批判されかねない (Vayda and Walters, 1999)。現場で生起する問題を政策的側面のみから捉えるのではなく、さまざまな因子を考慮しつつ問題発見的に研究を進める態度が必要であろう (cf. Scoones, 1999)。

この点では、人と自然環境の関わりを探求する生態人類学の視点 (Orlove, 1980; 秋道ほか, 1995) が有効であろう。とくに漁撈活動に関しては、生態人類学の黎明期である 1970 年代以来、日本各地の漁村を主なフィールドとしてさまざまな研究がなされてきた (Ohtsuka, 1970; 原子, 1972)。当時の研究で重視されたのは、漁師を中心とする活動系 (activity system) として漁撈活動を捉え、人間の行動が環境にいかに対応しているかを明らかにすることであった (渡辺, 1977)。このような視点は、「適応」を過度に強調しているとして批判されたこともある (Vayda and McCay, 1975)。しかし、漁撈活動を分析の対象に



据えるこのような視点には、大きな利点がある。それは、あらかじめ分析視角を設定するのでなく漁撈活動の具体的記述を出発点とするために、漁撈についての多様な側面の把握が可能になる点である。このことは、漁撈活動に関する初期の生態人類学的研究のテーマが多岐にわたっていることからわかる。たとえば、漁撈活動における技能の役割 (Akimichi, 1975; 秋道, 1977)、漁撈活動の性差 (Irimoto, 1972)、漁撈活動の年齢差 (Kuchikura, 1975)、漁獲対象に対する認知と漁撈活動との関係 (秋道, 1976)、漁種選択のプロセス (寺嶋, 1977) などである。また生態人類学以外では、漁場利用に関する地理学的研究 (田和, 1997) などにおいて、漁撈活動が取り上げられている。

本論文のように、人と自然環境の関わりを民族誌的に記述する目的でおこなわれた研究もある。市川 (1977) は、宮古諸島大神島における「人間と魚類その他の水族、および海洋学的諸条件 (無機的自然) との関係の綱目」を明らかにしようとした。本章でも、とくに前半部においてこの点を検討する。しかし市川自身も指摘しているように、漁民の暮らしを理解するためには、漁撈活動における自然環境との関わりだけでなく、魚の消費・交換・売却という経済的な側面も視野に入れる必要がある。本章の後半では、漁撈についての生態人類学が軽視しがちな経済的側面をも考慮するため、家計経済に対する漁獲の貢献を詳細に検討したい<sup>(1)</sup>。

## III 2 調査方法

### ①直接観察による出漁時間調査

村民の出漁状況を細かく把握するため、村の船着き場を見晴らす丘の上から、

---

<sup>(1)</sup> 外部との関わりを焦点に据えた人類学的研究には歴史的なアプローチを採用することが多いが (e.g. 栗本 井野瀬, 1999)、本論文ではむしろ調査地域の実状を把握することに努めた。「熱帯の海で、いまなにがおこっているか」 (秋道; 1995a) と問いかけること自体が、市場経済など外部との関わりにより生ずる変化について、洞察を得る糸口になるからである。

漁に出るすべてのカヌーの出入りを観察してその時刻を記録した。期間は、漁撈活動に大きく影響する潮汐の周期が 14.7 日であることを考慮し、1995 年 11 月 11 日から 25 日までの 15 日間とした。

観察は午前 5 時から午後 6 時までおこない、観察場所を離れる場合には調査助手が記録を代行した。また、カヌーに乗った者の名前と積み込まれていた漁具を記録し、沖でどのような漁をおこなったかを確認した。おこなった漁法が漁具からは不明な場合には、カヌーが帰ってきてから聞き込みによって確認した。

## ②出漁聞き込み調査

カヌーの出入りの観察だけでは、カヌーを用いない漁法の頻度を把握することができない。このため、1996 年 8 月 1 日から 14 日までの 14 日間と、1998 年 1 月 24 日から 2 月 6 日までの 14 日間、毎日夕方に村中のすべての世帯 (I-2 (3) 参照) を訪問してその日の出漁状況を聞き込み、村内の既婚男女がおこなった漁法をすべて記録した。漁への参加者も記録した。

## ③漁獲調査

漁獲効率や漁獲の行方などを具体的に把握するため、I-2 (4) で述べた 3 つの複合世帯のうち、アンパシラヴァ村に居住していた F1 および F2 を対象として、漁獲についての観察と測定をおこなった。方法は第 II 章の調査項目②で述べたとおりであるが<sup>②</sup>、第 II 章で用いた乾季の資料 (1996 年 6 月 9 日～22 日) に加え、雨季にあたる 1998 年 1 月 12 日から 2 月 8 日までの 28 日間にも同様の

---

② アンパシラヴァ村での調査ではとくに、海から持ち帰られた水族の方名や特徴を書き留めるとともに写真撮影し、種の同定につとめた。同定に際して主に依拠した文献は、魚類については Bauchot et Bianchi (1984)、van der Elst (1981)、Smith and Heemstra (1991)、益田ほか (1988) など、貝類についてはアボット ダンス (1985)、Dance (1992) など、棘皮類については Cannon and Silver (1994) などである。

データを得た。2つの複合世帯を1日交代で調査したので、それぞれの複合世帯のデータは、乾季7日分と雨季14日分である。なお、この調査の詳しい結果は巻末の附表1に示した。

### III-3 漁法の概要

#### (1) 追い込み刺網漁

アンパシラヴァ村でおこなわれている漁法を表 III-1 に示した。これらの漁法は、用いる漁具によって3つに大別できる。漁網を用いる網漁、釣り糸と釣り針を用いる釣漁、ヤスや銚などの刺突具を用いる刺突漁である。このうち、網漁をおこなうことは *mihaza*、釣漁をおこなうことは *maminta* と呼ばれており、それぞれ独自のカテゴリーとして認知されている。これに対し、刺突漁に対応する語彙をヴェズは持たない。

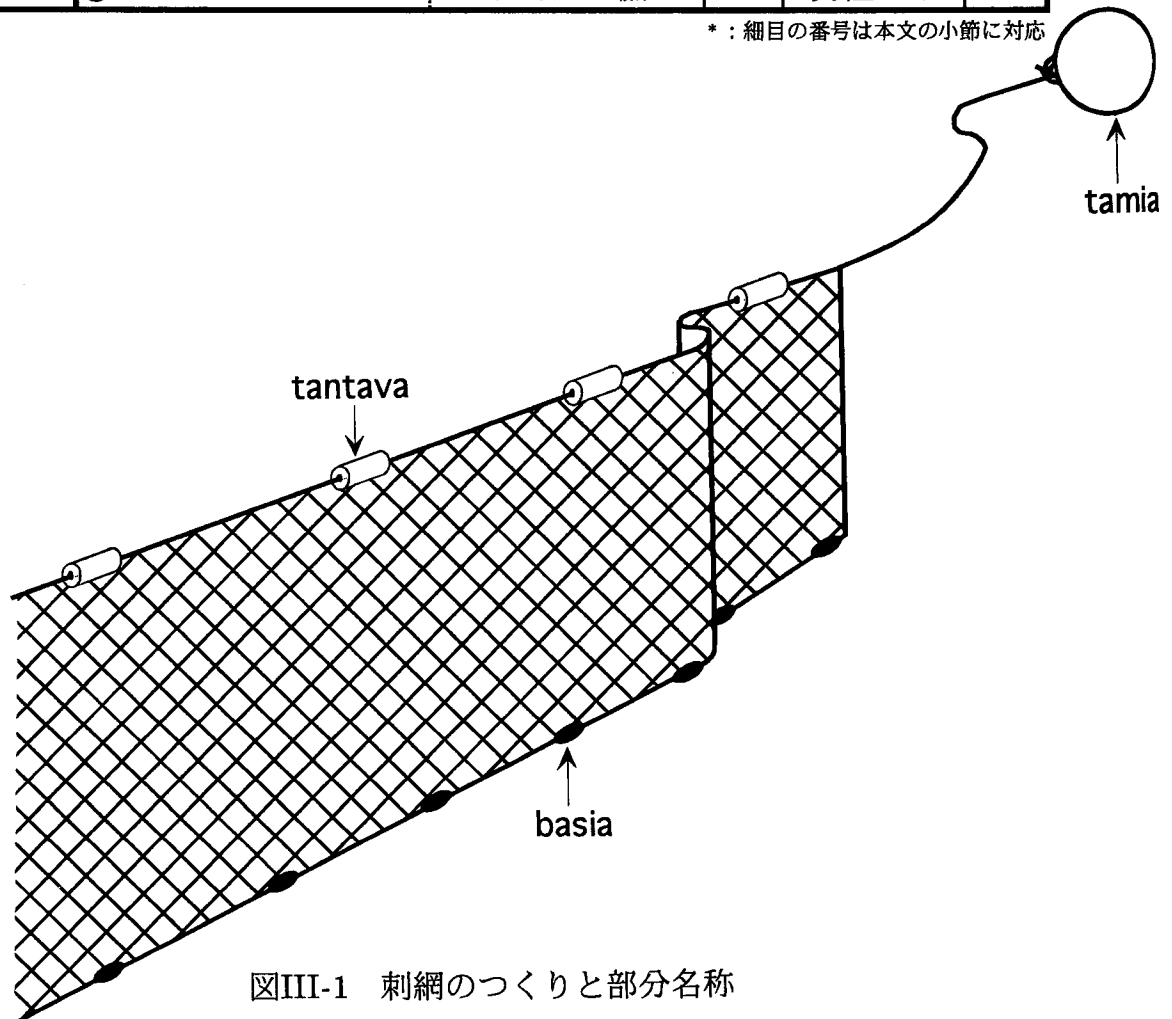
もっとも一般的な網漁は追い込み刺網漁で、単に「網漁をおこなう」*mihaza* と言ったとき、普通はこの漁法を指す。用いる漁具は長方形のナイロン製漁網 *harata talirano* で、それに木製の浮子（ウキ）*tantava*、鉛製の沈子（オモリ）*basia*、および適当な浮標 *tamia* をつけたものである（図 III-1）。網は高さ 2m 程度、長さ 100m 程度で、それを 2~3 枚継ぎ足して用いることもある。網目の目合は 70~100mm である。この網で捕れる魚は、体長にして 20~30cm、重さにして 200~400g 程度のものが多い。漁場となるのは陸地に比較的近い礁池であり、カヌーを用いてたどり着く。漁撈に用いるカヌーは、一般に全長が 2~3m と小型で、基本的には帆を張らずに櫂を漕いで進む。また、航海用の大型カヌー *laka be*（図 I-2 参照）はカヌー職人が製作することが多いが、漁撈用の小型カヌー *ana-daka* は漁師自身が加工して作ることも多い。しかし、船体やアウトリガーの大まかな形態においては、漁撈用カヌーと航海用カヌーは相似しているといっていよい（写真 III-1）。

漁は 2~3 人の成人男性によりおこなわれるが、人手不足のときは、成人男性

表 III-1 アンパシラヴァ村でおこなわれている漁法

漁の種類	細目*	方法	頻度	従事者の性	潮
網漁 (mihaza)	① <i>manao harata</i> <i>talirano (mihaza)</i>	追い込み刺網	◎	男性のみ	
	② <i>manandrake harata</i>	置き刺網 (浅瀬)	○	//	大潮
	③ <i>manao drañòke</i>	置き刺網 (沖合)	○	//	小潮
	④ <i>manao harata be</i>	まき網	○	//	大潮
	⑤ <i>manao jarifa</i>	サメ用刺網	△	//	
	⑤ <i>mandaro</i>	魚毒漁	△	//	
釣漁 (maminta)	⑥ <i>maminta</i>	釣り	◎	男女両方	
	⑦ <i>maminta hale</i>	夜釣り	○	男性のみ	
刺突漁	⑧ <i>mañirike</i>	潜水漁	◎	//	
	⑨ <i>mihaky</i>	磯釣り	◎	主に女性	大潮
	⑩ <i>mila zanga hale</i>	夜のナマコ漁	○	男女両方	//
	⑪ <i>mitinotino</i>	舟上からの刺突漁	○	//	//
	⑫ <i>mive fano</i>	ウミガメ漁	△	男性のみ	

\* : 細目の番号は本文の小節に対応



図III-1 刺網のつくりと部分名称



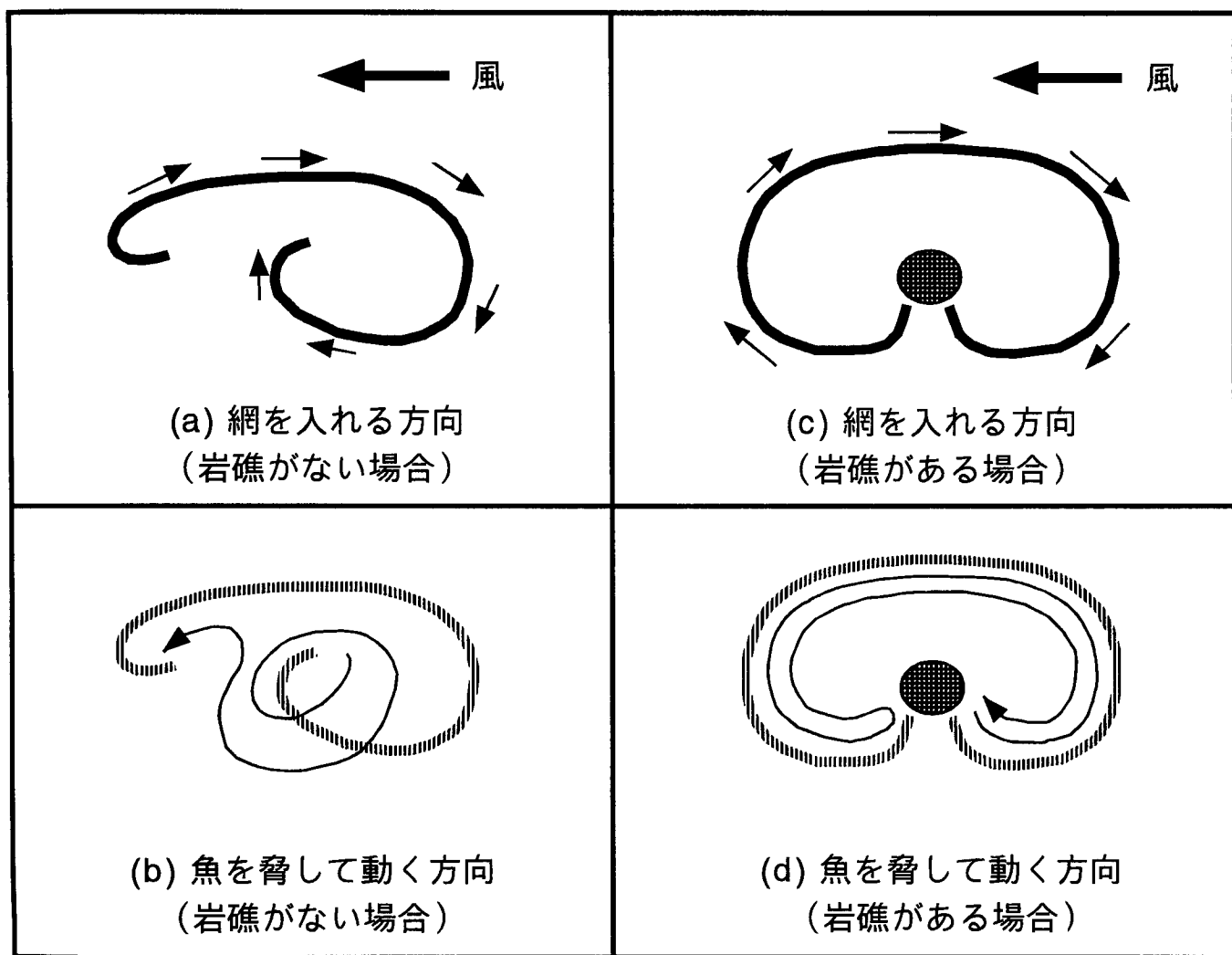
写真 III-1 漁撈用の小型カヌー *ana-daka*

1人と女性または子供でおこなうこともある。1人が網を張る方向にカヌーを進めていき、もう1人が進行速度に応じて網を海中に入れていく。網の張り方を上から見ると図 III-2 (a) のようになる。風上に向かってカヌーを漕ぎながら網を入れたのち、最後に渦巻きを描くように網を入れる。このようにして、魚が居そうな場所を囲い込む。次に、カヌーを漕ぐための棹で海面を叩いたり、櫂で船縁を叩いたりして大きな音を出しながら、カヌーを図 III-2 (b) のようにゆっくり進めていく。こうすると魚は驚き、逃げ回るうちに網にひっかかる。魚を脅しながら網を入れ始めた場所まで着くと、そこで網を上げ始める。1日の漁では、このような網入れが数度繰り返される。なお、この漁法は、魚のすみかである岩礁の周辺でしばしばおこなわれる。このような場合、図 III-2 (c) のように網を張り、図 III-2 (d) の経路で魚を脅してから網を上げる。魚がもっとも多くかかるのは網を入れ終えた部分、次いで入れ始めた部分であるという。

ナイロン製漁網が普及する以前は、バオバブ *renala* (*Adansonia grandidieri* Baill.) の樹皮の繊維 *hafotse* や綿糸 *fole* でできた網を用いていた。これら網は重くて扱いにくかったため、追い込み刺網漁でなく置き刺網漁が主におこなわれていたという。追い込み刺網漁に適した潮は大潮 *famonta* であるが、小潮 *leme rano* の時でも普通におこなわれる。大潮の日はこの漁がおこなわれる時間帯は、満潮時 *rano atsike* でなく、魚が深みに集中する干潮時 *rano maike* にかぎられる。

## (2) 置き刺網漁（浅瀬）

追い込み刺網漁と同じく刺網を用いる漁法である。置き刺網をおこなうことをヴェズの人びとは「網を握る」*manandrake harata* と呼び、*mihaza*（追い込み刺網漁）と区別することが多い。しかし、これを広義の *mihaza*（網漁一般）に含めることもある。置き刺網は、低潮（大潮の干潮）時に水路となるような、礁原内の浅瀬でおこなう。多くの場合、漁をおこなうのは2人で、そのうちの1人は成人男子であるがもう1人は女性または子供であることもある。まだ潮



図III-2 追い込み刺網の広げ方



が満ちているときに海に出て網を張り（*mañary harata* または *mañese harata*）、それが終わるといったん陸に上がる。網を上げる（*mangalake harata*）のは、潮が引いてもう一度満ちてからである。網を上げると、引き潮の潮流に流された魚が網にかかっている。

網は、漁場に応じてさまざまなサイズのものを使うことができるが、実際には、追い込み刺網漁で用いる漁網をそのまま用いることが多い。漁場は岸から歩いて行ける距離にあるが、普通はカヌーで出かける。もっぱら大潮の時におこなわれるが、ヴェズの男性はこのような「待ちの漁法」を好まないためか、大潮の時ですえ置き刺網をおこなう頻度は少ない。日中に他の仕事で忙しい場合にのみ、夜間に網が設置されるようである。

### (3) 置き刺網漁（沖合）

この漁法は (2) で述べたものと類似するが、海岸近くの浅瀬でなく礁湖のやや深い場所でおこなう。この網はとくにザヌケ *drañòke* と呼ばれる。ザヌケ漁も「網漁をおこなう」*mihaza* に含まれるが、普通は「ザヌケをおこなう」*manao drañòke* と表現される。ザヌケには、軽いナイロン製漁網よりも、丈夫な木綿製漁網 *harata fole* が好んで用いられる。1996 年当時、村で用いられていたザヌケは 1 統だけであった。網の高さは 3m 程度、長さは 200m 程度、網目の目合は約 80mm であった。漁は成人男性 2~3 人でおこなわれる。沖合の漁場までカヌーを漕いで行かなければならないため、女性や子供が参加することは少ない。浅瀬の置き刺網と同様、網を張ったあとはいったん陸に戻り、魚がかかるのを待ってから網を上げに行く。ただし、浅瀬の置き刺網と異なり、魚がかかるのは潮流が緩やかな小潮時である。

この漁で捕れる獲物は、先に述べた 2 つの網漁に比べると大きい魚が多く、1kg を超す魚も少なくない。漁獲を見ると、他の網漁では捕れないヨロイアジ類 *lanora* (*Carangoides* spp.) などが目立つ。しかし漁場が遠いため、この漁は

小潮の時でも追い込み刺網漁ほど頻繁にはおこなわれない<sup>(3)</sup>。

#### (4) まき網漁

ミナミキビナゴ *varilava* (*Spratelloides delicatus*)、メアジ *mahaloky* (*Selar crumenophthalmus*)、カマス *mandriandovoke* (*Sphyræna* sp.) など、群をなして沿岸に泳いでくる魚を視認したのち一網打尽にする漁法である (写真 III-2)。用いられる漁具は、刺網より大型の「大網」*harata be* である。このため、まき網漁をおこなうことを「大網をおこなう」*manao harata be* と言うこともある。だが普通は、捕獲対象に応じて「ミナミキビナゴの網漁をおこなう」*mihaza varilava*、「カマスの網漁をおこなう」*mihaza mandriandovoke* などと言い表わすことが多い。

大網は、袋網の部分 *pôsy* (フランス語の *poche* に由来) と、その両側に取り付けられる袖網の部分から成る (図 III-3)。袋網は、魚群をすくってカヌーに引き上げる際に用いるもので、網目の目合はせいぜい 4mm 程度と細かい。アンパシラヴァ村では、網戸に用いる網 *makarakarà* や蚊帳 *môskitô* (英語の *mosquito* に由来) を用いていた。筆者の計測した大網の袋網部分は、高さ 75cm、幅 300cm、奥行き 342cm であった。袖網は、魚群が逃げないように袋網の方に追いつけるのが目的であるから、必ずしも魚が通り抜けられないような目の細かい網を使う必要はない<sup>(4)</sup>。筆者が計測したものは、網目の目合が約 40mm であった。袋網と袖網の接合部分は、軽くて丈夫なキャンヴァス地を用いる。袖網の高さは、魚群が逃げないようにするため、漁場の水深を超えるものでなければならない。筆者の計測したものは、高さが 226cm であった。袖網の長さは計測できなかったが、両側を合わせて 100m には達していると思われる。漁をおこなう際には、成人男子 2~3 人が乗り込んだカヌーが 2~4 艘用いられる。ヴェ

<sup>(3)</sup> 遠隔地に出漁した時には、漁場が近いためにサメケ漁が毎日おこなわれていた。第 IV 章参照。

<sup>(4)</sup> ただし、カマスなどは袖網をおそれずに向かってくるので、網の目がカマスの魚体より小さくなくてはならないという。



写真 III-2 まき網漁のようす

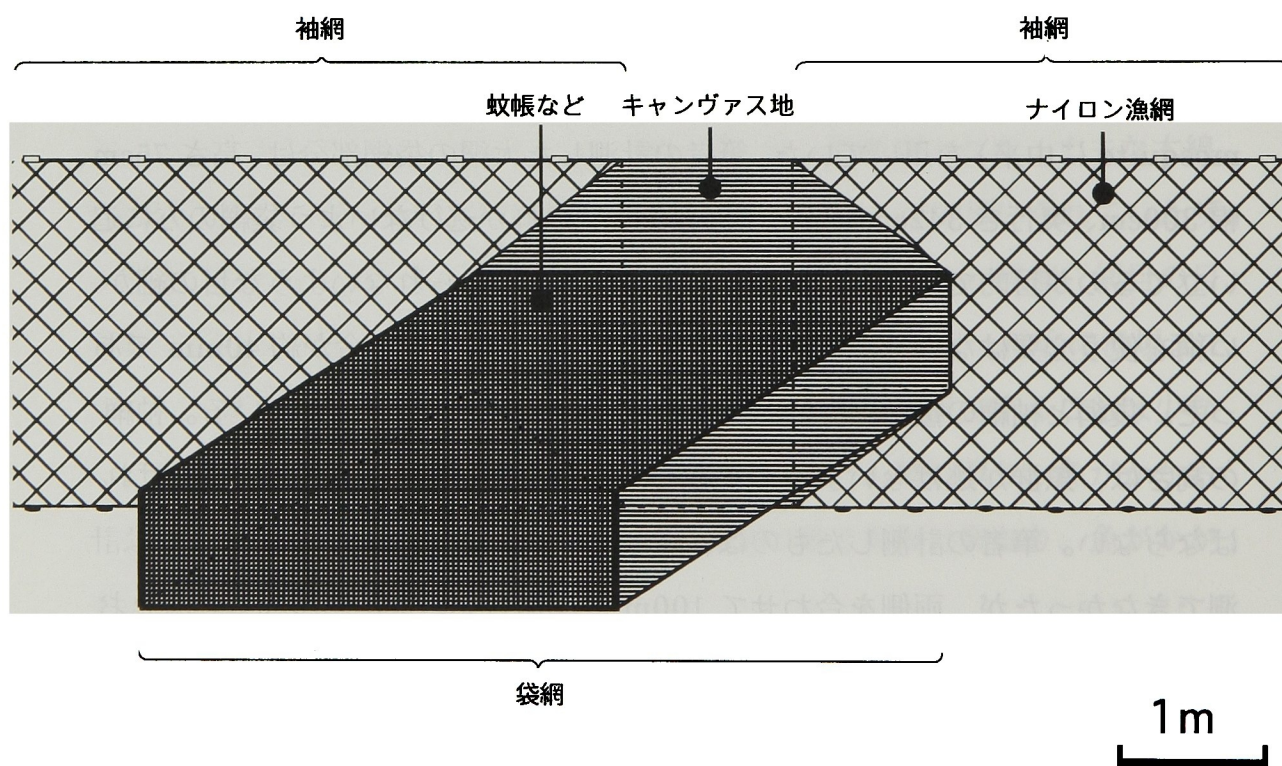


図 III-3 まき網のつくりと部分名称

ズのおこなう漁法の中では、比較的大規模といってよい。漁場は、追い込み刺網漁と同様、陸地に近い礁池である。

この漁法は、それぞれのカヌーが互いにある程度の距離をおきつつ、魚群を探索することから始まる。漁の対象となる魚は、体長が 3cm 程度のミナミキビナゴから 30cm 程度のカマスまで大きささまざまなが、いずれも大きな群をつくる点で共通している。魚群を発見したカヌーは速度を上げて魚群に近づくので、他のカヌーもそれを察知して魚群の周りに集まり、魚群を包囲する。カヌーの数が少なく包囲が十分でない場合は、カヌーから海に下りて魚群の動きを封じる者もある。魚群が包囲陣の周縁へ向かってくると、近くの者が水面を叩いて大きな音を出し、魚群を中心の方へ追い立てるようにする。このようにして魚群を包囲するいっぽう、大網を積んだカヌーは包囲陣に沿って網を広げていく。魚群を完全に円形で囲むと、他のカヌーの乗組員は海に飛び込み、魚群が逃げないように網をせばめていくのを手伝う。包囲網をどんどんせばめていくと、最終的に網の袋状の部分に魚群が追い込まれ、カヌーの上に引き上げられることになる。

まき網漁は、大潮の干潮時に水深が浅くなってからおこなう。また、魚群発見が必要であるため、海中が見えにくい曇りの日にはおこなわれない。もちろん、たとえ晴れていても魚群が見つからなければ、何も捕ることができない。このように、まき網漁をおこなう条件は刺網漁に比べて限られており、あまり頻繁におこなわれてはいない。

#### (5) サメ刺網漁と魚毒漁

この2つの漁法は、現在のアンパシラヴァ村ではほとんどおこなわれていない。サメの刺網漁は、1994 年から 1995 年にかけて試験的に近くの海でおこなわれていたが、サメが少ないことがわかって中止され、現在は遠隔地まで出漁しておこなわれる（第 IV 章参照）。魚毒漁も、魚が大量死するために他の村人の漁獲を減らしてしまうといわれるため、村が大きくなった今ではほとんどお

こなわれない。ただし、村の沖合のヌサオ島ではまれに魚毒漁がおこなわれるようである。魚毒に用いるのは、トウダイグサ科の低木 *laro* (*Euphorbia laro* Drake) の樹液である。

## (6) 釣り

釣りをおこなうことは一般に *maminta* と呼ばれる。普通の釣りは、チリメンアイゴ *amboramasake* (*Siganus sutor*) が主な漁獲対象であるため、アイゴ釣り *maminta amboramasake* とも呼ばれる。舟釣りと陸釣りがあるが、いずれの場合もサンゴ礁内部の礁池が漁場である。ナイロン糸と鉄の釣針を用い、釣竿を用いることはない。餌は、魚やタコの内臓、ホシムシ *maisa*

(*Sipunculoidea*) などである。陸釣りのときには2人以上でおこなうこともあるが、多くの場合、釣りは1人でおこなう。男性だけでなく女性も釣りをする。とくに、夫がいない女性は、おかずを捕るため頻繁に釣りをする。風がない日の方がよく釣れるというが、少しくらい風がある日にもおこなわれる。

## (7) 夜釣り

夜釣りは、フォークカテゴリーのうえでは日中の釣り *maminta* と区別されない。しかし、日中の釣りと夜釣りは、時刻だけでなく漁場や漁獲対象も異なるため、ここでは別の漁法と考えた。漁場は日中の釣りより遠く、サンゴ礁外の深海（外洋側礁斜面）で、村からは数 km 離れる。このため、成人男性2名以上が大きなカヌーに帆を張って漁場へ向かうことが多い。漁獲対象はハタ類 (*Serranidae*) などの大型魚で、5kg を越すこともあるため、太い釣り糸と大きな釣針を用いる。餌は魚の切り身などである。このような夜釣りは少数の者がたまにおこなうにすぎず、ふつう釣りといえばアイゴ釣りなど日中の釣りを指す<sup>(5)</sup>。

<sup>(5)</sup> アンバシラヴァ村では見られないが、日中にサンゴ礁外縁 *riva* の向こう側まで出かけて釣りをおこなう地域もある (cf. Astuti 1995a: 27)。筆者の印象によると、人口の多い町ほどこの傾向が強い。これは、



## (8) 潜水漁

背が立たないような深い場所でタコ *horita* (*Octopus* sp.) やナマコ類 *zanga* (*Holothuroidea*)、イセエビ類 *tsitsike* (*Panulirus* spp.)、魚類をヤス *voloso* で突く漁法である。普通は成人男子が 1~3 人で 1 艘のカヌーに乗って漁場まで行く。この場合、カヌーが流されないように、櫂を使いこなせる子供を連れていくことが多い。また、漁場によってはカヌーを用いずに歩いて行くこともある。海に潜るときには、水中でもよく見えるように、スキューバダイビングで用いるような水中眼鏡 *mākisy* (フランス語の *masque* に由来) を使う。深いところで潜水漁をするため、足ヒレを用いる者も稀にいる。ヤスの先端部分の長さは 30~40cm で、柄は 2~3m ほどの軽い木でできている。潜水漁は、風が強くて波が立つと、海が濁って獲物が見えなくなるためにおこなわない。波が静まっても、濁りが静まるまでの数日間はおこなわない。

## (9) 磯漁り

潜水漁と類似するが、「潜水漁をおこなうこと」 *mañirike* と「磯漁りをおこなうこと」 *mihaky* は、異なる動詞で表わされて明確に区別されている。磯漁りは、潜水漁のように深い場所でなく、せいぜい膝が浸かる程度の礁池や礁原でおこなわれる (写真 III-3)。捕獲対象はナマコやタコやシラヒゲウニ *soky*

(*Tripenustes gratilla*) や貝類などで、捕獲対象によって「ナマコを探す」 *mila zanga*、「タコを探す」 *mila horita*、「シラヒゲウニを漁る」 *mipaike soky*、「ヒザラガイを漁る」 *mipaike salabato* などともいわれるが、これらを一括して「磯漁りをおこなう」 *mihaky* ともいわれる。この漁は、サンゴ礁原が干出する大潮の干潮時にのみおこなう。普通は女性や子どもが何人かで連れだって行

---

ヴェズである筆者の友人によると、海岸近くの魚が人口に対して少ないためだという。それに加えて、*riva* で捕れるヨコシマサワラ *lamatsa* (*Scomberomorus commerson*) がフランス料理の材料として高い値段で売れることも、理由の 1 つであろう。





写真 III-3 磯漁りのようす



き、成人男性はこれに加わらない。水中眼鏡は用いない。漁具として用いるヤスは、陸上で扱いやすいように 1~2m の短いものを使うが、その他の点では潜水漁で用いるものと同じである。

#### (10) 夜のナマコ漁

これは磯漁りのバリエーションで、夜間に月明かりや篝火を頼りにナマコを採取する。ヴェズの人びとはこの活動を「夜にナマコを探す」 *mila zanga hale* と呼び、「ナマコを探す」 *mila zanga* あるいは「磯漁りをおこなう」 *mihaky* ととくに区別していない。実際、低潮時にサンゴ礁原でおこなう刺突漁という点で、両者は共通している。しかし、風が静かな月夜には買値の高いナマコが無数に出てくるために、夜のナマコ漁には女性だけでなく男性も大勢参加する。ただし、月の明るい大潮の夜は月に 3~4 日ほどしかなく、しかも風が静かで寒すぎないとなると、この漁がおこなえる日は年間でも限られている。

#### (11) 舟上からの刺突漁

この漁法は *mitinotino* という特別な動詞で表されるが、「磯漁りをおこなう」 *mihaky* の一種であると考えられている。普通の磯漁りと同様、大潮の干潮時に、サンゴ礁原の近くの浅瀬で舟の上から海底をのぞき、タコやナマコやシラヒゲウニなどをヤスで突いて採る。普通の磯漁りと違い、男性も参加することが多い。

#### (12) ウミガメ漁

ヴェズの男性にとって、ウミガメ *fano* (Cheloniidae) を捕らえることは大きな名誉である。漁師は、カヌー上からウミガメを発見すると離頭鉈 *teza* を投げつけ、鉈先に結わえたロープでカヌーを引かせて、弱ったところを捕らえる<sup>⑥</sup>。

<sup>⑥</sup> ウミガメの捕獲とそれを食べる際の儀礼的慣行については、Battistini (1964: 119) が触れている。



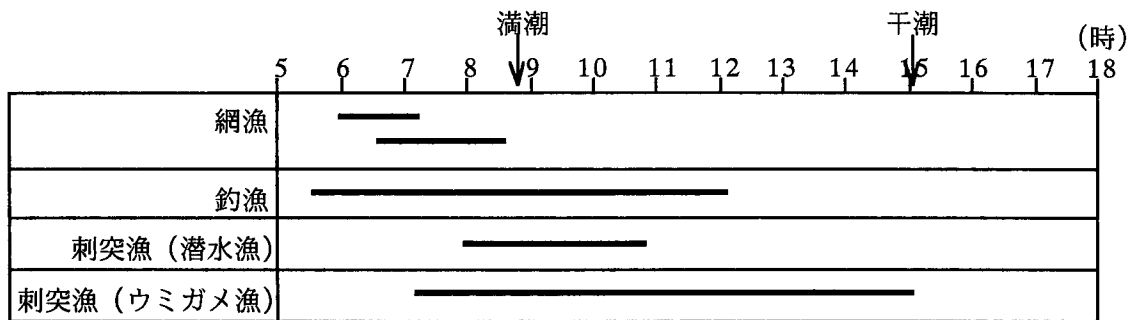
アンパシラヴァ村にはかつてウミガメ漁の名人がいたと伝えられているが、現在ではほとんどおこなわれていない。アンパシラヴァ村に住むある男性は、1995年にわずか数日間ではあるが、他の村から来た姻族にウミガメ漁を習っていた。しかしこの男も、姻族が帰ってしまうとウミガメ漁をおこなわなくなった。

### III-4 漁撈活動の諸側面：活動時間、漁法および同行者の選択

#### (1) 漁撈活動時間の日変化と月変化

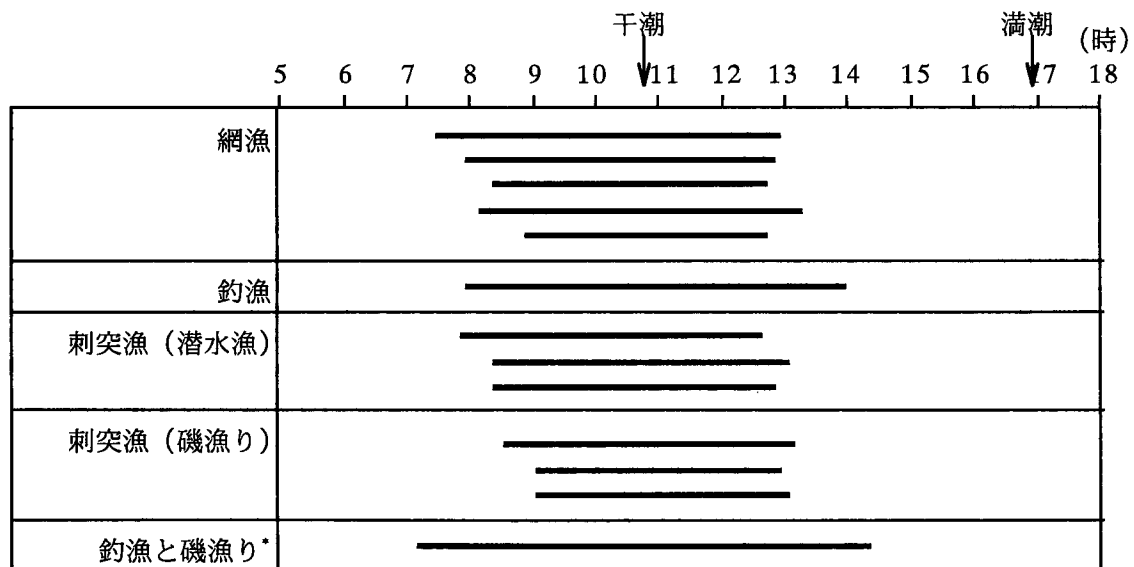
図 III-4 に示したのは、小潮の日における、全カヌーの出漁時間調査（調査項目①）の結果である。網漁を細かく区別してはいないが、図 III-5 に示した大潮の日の出漁状況と見比べてみると、漁撈時間の違いが明確にあらわれている。まず小潮の日（図 III-4）には、午前中に比較的良好に漁撈活動がおこなわれているものの、活動時刻がかなり分散している。いっぽう大潮の日（図 III-5）には、漁法にかかわらず干潮の前後4時間ほどのあいだに漁撈活動が集中している。大潮の日にも7時間活動していた例があるが、これは、漁場が遠かったり漁師の体力が衰えていたりして、カヌーを漕いで漁場を往復するまでの時間がかかったためである。しかしこの場合でも、干潮時刻前後に活動している点では、他の漁師と共通している。

つまり、小潮の日は漁撈活動の時刻が分散しており、大潮の日は干潮時刻後に漁撈活動が集中するのである。この傾向は、特定個人の漁撈時間についても確認できる。図 III-6 に示したのは、異なる漁法をおこなう2人の漁師の、2週間における漁撈時間の変化である。この2人（F1-2I と F2-2C）は、いずれも、漁獲調査の対象となった複合世帯の成員である（図 I-6 参照）。11月11日から16日にかけては、大潮から小潮へ変わっていく期間で、干潮時の潮位は高くなっていく。干潮時刻は午後である。17日頃に干潮時の潮位が下がり始めるが、この時はまだ小潮で、干潮時刻も早朝ないし日没後である。このように、干潮時刻が朝または昼頃以外の場合、午前中に出漁が多いものの、出漁の時刻はま



\*: 干潮時刻と満潮時刻はトゥリアアラ市の潮汐表による

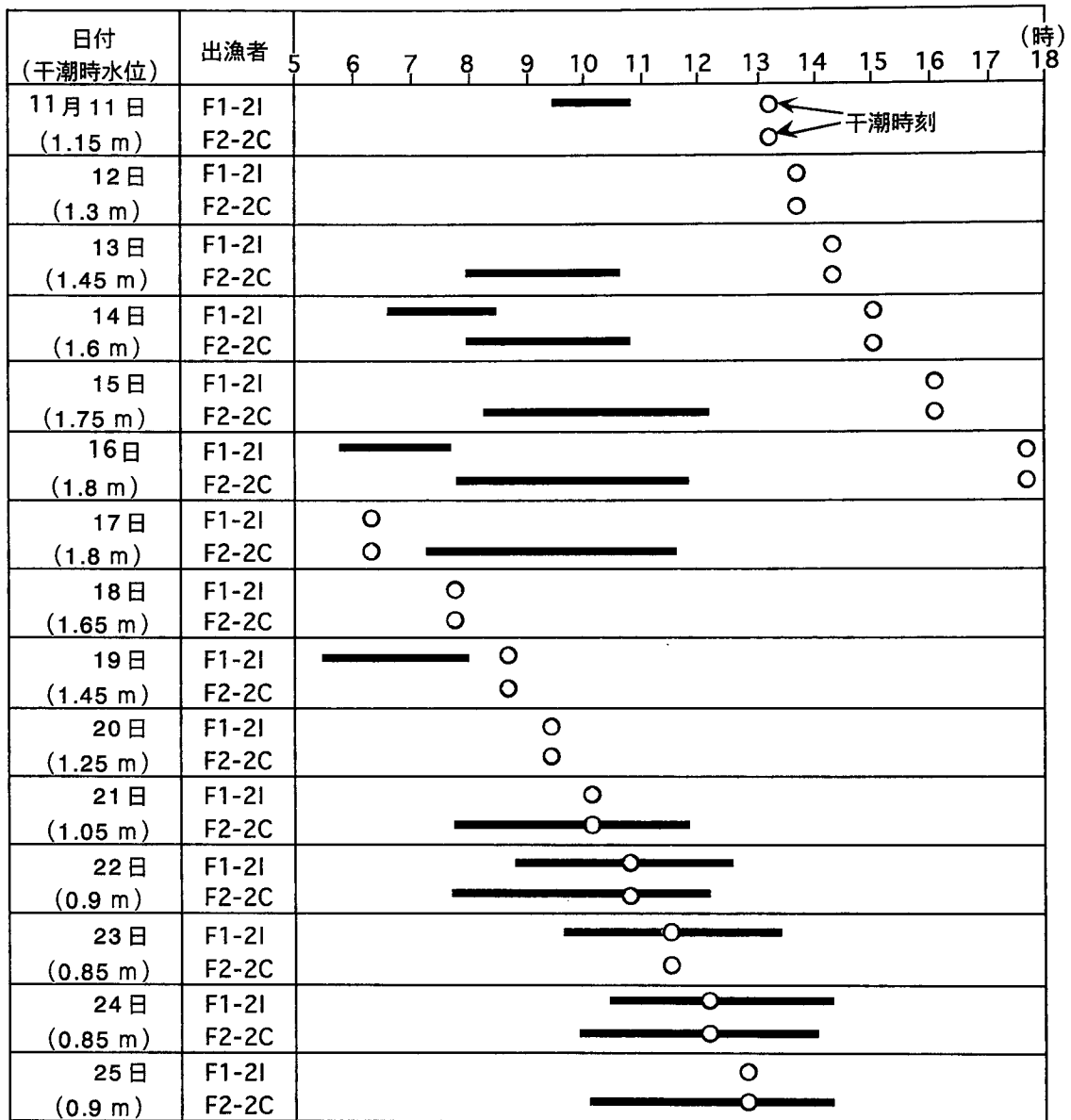
図 III-4 小潮時の出漁時間の例 (1995 年 11 月 14 日)



\*: 夫が釣漁に、妻が磯漁りに行ったケース

\*\* : 干潮時刻と満潮時刻はトゥリアアラ市の潮汐表による

図 III-5 大潮時の出漁時間の例 (1995 年 11 月 22 日)



\*干潮時刻はトゥリアラの潮汐表による

図 III-6 出漁時間の日変化 (1995 年)

ちまちである。また、出漁頻度も全体的に少ない。18~19日頃になると、干潮時刻が朝方以降になるため、それに合わせて漁撈活動がおこなわれるようになる。この傾向は、大潮を過ぎて干潮時刻が午後1~2時頃になるまで続く。その後、26日頃にはふたたび11日と同様に干潮時刻が午後遅くなるため、朝方に漁撈活動がおこなわれるようになる。

このように、大潮時に干潮時刻に合わせて漁撈がおこなわれるのは、サンゴ礁原の浅い場所で盛んに漁がおこなわれるためであろう（表 III-1 参照）。とくに、磯漁りやまき網漁は低潮時（大潮の干潮時）しかおこなえないし、低潮時以外にも可能な追い込み刺網漁や日中の釣り、潜水漁なども、低潮時の方が作業しやすい。このため小潮になって干潮時の水位が高くなると、沖合の置き刺網漁などをおこなう場合もあるが、総じて漁撈が活発でなくなるのである。

## (2) 漁法選択の性差

図 III-7 は出漁調査（調査項目②）の結果をまとめたもので、調査した14日間の出漁日数を示している。聞き込みはアンパシラヴァ村の既婚男女すべてを対象としたが、この期間に7日以上村に不在だった者は分析から除外した。これを見ると、7日（2日に1度の割合）以上漁に出る者は、女性より男性に多いことがわかる。また、平均出漁日数も男性の方が多い。乾季には、男性の平均出漁日数が5日であるのに対し、女性は3.96日であった。また雨季には、男性の平均出漁日数が5.88日、女性は2.37日であった。とくに雨季における男女差は、統計的にも有意であった（Mann-Whitney's U-test.  $U=303.5$ ,  $n_1=40$ ,  $n_2=39$ ,  $z=-4.67$ ,  $p<0.001$ ）。

男女の性差は、出漁日数だけでなく、選択する漁法にもみられる。表 III-2 は、全出漁日数のうち、各漁法をおこなった日数の割合を示したものである。1人の人が同じ日に2つの漁法をおこなった場合、それぞれの漁法をおこなった日数を0.5日として数えた。これを見ると、男性は追い込み刺網漁をはじめとして、まき網漁、釣り、潜水漁などさまざまな漁をおこなっている。これに対し、

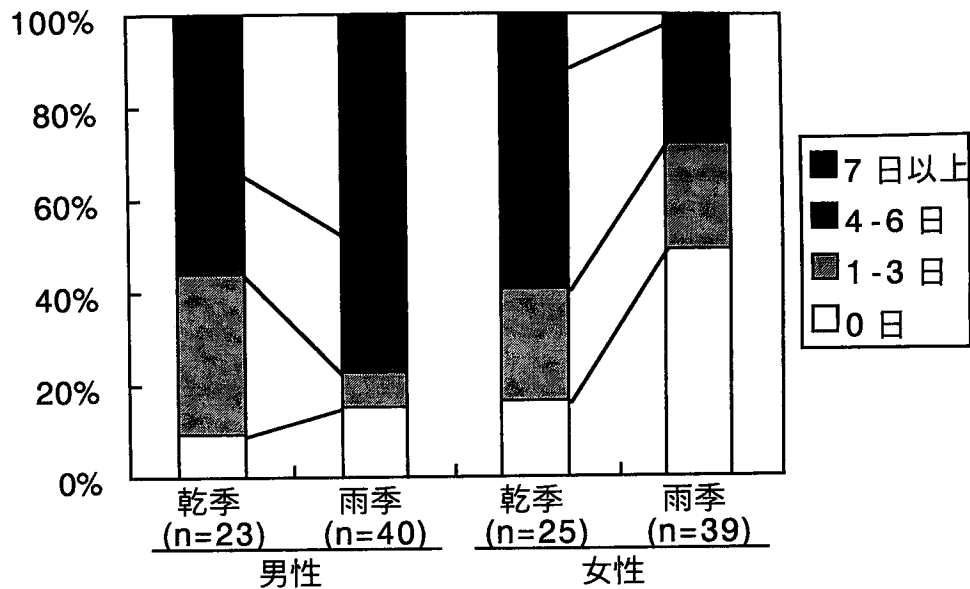


図 III-7 既婚男女の出漁日数の季節変化 (14 日間)

表 III-2 各漁法がおこなわれた割合 (14 日間、単位：%)

	男性		女性	
	乾季	雨季	乾季	雨季
対象人数	23 人	40 人	25 人	39 人
追い込み刺網	44.0	43.0	12.9	11.1
置き刺網 (浅瀬)	1.9	3.6		
置き刺網 (沖合)	3.2			
まき網	15.7	13.6		
釣り	16.7	1.3		9.3
夜釣り		4.5		
潜水漁	8.3	31.1		
磯漁り	6.9	3.0	87.1	79.6
夜のナマコ漁				-
舟上からの刺突漁	3.2			
合計	100	100	100	100
のべ出漁日数	108 日	235 日	85 日	81 日
平均出漁日数	5 日	5.88 日	3.96 日	2.37 日

女性がおこなう漁の種類はかぎられている。比較的頻度が高いのは磯漁りで、他には釣りと追い込み刺網漁だけであった。ただし、追い込み刺網漁に参加する場合も、夫の漁を補佐するにすぎないことがほとんどである。磯漁りと釣りはいずれも舟を操る必要がなく、労働の負担が比較的軽いため、家事に多くの労働をさかななければならない女性に好まれるのであろう。

調査地における漁撈活動は、出漁日数から見ても漁法の多様性から見ても、男性を中心におこなわれているといえる。

### (3) 漁法選択の季節差

出漁日数と漁法に関する資料は、漁撈活動の性差だけでなく季節差をもあらわしている。まず、男性の平均出漁日数が雨季に若干多くなっている。これは、天候不順の雨季になると、乾季に遠隔地まで出漁していた働き盛りの男性が村へ帰って来るためである<sup>(7)</sup>。調査対象となった男性が雨季に多いのも同じ理由による。いっぽう、女性の平均出漁日数は乾季で 3.96 日、雨季で 2.37 日と乾季に多く、この差は統計的にも有意である (Mann-Whitney's U-test.  $U=267.5$ ,  $n_1=25$ ,  $n_2=39$ ,  $p<0.005$ )。その理由として、雨季になって出漁先から夫が帰ると家事が増えること、夫が漁に出るので妻は出漁する必要がないことなどが考えられる<sup>(8)</sup>。調査対象となった女性の数が雨季に多いのは、夫が出漁している乾季に多くの妻が実家の村に帰ってしまうためである。

漁法の季節差は表 III-2 から検討できる。男性に関するもっとも大きな季節差は、雨季には潜水漁を頻繁におこなうことである。この差は統計的にも有意である ( $\chi^2$ -test.  $\chi^2=20.96$ ,  $df=1$ ,  $p<0.001$ )。これは、潜水漁の担い手である若

<sup>(7)</sup> アンバシラヴァ村における季節的な遠隔地出漁の詳細は、第 IV 章で述べる。

<sup>(8)</sup> ただし、このような季節差が生じる根本的な原因は、女性が漁にあまり熱心でない点に求めることができる。女性はまず家事労働をおこなうよう期待されているのであり、それ以外の労働をおこなうかどうかは些細な理由で左右される。このような背景のもとでこそ、さまざまな理由によって雨季の出漁頻度が低下するのである。詳細は III-6 (1) を参照。

者たちが雨季に遠隔地出漁から戻ってくるためである。その他の点では、乾季と雨季にほとんど違いはない。沖合の置き刺網漁や舟上からの刺突漁は雨季におこなわれていないが、これは季節差というより、サンプル数が少ないことによる統計上の誤差というべきであろう。これらの漁法が乾季におこなわれる割合は、全出漁回数の3%程度にすぎない。

以上のように、漁撈活動の季節差は、水産資源や漁撈条件の季節変化によるのではなく、主として季節的な遠隔地出漁の有無により生じている。アンパシラヴァ村でおこなわれる漁法は、いずれも、特定の季節に限られるものではない。

#### (4) 同行者の選択

多くの漁法は、複数の漁師による協同作業を必要とする。漁への同行者の選択について、出漁聞き込み調査（調査項目②）で得られた事例<sup>(9)</sup>からみてみよう。表 III-3 は、聞き込んだ 159 事例のうち、2 人で出漁した 113 例において、同行者どうしがどのような親族関係にあったかを示したものである。聞き込み調査は合計 28 日間と短く、すべての漁法についてじゅうぶんな事例が得られたわけではないので、漁法ごとの比較はできない。しかし、いずれの漁法をおこなう場合でも、ごく近い親族の中から同行者を選んでいることがわかる。比較的多いのは、同行者が夫婦（①）か親子（②）、兄弟（③）の場合であり、これらの事例だけで全体の 62% を占める。「その他」として示した 12 例に関しても、同行者の間には親族関係がみられた。すなわち、12 例のうち 5 例は従兄弟の息子（MBSS）<sup>(10)</sup>、5 例は妻の従兄弟（WFBS）、そして残りの 2 例は妻の従兄弟

<sup>(9)</sup> この中には、村に在住する成人だけでなく、外来者や幼少の者と漁撈をおこなった事例も含まれる。また、磯漁りなど、カヌーを用いなかった漁撈活動の事例は含まれていない。このような場合には協同した集団の範囲が明確でないためである。

<sup>(10)</sup> 同行者間の関係を簡略かつ正確に表記するため、以下では略号を書き添えた。H は夫（Husband）、W は妻（Wife）、F は父親（Father）、M は母親（Mother）、B は兄弟（Brother）、Z は姉妹（sister）、S は息子（Son）、D は娘（Daughter）を表す。MBSS は「母親の兄弟の息子の息子」なので、日常的

表 III-3 2 人で出漁した場合の同行者同士の関係 (1)

	追込刺網	置刺網 (浅瀬)	潜水漁	船からの 刺突漁	潜水漁と 磯漁り	その他	合計
①夫婦	20				6		26
②親子	14	1	1				16
③兄弟	16		7	4			27
④父方オジ-甥	5	1	2	1			9
⑤母方オジ-甥	4	1					5
⑥父方平行イトコ							0
⑦母方平行イトコ							0
⑧交叉イトコ	2		1				3
⑨舅-婿	3						3
⑩小舅-婿	2					1**	3
⑪ <i>mpirahalahy</i> *			8				8
⑫その他	4		8				12
⑬不明						1***	1
合計	70	3	27	5	6	2	113

\* : *mpirahalahy* の原義は「兄弟」「従兄弟」であるが、ここでは、それぞれの妻が実の姉妹である二人の男という意味で用いている。

\*\* : 釣りによる。この事例においては構成員はともに女性なので、正確には「小姑-嫁」関係にある。この例と、夫婦で出漁した例以外は、いずれも男性ばかりで出漁した。

\*\*\* : まき網による。村外在住者と漁をおこなった事例。



の息子 (WFZSS) が、同行者として選択されていた。

表 III-4 は、同じ事例を別の観点から集計したものである。すべての漁法を一括し、①2人の同行者が同じ世帯に属するかどうか、②同じ複合世帯に属するかどうか、③同じ村に居住するかどうかを区別した。ここでいう複合世帯とは、I-2 (4) で定義したように、「同じ村に父母や祖父母を持たない夫婦（もしくはその一方）の世帯と、その周囲に隣接して居住する子孫の世帯の集合」のことである。表を見ると、同じ世帯や複合世帯の者どうしで出漁することが多いが、同世帯の者どうしで出漁する場合、夫婦で出漁する例がほとんどである。つまり、男性どうしが出漁する場合には、世帯は異なるが複合世帯が同じ者どうしで漁に出かける傾向があるといえる。

しかし、複合世帯が異なる場合でも、協同して漁をおこなう例は少なくない。とくに、異なる村に住む親子や兄弟、姻戚関係によって結びつく者などは、互いに村を訪問するたびに漁に同行している。また、同じ複合世帯の者が漁に同行できない場合には、同じ村に住みながら複合世帯を異にする者をパートナーにすることがある。このような事例 16 例のうち男だけで出漁したのは 15 例で、このうち一方の漁師が複合世帯で唯一の成人男性というケースが 4 例、一方の漁師の複合世帯には他の成人男性が 1 人しかいないというケースが 9 例あった。つまり、複合世帯を異にする者どうしが出漁する事例は、一方の漁師が小さい複合世帯に属する場合や、村外から親族が訪ねてきた場合に多いといえる。

この傾向は、3人で出漁する場合にも見ることができる。表 III-5 に示したように、多くのケースでは 3 人全員が同じ複合世帯に属しているか、同じ複合世帯に属する 2 人が村外からの訪問者と出漁していた。訪問者を含む事例のうち、村内居住者と訪問者との関係が不明な 3 例を除く 10 例においては、村内居住者と訪問者は兄弟 *mpirahalahy*<sup>(11)</sup> か、姉妹の配偶者 *velahy* という関係にあった。

---

表現を用いれば「従兄弟の息子」を意味することになる。

(11) キョウダイの関係は一般に *mpizoky* と呼ばれることが多いが、ここでは男の兄弟であることを強調するために *mpirahalahy* とした。表 III-3 および表 III-4 の *mpirahalahy* とは別の関係である。ヴェズ方言

表 III-4 2 人で出漁した場合の同行者同士の関係 (2)

	世帯が同じ	世帯は異なるが 複合世帯が同じ	複合世帯は異なるが 同じ村に居住	異なる村に居住	合計
①夫婦	26				26
②親子	7	8		1	16
③兄弟	4	16	5	2	27
④父方オジ-甥		8	1		9
⑤母方オジ-甥		5			5
⑥父方平行イトコ					0
⑦母方平行イトコ					0
⑧交叉イトコ		2	1		3
⑨舅-婿		2		1	3
⑩小舅-婿			3		3
⑪ mpirahalahy*				8	8
⑫その他			5	7	12
⑬不明				1	1
合 計	37	41	15	20	113

\* : mpirahalahy の原義は「兄弟」「従兄弟」であるが、ここでは、それぞれの妻が実の姉妹である二人の男という意味で用いている。

表 III-5 3 人で出漁した場合の同行者同士の関係

		追い込み刺網	まき網	潜水漁	合計
全員が 村内に 居住	全員同じ複合世帯	8		3	11
	1人が異なる複合世帯			1	1
	全員異なる複合世帯	1		1	2
村外居住者 1 人を含む*		8		1	9
〃 2 人を含む		1	2	1	4
合 計		18	2	7	27

\* : 村内に居住する 2 人は、いずれも同一の複合世帯に属していた

これに対し、同じ村に居住する2つ以上の複合世帯が協力して漁をおこなうことは少なかった。

4人以上で出漁した場合は表 III-6 に示した。まき網漁では、村外からの訪問者を交えつつも、同じ複合世帯に属する者が一緒に漁をおこなう傾向が顕著だった。2つの複合家族が協力していたのは、出漁人数が7人以上と多くなった場合のみである。ただし潜水漁の場合には、4人という少人数の時にも、2つの複合世帯が協力している。これは漁法の性格を反映している可能性が高いが、事例数が少ないので断定できない。

以上から、調査村においては、村外からの訪問者がいない場合には複合世帯の内部から漁のパートナーを選ぶことが多いといえる。しかし、漁師たちが複合世帯について明確な概念を持っており、漁のパートナーを選ぶ基準にしているとは決して言えない。共通の父母や祖父母を持ち、居住地が隣接している複数の世帯では、おのずから交渉が頻繁なために漁でも協同することが多いというべきである。だからこそ、定義上1つの世帯だけで複合世帯を構成しているような場合でも、村内の他の世帯と密な交渉を持つことによって漁のパートナーを見いだすことができるのである。

### III-5 漁獲の分配と消費・流通

#### (1) 漁獲の分配

漁を終えて帰ってきた漁師は、近くにいる漁師仲間や子どもたちの力を借りて、汀線と集落の間にカヌーを上げる。漁獲の分配はその直後から始まる。ま

---

では、男にとっての兄弟を *rahalahy*、姉妹を *anabavy* と呼び、女にとっての兄弟を *anadahy*、姉妹を *rahavavy* と呼ぶ。これらの語に接頭辞 *mpi*-をつけると、兄弟 *mpirahalahy*、姉妹 *mpirahavavy*、異性キョウダイ *mpianadahy* という関係を示す語になる。年上のキョウダイ *zoky* と年下のキョウダイ *zay* は、性別に関わらず用いられる。また、同世代の姻族については、同性の場合 *velahy*、異性の場合 *rañao* と呼び合う。

表 III-6 4人以上で出漁した場合の同行者同士の関係

(漁法)	潜水漁	ま き 網					合計
(出漁人数)	4人	4人	5人	6人	7人	10人	
全員が同じ複合世帯	1	3	2				6
1つの複合世帯と村外居住者		1	3	4			8
2つの複合世帯と村外居住者	2				1	1	4
合 計	3	4	5	4	1	1	18

ず、10才未満くらいの子どもたちが集まってきて、10cm程度の小魚をとる。種類で言えば、ムラサメモンガラ *tsontsò* (*Rhinecanthus aculeatus*)、シマハギ *andralame* (*dabandriake* と呼ぶ; *Acanthurus triostegus*) などのカワハギ類や、オヤビッチャ *tsaborokodò* (*mangalakaofa* と呼ぶ; *Abdefduf* sp.)、そしてチリメンアイゴの幼魚などである。子どもたちが大きな魚をとったり、1人だけたくさんの数をとったりするのでなければ、たいていの漁師はこれを見過ごす。このとき集まってくる子どもたちは、たいていは漁をした者の子か甥・姪<sup>(12)</sup>にあたる。父や兄、オジ以外の漁師から子どもたちが魚をとることはほとんどない。

次に浜売りが始まる。この時に魚を買うのは、おかずを求める近隣農村の人たちや、有棘林東方のオアシス地帯 (I-2 (1) 参照) まで行って魚を売る行商人たちである (写真 III-4)。農村の人たちはせいぜい 2~3kg を購入するにすぎないが、行商人は一度に数十 kg も買い付けることがめずらしくない。また、時には、アンパシラヴァの村人も魚を買う。これは、成人男性が遠隔地出漁のために留守をされていて魚が手に入らない場合などである。このような買い手がいれば漁獲の大部分は浜売りで売却されてしまうが、買い手は定期的に訪れるわけではない。また、魚の水揚げが少ない刺突漁の場合や、獲物が少ない場合などにも浜売りはおこなわれない。漁師自身が「魚はいないよ (*Tsy misy fia*)」「(魚を) いくらも殺さなかったよ (*Tsy namono firy*)」と言ったとき、買い手の人びとはおとなしく次のカヌーを待たなければならない。

浜売りで最初に売れるのは、大量に水揚げされることの多いチリメンアイゴやツツパリサギ *ambariake* (*Gerres acinaces*)、そして「白魚 *fiam-poty*」と総称される魚である。白魚に含まれるのは、マトフエフキ *tapaporoha*

(*Lethrinus harak*)、シモフリフエフキ *angelike* (*L. lentjan*)、ハマフエフキ *ambitsy* (*L. nebulosus*) などフエフキダイ類で、味が似通っているためにひ

(12) 実の子も甥も姪も、ヴェズの親族範疇では同じ「子 *anake*」に分類される。



写真 III-4 東方のオアシス地帯へ魚を売りに行く行商人

とまとめに扱われる。浜売りでは、魚は種類にかかわらずキログラム単位で取り引きされる。1994 年暮れから 1998 年初めにかけてこの価格はまったく変動せず、1,000FMG/kg<sup>(13)</sup>であった。ただし、魚はかならずしも秤量するとはかぎらず、目分量にもとづいて金額が支払われることもある。時にはおまけ *kadò* (フランス語の *cadeau* に由来) がつくこともある。

浜売りの前後に、カヌーを海から上げるのを手伝った者に対して無償で魚を分け与えることがある。とくに、筆者や学校教師などの村外出身者や、他の村の親族などに対して、比較的頻繁に分配がなされる。また、まき網漁の大漁時などは、多くの者が駆けつけて当然のように魚を持ち去っていくが、漁師もこれを見過ごす。しかし、漁師の説明によると、このような分配はあくまで漁師自身の好意によるもので、義務づけられているわけではない。浜売りと分配の後、漁師の妻や姉妹がカヌーの中から魚を出す。この魚は、漁師自身の家に持ち込まれるか、魚加工をおこなう漁師のもとへ持ち込まれる。

漁師自身の家では、複合世帯を構成する世帯に対して魚が分配される。調査対象となった複合世帯では、漁に参加しなかった構成世帯に対しても、よほど漁獲が少なくないかぎりほぼ確実に分配がおこなわれていた。この分配は、漁師自身がおこなうこともあれば妻や姉妹がおこなうこともある。同じ日に漁をおこなって十分な取り分をすでに確保した者は、「魚はいらないよ (*Tsy mila fia*) 」と言って分配を辞退する。しかし、魚をもっと食べたいと思えば、2度以上の分配にあずかることもできる。分配された魚はそれぞれの世帯において調理され、他の者に売ったり売却用に加工したりすることは決してない。売却用に魚を加工する者は、たとえ漁をした者の親や子やキョウダイでも、自家消費分以外の魚は現金で購入しなければならない。

複合世帯の内部で消費しきれない魚や美味とされない魚は、魚加工をする漁師のもとへ持ち込まれ (写真 III-5)、背中側を切り開いて塩魚に加工される (写

(13) 通貨単位 FMG については第 II 章注 4 を参照。





写真 III-5 加工のための魚買い付け



写真 III-6 塩魚の加工



真 III-6)。魚加工をする漁師は、ある程度の大きさであればどんな種類の魚でも、またいかに大量でも引き取るが、買い取り価格は浜売りより安い。買い取り価格は、1996年にはほぼ 750FMG/kg で一定していたが、ムルンベでの塩魚の価格に応じて上下するため、1998年初頭には 500FMG/kg まで下がった。筆者の滞在期間を通じて魚加工をおこなっていた世帯は2つあったが、このほかにも、一時的に資金のある漁師が短期間だけ魚加工をおこなうこともある。また、資金が多くないので、ごく近い親族の捕った魚だけを買って加工する場合もある。調査対象となった複合世帯 F1 の男性 2A (図 I-6 参照) も、他の漁師による漁獲を頻繁に買い上げ、塩魚に加工していた。彼は、同じ複合世帯の者から魚を買い上げる場合にも、同じ単価で計算した金額を支払っていた。魚を売却して得た現金は、出漁した者たちの間で均等に分配することが多いようである。

## (2) 魚の加工・調理と流通

自家消費のための魚の調理は、簡単なものが多い。子どもが持ち帰った小さな魚は、単に熾き火で焼く (*atono*) だけで間食にされる。おかずとして魚を調理する際には、内臓を取り出し塩を加えて水煮にする (*ketsehe*) か、少量の油で揚げる (*endaze*)。まれに、タマネギやカレー粉と一緒に軽く揚げたのち、水を加えて煮込むこともある。これはカレー煮 *kary* と呼ばれる。また、テングハギ *fiantisifa* (*Naso unicornis*)、ゴマモンガラ *botsanza* (*Balistoides viridescens*)、モヨウフグ *botàna* (*Arothron* sp.)<sup>(14)</sup>、サメ *akio*

(*Carcharhinidae*) などの肝臓の大きな魚は、*hosy* という方法で調理されることがある。これは、茹でてほぐしておいた魚肉を肝油にからめる調理法である。

数日程度の保存のためには、魚を燻製にする (*asale*)。これは、内臓を取り出した魚を背中から2枚に開き、数尾まとめて串に刺して焚き火の周りに置い

(14) アンバシラヴァ村近辺においてはフグ毒は知られていない。

て燻すというものである。焚き火に近づけすぎず、長時間燻すのがよいとされる。魚体が小さく火が通りやすい場合には、魚は丸ごと串に刺す。燻製は、魚が多すぎて一度に食べきれない場合に用いられる。また、有棘林の東方まで魚を売りに行く行商人も、浜で買った大量の魚を燻製にする。まれに、漁師自身が捕った魚を燻製にし、県庁所在地のムルンベまで運んで売ることがある。しかし、消費分を超える魚は、ただちに、魚加工をする漁師に売却されることが多い。

魚加工をする漁師は、買い取った魚をすべて塩魚に加工する。魚は2枚に開いて塩と一緒に一晩寝かせたのち、昼は天日に乾燥させて夜は塩に漬ける。これを1週間繰り返す。1996年には、750FMG/kgの鮮魚が塩魚に加工されたのちムルンベに運ばれ、3,000FMG/kgで売られていた。また、魚の値段が暴落した1998年には、鮮魚が500FMG/kg、加工された塩魚が1,500FMG/kgであった。鮮魚の内臓を出して塩魚にすると約60%の重量になることから、魚加工をする漁師の利潤率は8~14割と計算できる<sup>(15)</sup>。村で加工された塩魚は、フィアナランツア州出身者やインド系商人 *karany* など別の仲買人がムルンベで買い付ける。塩魚の大部分は、ここから陸路で280km離れた州都トゥリアラ市 (Toliara; 図I-1参照)、そこからさらに540km離れたフィアナランツア州の州都フィアナランツア市 (Fianarantsoa) に運ばれる。1998年のフィアナランツア市における塩魚の価格は、魚の種類にもよるがほぼ5,000FMG/kgだった。塩魚はここからフィアナランツア州の他の町や村、さらには首都アンタナナリヴ市 (Antananarivo) に運ばれて消費される。

このほか、とくにチリメンアイゴなどの魚は干物にされる (*vendrane*) こともある。背中から3枚に開いてさらに切れ目を入れ、天日で乾燥させるのである。干物の保存期間は塩魚より短いが燻製より長いので、長期の航海中のおかずや、他の村に住む知人へのおみやげとして利用される。干物が売買されるこ

(15)  $3,000 \div (750/0.6) - 1 = 1.4$ ;  $1,500 \div (500/0.6) - 1 = 0.8$

とはほとんどないが、かつては遠方の農業地帯で農作物と物々交換されていたという<sup>(16)</sup>。

### (3) 特殊な海産物の加工と流通

ミナミキビナゴは、小さいが商品としては重要な魚種で、砂浜で天日乾燥するだけで商品として出荷することができる。ムルンベのインド系商店まで持って行って売ることもあるが、大漁の時には仲買人がわざわざ村まで買い付けに来る。1998年初頭には、乾燥ミナミキビナゴの価格は3,780FMG/kgであった。鮮魚は、乾燥すると重量が20%に減少するので、約750FMG/kgの価値がある。乾燥魚はムルンベからムルンダヴァ市（Morondava）へ運ばれ、近年始まった牧畜プロジェクトが牛の飼料に混ぜて使うという。

タコは、一般の魚と同様に加工をおこなう漁師に売却される。買い取り価格は1,000FMG/kg前後であるが、安いときには500FMG/kg（1998年初め）、高いときには1,700FMG/kg（1996年8月）と変動が激しい。低価格の時には、タコはほとんど売却されず自家消費される。売却されたタコは内臓を出して干物にし、ムルンベでインド系商人などの別の仲買人に売られる。タコはさらに陸路で運ばれ、トゥリアラ市近辺の市場で売られる。州境を超えることはまずなく、ほとんどがトゥリアラ市近辺で消費されるようである。

ナマコも、加工をおこなう漁師に売却される。内蔵を出したのち煮沸して天日乾燥し、ムルンベで別の仲買人に売られる。ここからさらに、州都トゥリアラ、首都アンタナナリヴへと売り渡され、最後には外港トゥアマシナ港（Toamasina）からシンガポール・香港などへ輸出される。中国文化圏では、ナマコが中華料理の食材として珍重されている。

イセエビは、保存のために冷凍する必要があるため、村の漁師には売却されない。イセエビの売却先は、アンパシラヴァ村から5kmほど北のアンダヴァド

---

<sup>(16)</sup> ただし、このような仲買人の情報について、真偽の確認は十分でない。

ウアカ村 (Andavadoaka) の、バンガローを経営するインド系商人である。ここでのイセエビ買い取り価格は 30,000FMG/kg 前後で、購入されたイセエビはバンガローの冷凍庫にいったん保管されたのち、ムルンベへ運ばれる。ムルンベから首都アンタナナリヴへは空輸され、フランス料理店や中華料理店などに買い取られる。

以上のように、村で捕れた海産物のほとんどはムルンベを経由して村外へ出荷される。ムルンベは、付近の漁村からあらゆる海産物が集中する市場であるといつてよい。ウニのみは例外で、ムルンベには運ばれず村内で消費される。ウニは、殻を割って取り出した卵巣を数十個分をまとめて円盤状に焼き、適当な大きさに切って売られる。主として空腹を抱えた漁師たちがウニの卵焼きをスナックとして食べるが、村における需要はそれほど多くない。礁池には捕りきれないほどのウニが散在しており、主として老人たちがそれを集めている。

### III-6 家計経済と漁撈活動：漁獲に関する事例分析

#### (1) 全体的な労働投入量

漁獲調査 (調査項目③) の対象である 2 つの複合世帯が出漁した頻度を表 III-7 に示す。第一にわかるのは、女性が磯漁りを中心におこない、時おり男性の追込刺網漁を補佐するという、III-4 (2) で指摘した傾向がここでもみられることである。第二に、F2 の男性が中心となった漁についてみると、調査時期によって漁法が顕著に異なっている。すなわち、乾季に多かった釣りや潜水漁が雨季にはほとんどおこなわれず、刺網漁が多くおこなわれるようになっている。このような違いは、実は季節的要因によるのではなく、乾季の調査が終わった後に F2 の男性が漁網を購入し、雨季の調査時には網漁を集中的におこなっていたことによる。

労働投入に関するさらに詳細な傾向は、表 III-8 から読みとった方がよい。先の表のように出漁頻度を指標にすると、多人数でおこなう漁法と 1 人でできる

表 III-7 各操業単位による漁撈活動の頻度

操 業 単 位		F 1		F 2	
調 査 時 期		乾季	雨季	乾季	雨季
調 査 日 数		7 日間	14 日間	7 日間	14 日間
男性の漁	追込刺網漁	5 (1)*	8 (1)*		10 (2)*
	置き刺網漁 (浅瀬)	-			5
	まき網漁**	-	5		
	釣漁			6	
	潜水漁			5	1
	(小計)	5 (1)*	13 (1)*	11	16 (2)*
女性の漁	磯漁り	5	1	2	3

\* : ( ) 内は、女性が参加した回数。

\*\* : まき網漁をおこなっている間に置き刺網漁を仕掛けて魚がかかるのを待つ場合があったが、これらはまき網漁の一環として扱った。

表 III-8 各操業単位が漁撈に投入した労働量 (14 日間、単位 : 人・時間)

		F 1		F 2	
		乾季*	雨季	乾季*	雨季
男 性	追込刺網漁	75	30.32		62.47
	置き刺網漁				13.57
	まき網漁	-	45.97		
	釣漁	-		46.8	
	潜水漁			44	2.47
	(小計)	75	76.28	90.8	73.52
女 性	追込刺網漁	7.43	2		4.98
	磯漁り	28.6	3	11.4	5.42
	(小計)	36.03	5	11.4	10.4
操業単位以外の者**	追込刺網漁	8.13	8.35		-
	まき網漁		5.18		-
	(小計)	8.13	13.53	0	0
( 合 計 )		119.23	94.82	102.2	83.92

\* : 乾季の調査期間は 7 日間だったので、すべての値を 2 倍して 14 日間分に統一した。

\*\* : F1 の者にとって姻族にあたり、1 例を除いて他村在住者。詳細は本文を参照。

漁法を同じ1回として数えてしまい、実際の労働量を反映しないからである。

また、先の表では乾季の調査日数と雨季の調査日数が異なっていたため、表 III-8 では14日分の労働投入量に換算した。

この表からまずわかるのは、F1のおこなう漁において、複合世帯以外の者が参加していることである。乾季には、他村へ嫁いだ F1-2f (図 I-6 参照) の夫が追い込み刺網漁に1回参加し、雨季には、F1-2f の夫が追い込み刺網漁に1回とまき網漁に2回、他村へ嫁いだ F1-2g の夫が追い込み刺網漁に1回、他村へ嫁いだ F1-2h の夫の弟(他村在住)が追い込み刺網漁に1回、アンパシラヴァ村に住む F1-2j の婚約者がまき網漁に1回、それぞれ参加している。つまり、複合世帯の外から労働力を得た漁は7回あったが、うち6回における「協力者」はふだん他村に在住している。彼らは、特別な事情があつて F1 の家族を訪問したわけではなく、F1 の労働力不足を補う目的で漁に参加したわけでもない。ヴェズ男性が妻の親族を訪ねるときによくおこなうように、数日間滞在して妻の兄弟たちと出漁したのである。F1-2j の婚約者の場合はこれと異なるが、1995 年から 1996 年にかけての筆者の滞在中には、彼も F1 の者と出漁することはまずなかった。また、彼が参加したのはまき網漁そのものではなく、まき網漁をおこなう間に魚がかかるよう置き刺網を設置しただけであり(表 III-7 の脚注を参照)、労働時間も短く漁獲を分配されてもいない。つまり、F1 は F2 より頻繁に複合世帯の外から労働力を得ていたものの、長期間にわたる漁撈の主力として期待できるものではなかったといえる。

次に、複合世帯内部の男性と女性を比べてみると、男性の方が多くの労働を漁撈にさいてていることがわかる。また、F1 の女性の労働投入量が調査時期によって大きく異なり、雨季には乾季の7分の1にすぎないことが目立つ。雨季には男性が遠隔地出漁から帰ってくるため女性の出漁頻度が低下すると述べたが(III-4 (3) 参照)、F1 女性の場合には別の説明が必要である。というのも、乾季に F1 を調査したとき、夫たちはまだ遠隔地に出漁していなかったからである。また、F2 女性が乾季と雨季に同じくらいの頻度で出漁していることについ

ても、検討を要する。F1の女性自身によると、雨季にあまり漁に出なかったのは、タコの価格が安く通常の半値にすぎなかったためだという(III-5(3)参照)。もしそうだとすれば、F1女性は現金獲得を主目的に磯漁りをおこなうのに対しF2女性はおかず獲得をも目的としていたため<sup>(17)</sup>、タコ価格の下落した雨季に異なる対処をしたということになる。しかし、乾季におけるF2女性の出漁回数は2回と少なかったため、この解釈の妥当性を統計的に確かめることはできなかった。

女性の漁に関しては、活動の季節差を生む直接の要因を特定するよりも、次のような一般的傾向を指摘することの方が重要であろう。それは、女性は漁撈以上に家事に多くの時間を割かなければならないため<sup>(18)</sup>、男性ほど熱心に漁撈をおこなわないということである。このため、家事の事情やタコ価格などのほか、きわめて些細と思われる理由によって漁撈に費やす時間が左右される。たとえば、漁に出ない女性に対してその理由を尋ねてみると、「乗り気がしない(Tsy mahefa)から」というあまり明確でない回答がしばしばある。このようなことは男性の場合ほとんどなく、具体的な用事や不調な体の部位が常に言及される。また、F2の女性の出漁日数が全体的に少ないことや、III-4(2)で述べたように一般的に女性の出漁日数が少ないことも、女性があまり漁に熱心でないことから説明できよう。

女性に比べれば、男性は漁撈に投入する労働量が多く、また全体的な労働投入量が気まぐれに変化することはない。F2では男性の労働量が雨季にやや少な

---

<sup>(17)</sup> 乾季の調査期には、F1女性は4,510FMG相当の漁獲高のうち4,360FMG(96.7%)を売却したのに対し、F2女性は漁獲高550FMGのうち400FMG(72.7%)を売却しており、売却した海産物の割合はF1の方が高い。

<sup>(18)</sup> 女性がおこなうよう期待されている家事とは、調理のほか、水汲みや薪拾い、洗濯などである。1996年の雨季におこなったタイムアロケーション調査(第II章参照)の結果では、日帰りの漁撈に出ている割合は男性が8.7%であったのに対し女性は1.3%と少なく、逆に薪拾いや水汲みや洗濯などの用事で村を出ていた割合は男性が3.5%だったのに対し女性は9.9%と多かった。なかでも洗濯は、男性がおこなうのは恥ずかしい(mahamenatse)行為とされている。

くなっているものの、全体からみれば 1 割程度の誤差であり、相対的に大きい違いではないといえる。

## (2) 複合世帯内部での労働分担

表 III-9 は、漁撈の主力と見なせる男性について、個人別の出漁状況を示したものである。まず F2 について見てみると、雨季と乾季で出漁時間が大きく異なったのは F2-2D のみである。F2-2D の出漁時間が雨季に短かったのは、妻が病気になって 5km ほど離れた村に里帰りしたため、その様子を時おり見に行っていたことによる。F2 の男性には、表中の 3 人以外に F2-2B がいる。彼は、胸を患っていたために年間を通じてほとんど出漁していなかった<sup>(19)</sup>。F2-2C と F2-3D が 14 日間に漁した時間は、乾季にも雨季にもそれぞれ 30 時間前後とほぼ同じであった。F2 において各成人男性が出漁する時間は、とくに理由がないかぎり、1 日平均 2 時間程度であるといえよう。

いっぽう F1 では、2 つの調査時期において全体の労働投入量がほとんど同じであるにもかかわらず、主要な出漁者が時期によりまったく異なる。乾季に頻繁に出漁していたのは F1-2C と F1-3A の 2 人で、その出漁時間は F2 の男性とほぼ等しく、1 日平均 2 時間ほどだった。ところが雨季には、同じ頻度で出漁していたのは F1-3A のみである。F1-2C は、「何者かに呪薬 *aoly* を盛られたため」<sup>(20)</sup>体調を崩しており、ほとんど出漁していなかった。彼に代わって雨季に出漁していたのは、高齢のためふだんはほとんど出漁しない F1-1A、ふだんは浜辺でカヌー製作に従事することの多い F1-2E、乾季の調査時には頻繁にムルンベの町へ買い出しに行ったため出漁回数が少なかった F1-2I の 3 人だった。ただし、彼ら 3 人が出漁したのは、F1-2C の病気により労働力不足が生じたと

<sup>(19)</sup> ただし、1996 年の乾季には遠隔地で潜水ナマコ漁に従事していた。第 IV 章参照。

<sup>(20)</sup> このような理由づけは、先に述べた「乗り気がしないから」という理由づけとは異なり、呪医 *ombiasa* や憑依霊（第 II 章注 13 参照）による診断を根拠としている。ヴェズの人々にとって、自分に妬みを持つ者が呪薬を施すという過程は、体調を崩すことの明確な「原因」といえる。



表 III-9 各操業単位の成人男性による出漁（14 日間）

操業単位	出漁者	乾 季*		雨 季	
		出漁回数	出漁時間	出漁回数	出漁時間
F1	F1-1A	0	0:00	5	10:48
	2C	8	33:22	2	4:55
	2E	2	8:52	8	16:49
	2I	0	0:00	5	14:46
	3A	8	32:46	9	28:59
	(合計)	18	75:00	29	76:17
F2	F2-2C	8	29:26	8	24:55
	2D	8	30:54	6	18:09
	3B	8	30:28	10	30:27
	(合計)	24	90:48	24	73:31

\*：乾季の調査期間は7日間だったので、すべての値を2倍して14日間分に統一した。

いう理由のためだけではない。ミナミキビナゴの魚群が回遊し、ふだん出漁頻度が少ない者もまき網漁に駆り出されたため、F1-2Cの病気による労働量減少分を結果的に補ったと考えるべきである。

F1の男性にはこのほか、乾季にも雨季にも出漁しなかったF1-2Bがいる。彼は、ふだんは塩魚やタコの買い付けと加工をおこない、カヌー製作にも従事することが多いため、F1の中では出漁頻度が少ない。まき網漁の時には彼もこれらの仕事を中止して漁に参加することが多いのだが、雨季の調査時期には妻の村を訪問していたため漁に参加していなかった。このように、漁撈でなくカヌー製作や魚加工など他の仕事を主におこなう者がおり、必要に応じて漁師に転じる点で、F1はF2と大きく異なる。このような違いの背景として、F1の成人男性数が多いことを指摘できる。F1では、おかず獲得のための漁撈と現金獲得のための魚加工やカヌー製作をそれぞれ別の男性が受け持ち、まき網漁のように大がかりな漁のときだけ全員が一緒に漁をおこなう。これに対してF2では、漁撈をおこなわず他の仕事に従事するような労働力の余裕がF1に比べて少ないといえる。

しかし、F2の男性が漁撈以外の仕事をまったくおこなわないわけではない。たとえばF2-3Bは、筆者の滞在中、タコの内臓の買い付けを試みたことがある。アンパシラヴァ村の沖のヌサオ島にはタコが多いため、近隣の村人が泊まりがけで磯漁りをおこない、タコを干物にする過程で大量の内臓を廃棄する。F2-3Bは、これを安く買い取って、釣り漁師の多い別の村で釣り餌として売ろうとしたのである。この試みは長続きせず失敗に終わったが、第II章で述べた塩採集のように、季節的だが毎年おこなわれるような活動もある。これらの活動に複合世帯内の男性が従事するあいだ、他の男性が出漁し、短期的に分業がおこなわれることがある。時に応じて分業したりしなかったりするという意味ではF1も同じであり、ヴェズ社会では複数の世帯の男性たちが「ゆるやかな分業」をおこなっているといえよう。

### (3) 漁法ごとの漁獲効率の比較

図 III-8 は、調査期間中に 2 つの複合世帯が 5 日以上おこなっていた漁法に注目し、それぞれの漁獲効率を示したものである。漁法ごとの労働投入量をのべ労働時間であらわし、漁獲量は金額に換算した。同じ複合世帯に属する者が塩魚加工のために魚を買い上げた場合、加工後に売却したときの価格（1996 年乾季は 1,800FMG/kg、1998 年雨季には 900FMG/kg）で換算し、自家消費した魚は浜売りの価格で換算した。なお、漁獲効率を算出するにあたり、置き刺網漁の労働投入量の一部は推定によった。夜間における網の設置を筆者が観察できなかったためである。そこで、網の設置に要する時間を他の機会に測定し、ほぼ 20 分であると推定した。

この図から、沖合の置き刺網漁の漁獲効率が高いことがわかる。とくに 2 回の漁の値が高く、平均値を引き上げている。このとき、普段あまり水揚げされないフウライボラ *antendro*（小さいものは *torovoke* という; *Crenimugil crenilabis*）の大群が来遊し、漁獲高が特別に多かった。とくに、14.3kg の大漁だった日には、漁獲の 8 割（11.5kg）がフウライボラであった。このように大漁をもたらすようなフウライボラの回遊は、1 年に何回もあることではない。その機会に運よく遭遇しないかぎり、置き刺網による漁獲効率も他の漁法とほとんど同じレベルと考えてよい。じっさい、アンパシラヴァ村民も、この漁法の漁獲効率がとくによいとは考えていない。

また、置き刺網漁による漁獲効率は、統計学的に考えても分散が大きすぎるため、他の漁法と比べても漁獲効率の有意差は出ない。むしろ注目すべきなのは、女性による磯漁りである。磯漁りにおいては、次の漁法にくらべて漁獲効率が有意に低かった。①追込刺網漁（F1、乾季）（*t*-test.  $t=2.84, p<0.05$ ）、②追込刺網漁（F1、雨季）（ $t=3.69, p<0.005$ ）、③追込刺網漁（F2、雨季）（ $t=3.37, p<0.01$ ）、④潜水漁（ $t=2.82, p<0.05$ ）<sup>(21)</sup>。また、Kruskal-Wallis の検定をおこ

<sup>(21)</sup> ただし、各漁法の漁獲効率の分散を等しいと認めたか否かによって *t* 値の算出法は異なる。等分散性を 5%水準で検定したところ、②と③では分散が等しく、①と④では分散が等しくないと考えられた。

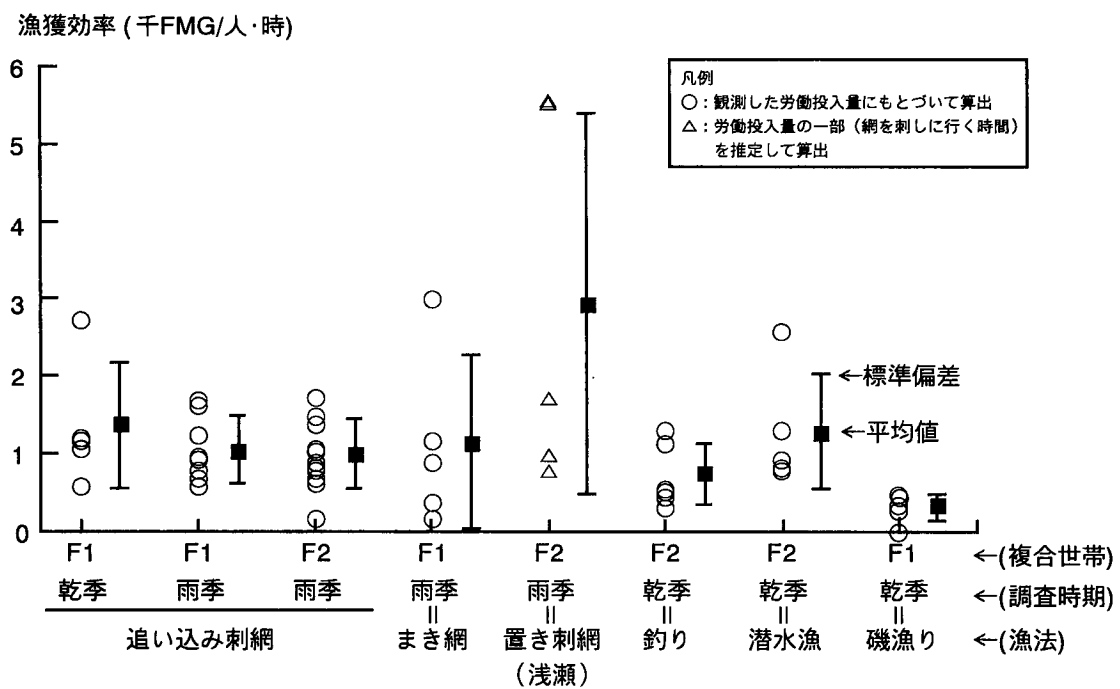


図 III-8 漁法ごとの漁獲効率の比較

なったところ、すべての漁法を対象としたときには漁法ごとに漁獲効率の差があると結論できた ( $\chi^2=16.15$ ,  $p<0.05$ ) が、磯漁りに関するデータを除外した場合には漁獲効率の差はないと結論できた ( $\chi^2=6.67$ )。これらから、磯漁りは他の漁法と比べて漁獲効率が有意に低いと結論できる。

磯漁り以外の漁法では、ほとんどの場合 (45 回中 40 回)、1 人 1 時間あたりの漁獲効率が 2,000FMG 未満である。この村では、いずれの漁法でも、1,000FMG/人・時間から 2,000FMG/人・時間が標準的な漁獲効率だといえよう。この金額は、もっとも安価な主食である乾燥トウモロコシに換算すると約 2kg で、成人男性が 1~3 日で消費する量に相当する。また、やや高級な主食である米に換算すると約 1kg で、成人男性が 1~2 日で消費する量である。

#### (4) 換金専門型の漁法と融通型の漁法

図 III-9 は、漁獲全体のうち売却されたものの割合を漁法別に示したものである。いずれの漁法においても、売却した漁獲の割合は日によって変動しているが、とくに目立つのは、磯漁りと潜水漁による漁獲を比較的多く売却していることである。これは漁獲対象の偏りに由来する。表 III-10 を見ると、磯漁りや潜水漁においては魚以外の海産物が多く水揚げされている。前節で述べたとおり、魚類以外の海産物は、タコの市価が低い場合などを除き、ほとんど自家消費されることがない。つまり、磯漁りや潜水漁は、商品価値の高い魚以外の海産物を目的におこなわれているのである。

次に、魚の水揚げが多い他の漁法についてみると、漁獲のすべてを自家消費したというケースは、追い込み刺網漁 23 例のうち 14 例、置き刺網漁 5 例のうち 3 例、釣り 6 例のうち 4 例で、いずれも過半数を占める。これらの漁法は自家消費用の魚を捕るためにおこなうのであり、浜に買い手が来た場合や消費分を超える余剰の漁獲があるときだけ魚が売却される。乾季の追い込み刺網漁で売却率が高いのは、農閑期を利用して近隣の農村から魚の買い付けにアンパシラヴァ村までやってくる人が多かったためである。

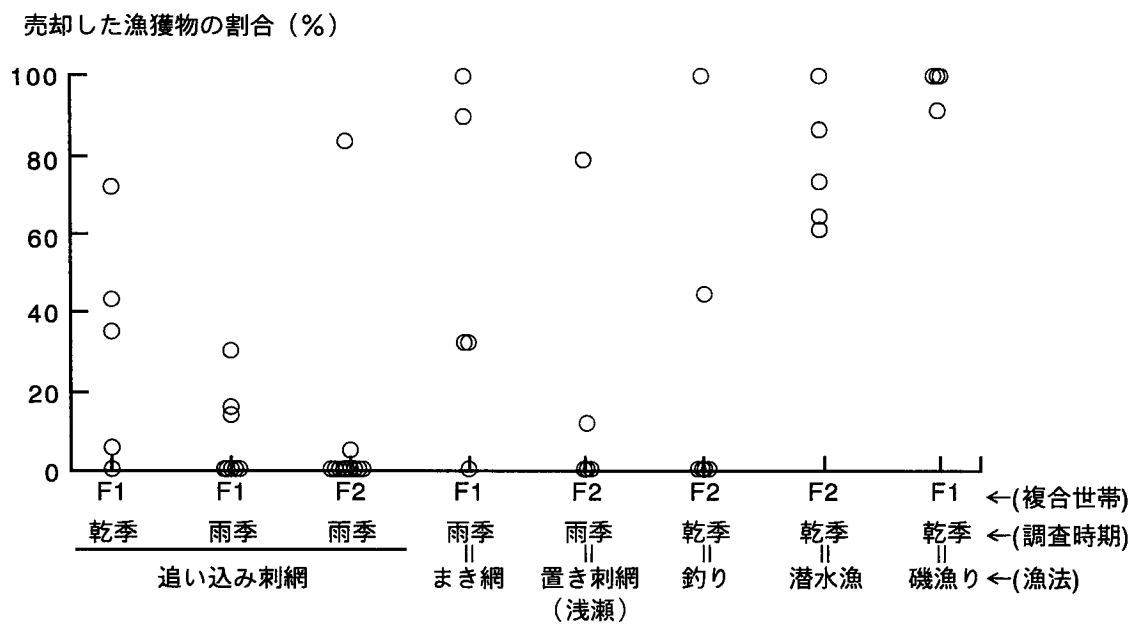


図 III-9 漁法ごとの漁獲物売却率の比較

表 III-10 各漁法により漁獲された水族

学名	方名	和名	追込刺網			まき網		電刺網	釣り	潜水漁	磯漁	←漁法
			F1	F1	F2	F1	F2	F2	F2	F2	F1	←作業単位
			乾季	雨季	雨季	雨季	雨季	乾季	乾季	乾季	乾季	←時期
5	8	11	5	5	6	5	5				5	←事例数
<b>Family Clupeidae (ニシン目ニシン科)</b>												
<i>Spratelloides delicatulus</i>	varilava	ミナミキビナゴ				●●●						
<b>Family Elopidae (カライワシ目カライワシ科)</b>												
<i>Elops machanata</i>	klosa	〔カライワシ属〕					+					
<b>Family Holocentridae (キンメダイ目イトウダイ科)</b>												
<i>Myripristis</i> sp.	fiamena	〔アカマツカサ属〕	+					+		+		
<b>Family Mugilidae (スズキ目ボラ目ボラ科)</b>												
<i>Crenimugil crenilabis</i>	antendro	フウライボラ			+		●					
<b>Family Sphyrnidae (スズキ目ボラ目カマス科)</b>												
<i>Sphyrna</i> sp.	mandriandovoke	〔カマス属〕						+				
<b>Family Serranidae (スズキ目スズキ目ハタ科)</b>												
<i>Epinephelus</i> spp.	lovo	〔ハタ属〕		+	+					+		
<i>Epinephelus</i> sp.	taratake	〔ハタ属〕								+		
<b>Family Carangidae (スズキ目スズキ目アジ科)</b>												
<i>Scomberoides</i> sp.	kinirike	〔イケカツオ属〕		+	+			+	+			
<i>Trachinotus</i> sp.	talantala	〔コバンアジ属〕			+							
<i>Carangoides</i> sp.	lanora	〔ヨロイアジ属〕			+			+				
<b>Family Gerreidae (スズキ目スズキ目クロサギ科)</b>												
<i>Gerres acinaces</i>	ambariake	ツパリサギ	+	●	●	+	+					
<b>Family Sclaenidae (スズキ目スズキ目ニベ科)</b>												
<i>Polynemus</i> sp.	bobokoro	〔ツバメコノシロ属〕			+			+				
<b>Family Mullidae (スズキ目スズキ目ヒメジ科)</b>												
<i>Upeneus</i> spp.	tso'y	〔ヒメジ属〕	+	+	+			+				
<i>Parupeneus</i> spp.	fiantsooke	〔ウミヒゴイ属〕	+	+	+	+	+	+	+			
<b>Family Monodactylidae (スズキ目スズキ目ヒメツバメウオ科)</b>												
<i>Monodactylus argenteus</i>	dangiry	ヒメツバメウオ		+	+			+				
<b>Family Lutjanidae (スズキ目スズキ目フエダイ科)</b>												
<i>Lutjanus fulviflamma</i>	amporama	ニセクロボシフエダイ		+	+	+	+	+	+			
<i>Lutjanus</i> sp.	soronale	〔フエダイ属〕						+				
<b>Family Hamulidae (スズキ目スズキ目イサキ科)</b>												
<i>Plectorhinchus flavomaculatus</i>	fianraty	オシアレコショウダイ	+			+				+		
<i>Plectorhinchus gaterinus</i>	angarera	〔コショウダイ属〕			+			+				
<b>Family Teraponidae (スズキ目スズキ目シマイサキ科)</b>												
<i>Terapon jarbua</i>	ihy	コトヒキ			+			+				
<b>Family Nemipteridae (スズキ目スズキ目イトヨリダイ科)</b>												
<i>Scolopsis lineatus</i>	tsabeabato	ヨコシマタマガシラ			+	+						
<b>Family Sparidae (スズキ目スズキ目タイ科)</b>												
<i>Acanthopagrus berda</i>	vahoho	ナンヨウチヌ	+									
<b>Family Lethrinidae (スズキ目スズキ目フエダイ科)</b>												
<i>Lethrinus harak</i>	tapaporoha	マトフエフキ	+	+	+	+	+					
<i>Lethrinus lentjan</i>	angelike	シモフリフエフキ	+	+	+	+						
<i>Lethrinus nebulosus</i>	ambitsy	ハマフエフキ	+	+	+							
<i>Lethrinus atkinsoni</i>	tsabeake	イソフエフキ	+	+	+	+	+	+	+			
<i>Lethrinus</i> sp.	antsisy	〔フエフキ属〕	*	+	+			+				
<b>Family Chaetodontidae (スズキ目スズキ目チョウチョウウオ科)</b>												
<i>Chaetodon</i> spp.	fianakoho	〔チョウチョウウオ属〕				+						
<b>Family Pomacanthidae (スズキ目スズキ目キンチャクダイ科)</b>												
<i>Pomacanthus semicirculatus</i>	lafidaka	サザナミヤッコ	+									
<b>Family Pomacentridae (スズキ目スズキ目スズメダイ科)</b>												
<i>Abudefduf</i> sp.	tsaborokodo / mangalakaofa	〔オヤビッチャ属〕		+	+	+			+			
<b>Family Labridae (スズキ目スズキ目ベラ科)</b>												
<i>Halichoeres</i> spp.	leme	〔キューセン属〕		+	+	+						
<i>Cheilodactylus</i>	antsorab'y	カマスベラ			+							
<b>Family Scaridae (スズキ目スズキ目ブダイ科)</b>												
<i>Scarus</i> spp.	tabake	ブダイ類	+		+	+			+	*		
<b>Family Acanthuridae (スズキ目ニザダイ目ニザダイ科)</b>												
<i>Naso unicornis</i>	fiantlifa	テングハギ	+		+				+	+		
<i>Acanthurus triostegus</i>	andralame / dabandriake	シマハギ	+	+	+			+	+	+		
<i>Acanthurus dussumieri</i>	menasofy	〔クロハギ属〕		+						+		
<i>Acanthurus</i> spp.	angy	〔クロハギ属〕	+	+	+	+						
<b>Family Siganidae (スズキ目ニザダイ目アイゴ科)</b>												
<i>Siganus sutor</i>	amboramasake	チリメンアイゴ	●	●	*	+	+	●●●			+	
<b>Family Platycephalidae (カサゴ目コチ科)</b>												
<i>Papilloculiceps longiceps</i>	toho	(属和名・種和名不明)						+		+		
<b>Family Ballistidae (フグ目モンガラカワハギ科)</b>												
<i>Rhinecanthus aculeatus</i>	tsonts'o	ムラサメモンガラ	+	+	+	+	+			+		
<b>Family Tetradontidae (フグ目フグ科)</b>												
<i>Arothron</i> sp.	botana	〔モヨウフグ属〕				+				+		
未同定種	angea				+							
未同定種	besisike							+				
<b>Phylum Echinodermata (棘皮動物門)</b>												
<i>Holothuria nobilis</i>	benono	イシナマコ	+		+							
未同定種	zangambato											
<i>Stichopus variegatus</i>	rorohankena	ヨコスジナマコ								+	+	
未同定種	fofittsetsake											
未同定種	somalipapa									+		
未同定種	nitse										+	
未同定種	styl'o										+	
<b>Phylum Mollusca (軟体動物門)</b>												
未同定	angisy	〔イカ〕	+									
<i>Octopus</i> sp.	horita	〔マダコ属〕		+		+				●	●●●	
<i>Pleuroploca trapezium</i>	bozike	イトマキボラ		+							+	
<i>Chicoreus ramosus</i>	dronka	テングガイ									+	
<b>Phylum Crustacea (甲殻動物門)</b>												
<i>Panulirus</i> spp.	tsitsike	〔イセエビ属〕								+		

●●●: 重量比75%以上の水族    ●●: 50%~75%    ●: 25%~50%    \*: 10%~25%    +: 10%未満

ただし、まき網については、買い付けの少ない雨季であったにもかかわらず、売却した漁獲の割合が高かった。まき網漁で漁獲の大部分を占めるミナミキビナゴ（表 III-10 参照）はサイズが小さく、ヴェズの人々に好まれないが、前節で述べたように仲買人が買い求めるため積極的に漁獲の対象とされる。この魚は高価ではないが、魚群が見つかりさえすれば大漁になるので、漁師たちは効率のよい換金用海産物としてミナミキビナゴを捕りに出るのである。なお、この調査期間中はミナミキビナゴしか捕れなかったが、カマスやメアジの類もまき網で多く捕獲される。これらの魚類はいずれも、ミナミキビナゴ同様に大群をなすので、もっぱら換金目的で捕獲される。

以上のように、消費と流通の視点から漁撈活動を見た場合、2つのタイプの漁法がある。第一は、魚以外の高価な海産物や、大群をなす魚種を一網打尽に捕獲する漁法である。漁獲の大半は換金されるので、これを換金専門型の漁法と呼ぶことにする。第二のタイプは、多様な魚類を比較的まんべんなく捕獲するというものである。その漁獲は、高い値をつける買い手がいるときや余剰があるときにだけ販売され、そうでなければ自家消費される。これを融通型の漁法と呼ぶことにする。融通型の漁法が家計に果たす役割は、換金専門型にくらべると多義的といえる。

## (5) 漁獲高

表 III-11 は、2つの複合世帯における調査期間中の漁獲高を示したものである。女性の漁獲量は調査時期や複合世帯によりまちまちである。これに対し男性は、いずれの複合世帯の労働投入量も調査時期によってあまり異ならず（表 III-8）、漁獲効率も漁法によって差がない（図 III-8）ことから推測できるように、いずれの調査時期にも漁獲高がほぼ同程度である。ここでは2つの点に注意したい。第一は、自家消費する漁獲と売却する漁獲の割合が一定とはいえないことである。このことは、漁撈が副食自給と現金獲得の2つの役割を担っており、両者の比重の置き方が状況に応じて変わりうることを示す。



表 III-11 調査期間中の漁獲量と主食購入費の比較（14 日間、単位：FMG）

	F 1		F 2	
	乾季*	雨季	乾季*	雨季
漁獲量（男性）	124,140	99,043	91,680	91,335
うち、自家消費分	65,700	50,420	36,600	70,785
うち、売却分	58,440	48,623	55,080	20,550
漁獲量（女性）	9,020	450	1,100	2,550
うち、自家消費分	300	0	300	750
うち、売却分	8,720	450	800	1,800
主食購入費（推定）	231,300	169,310	187,060	147,200
最低限主食購入費**	108,889	108,889	126,583	126,583

\*：乾季の調査期間は 7 日間だったので、すべての値を 2 倍して 14 日間分に統一した。

\*\*：構成員全員が必要な熱量をすべてトウモロコシ（もっとも安価な主食、700FMG/kg、3,600Cal/kg）でまかなったと考えたときの主食購入費。成年男子は 2,500Cal/日、成年女子はその 80%、6 歳から 14 歳までの子供は 70%、6 歳未満の子供は 40%を消費すると計算した。

第二は、それぞれの複合世帯が主食購入にあてた金額が漁獲高にくらべて明らかに多いことである。表の下部に主食購入費を2つの推定値であらわした。第一は実質的な主食購入費で、複合世帯を構成する世帯がこの間に何をどれだけ調理したかを聞き込んだ結果から計算したものである。第二は最低限必要な主食購入費というべきもので、もっとも安価な主食であるトウモロコシから必要な熱量をすべて摂取した<sup>(22)</sup>と仮定して計算したものである。この2つのいずれと比べてみても、それぞれの複合世帯が得た漁獲量は少ない。しかも、実際に換金したのは漁獲の一部であるから、この期間だけについてみれば、家計の赤字がきわめて大きいことは明らかである。

### III-7 考察：アンパシラヴァ村における漁撈活動と家計経済の特質

#### (1) 漁場環境と漁撈活動

アンパシラヴァ村でおこなわれていた漁撈活動の特徴としてまず目につくのは、サンゴ礁内部でおこなう漁法が多いことである(III-3)。漁場の特徴は、漁撈に関する他のいくつかの特徴とも密接に関わり合っている。

第一に、サンゴ礁の内部は潮汐の影響が強いので、潮汐差を利用した漁法が盛んである(III-4(1))。第二に、サンゴ礁の内部は生物相が多様であるため、そこでは多様な種類の魚を少しずつ捕獲する漁法が多くなる(III-6(4); cf. 西島, 1988)。まき網漁は特定の魚類を大量に捕獲する数少ない漁法の1つであるが、魚群の発見が必要であるため、頻繁におこなわれる漁法ではない。潜水漁や磯漁りなども特定の水族のみを対象とする漁法であるが、後で述べるような特定の社会経済的条件下でのみおこなわれる。第三に、漁獲のほとんどはサンゴ礁に定着する水族であるため、漁法の季節性が少なく(III-4(3))、漁獲効率も年間を通じて大きな変化がない(III-6(3))。この点は、季節的に回遊するニシン

---

<sup>(22)</sup> 乾燥したトウモロコシ 100g 中に含まれる熱量は、白品種と薄白品種では 357Cal、黄品種では 364Cal とされている(NP/NCCD and FAO, 1968)。

やサケなど、大魚群を対象とする寒帯・温帯域の漁撈活動と大きく異なる (cf. テスタール, 1995)。

第四の特徴も、サンゴ礁という漁場条件により規定されている。それは、漁具が小型であり大規模な資本や労働力を必要としないことである (III-3)。サンゴ礁水域は純生物生産が高い環境であるため (諸喜田, 1988)、漁船や漁具が小型でも多様な魚種を対象にすればある程度の漁獲をあげることができる。しかも、サンゴ礁内部は浅いうえに障害物となる礁が多いため、大きな漁船や漁網ではかえって操業しにくい。アンバシラヴァ村で漁撈用に用いられる小型カヌーの値段は数万 FMG である。漁具も比較的安価で、長さ 100m の刺網は 10 万 FMG 程度である。これらの生産手段は、漁獲効率がせいぜい 1,000~2,000FMG/人・時間にすぎなくとも、毎日漁をするための投資としては決して高くない。このため、先進諸国や東南アジア地域によくあるように、金融機関や仲買人に資金を前借りして漁船や漁具を購入することは一切おこなわれていない。また、小型の漁船や漁具を用いる結果、操業に必要な人数は少なく、ほとんどの場合は近縁の者たちの中から漁のパートナーを選んでいる (III-4 (4))。まき網漁は例外的に大人数でおこなわれるが、それでも 10 人そこそこであり、しかも一時的な協業である。大規模な漁撈集団や網元-網子関係など、他地域の漁村にみられるような漁撈組織は発達していない。以上のように、アンバシラヴァ村の漁撈は、サンゴ礁という漁場の特徴をさまざまなかたちで反映している<sup>(23)</sup>。

## (2) 家計に対する漁撈の寄与：現金獲得とおかず供給

漁獲物の多くが販売されているという現状においては、漁撈活動は市場を介して村の外からも影響を受けている。アンバシラヴァ村では、換金専門型の漁法と融通型の漁法を両立させつつ市場経済に対応していた (III-6 (4))。換金専

<sup>(23)</sup> ただし、サンゴ礁水域であれば必ずアンバシラヴァ村の漁撈のような特徴を備えるというわけではない。たとえばわが国の沖縄県石垣島のサンゴ礁水域では、30 名以上の漁民が一同となり、8.5 トンの大型漁船や魚群探知機を駆使しながら潜水追い込み網漁をおこなっている (竹川, 1996)。

門型の漁法で捕れる海産物、とくにナマコやミナミキビナゴなどはアンバシラヴァ村民の好みに沿わないため、村外からの需要がなければこれらの漁法はほとんど用いられないだろう。まき網漁には特殊な漁網が必要であるが、潜水漁は簡単な漁具でおこなえるので、アンバシラヴァ村民にとって身近な現金獲得手段となっている。

しかし、漁撈活動が家計にもたらすのは現金だけではない。おかずとして消費する魚をももたらすのであり、この点の方がむしろ強調に値する。第Ⅱ章で述べたように、アンバシラヴァ村においては、主食その他の生活必需品を購入するために魚を売却して費用を稼がなければならない。このため、毎日の漁獲目標は最低限の主食購入費を稼ぐことであり、おかずに回すのは余剰の魚だけだと予想される。ところが実際には逆であり、おかずとして消費する分を取り去った残りが余剰として売却される。さもなくば、主食購入費を十分に稼いだとはいえないにも関わらず(Ⅲ-6 (5)) 農村よりも頻繁におかずを食べる(Ⅱ-4 (4)) ことを説明できない。

漁獲を売却するのは、換金専門型の漁をおこなった場合か浜によい買い手が来た場合、おかずとして消費しきれないほど多くの漁獲があった場合などにかぎられる(Ⅲ-6 (4))。自家消費する漁獲と売却する漁獲の割合は、時と場合によってさまざまである(Ⅲ-6 (5))。つまり、売却は、一定の金額を目標におこなわれるのではなく、場当たりの的になされているのである。また、筆者は出漁前の漁師と浜辺で会話する機会がよくあったのだが、会話を打ち切って出漁する漁師たちは、「ちょっとおかずを探しに行ってくるよ(*Hila laoke tse*)」と言って別れることが多かった。漁に出ることを慣用的に「おかず探し」と言っているのではなく、実際に彼らはおかずを探すため漁に出ることが多かったのである。

アンバシラヴァ村の家計において現金を獲得しようとする動機が薄いことは、塩魚の加工が盛んでないという事実からもうかがえる。他の漁師が捕った魚を塩魚に加工して町で売れば、8~14割の高い利潤率が期待できる(Ⅲ-5 (2))。

したがって、自家消費分を上回る余剰の漁獲があったときにも、他人に売るより自分たちで塩魚に加工した方が利益が大きいはずである。それにもかかわらず、自分で塩魚の加工をおこなう者や、加工する魚を他人から買い付ける者はほとんどいない。自家消費用の海産物を捕る場合には、必要な魚さえ確保できれば、それ以上の利益をあげるために余計に働くことはないのである<sup>(24)</sup>。

現金を獲得しようとする動機の薄弱さは、アンパシラヴァ村の家計経済が市場経済と関わりを持っていないかのような錯覚を起こさせる。しかしこれはまったく逆であり、季節的な活動による現金収入が多額にのぼるからこそ、村の地先での日常的な漁撈は自給的な色彩が濃いのである。村の地先の漁撈においては漁獲が多くなく、すべてを換金しても最低限の生活を維持するのに十分なわけではない。それにもかかわらず、自家消費する漁獲の割合は全体の半分以上を占めることが多く、多いときには7割以上にも達する（表 III-11 参照）。このような家計経済のあり方を可能にする季節的な活動については第 IV 章で述べる。

### (3) 複合世帯内部における分業

以上に述べたような漁撈活動を実践するにあたっては、複数の世帯による協同が大きな意味を持っていた（III-4 (4)）。これら複数世帯のまとまりの中では、大きく2種類の分業がみられる。第一は、男女による分業である。アンパシラヴァ村では女性も頻繁に出漁するが、おこなう漁法の種類数や出漁頻度（III-4 (2)、III-6 (1)）、漁獲効率（III-6 (1)）などからみると、むしろ男性が漁撈の主力である。男性は特別な理由がないかぎり連日出漁するのが普通であるのに対し、女

---

<sup>(24)</sup> つまり、アンパシラヴァ村における生産は、利潤極大化のための生産ではなく「使用価値のための生産（production for use value）」もしくは「生計のための生産（production for livelihood）」である（Sahlins, 1972）。これは、Sahlins が提唱した理念型「家内制生産様式（domestic mode of production）」に特徴的な生産のあり方だが、アンパシラヴァ村の漁撈経済はさまざまな点でこの理念型と共通性を持っている。ただ、そのことの意味については、調査地における経済の今後の推移を見守る中で考察していきたい。

性は些細な理由から出漁したりしなかったりする（Ⅲ-6 (1)）ことも、漁撈に関して男女の役割が異なることを示していよう。

もう一つの分業は、男性どうしの「ゆるやかな分業」（Ⅲ-6 (2)）である。これは漁撈をおこなう者とそうでない者との分業であるが、まったく漁撈をおこなわない男性はまずいないと言ってよい。したがって分業は固定的でなく一時的である。このような分業により、数少ない現金獲得の機会に恵まれた男性たちは、妻や子のおかずについて心配する必要がないのである。ただし、このような現象は、現金経済に対する意図的な対応とはいえない。市場経済が今ほど重要となる以前でも、病気などやむを得ない事情で出漁できなかった者に対しては、同様に漁獲が分配されていたと思われるからである。従来からの漁獲分配方式が、現金経済の顕著な現代に新たな意味を持つようになったというべきだろう。

しかし、このような世帯間協同のあり方は、2つの問題を抱えているように見える。その第一は、協同する世帯どうしの問題である。筆者の観察によれば、漁獲は出漁しなかった者に対しても分配されることが多いが、現金収入の使い道は現金を得た者個人の裁量に任されており、両者の分配方式は異なっている。このため、出漁する頻度が個人によって明らかに異なる複合世帯 F1 のような場合、出漁した者にくらべて出漁しなかった者の方が多くの利益を得る可能性がある。このことに関しては詳しい資料が得られなかったが、出漁した者はおそらく、現金収入を得た者からさまざまな形で見返りを得ることが多いのであろう。F1 の場合、漁撈にあまり出なかった者は、まき網やサメ刺網など特殊な漁具を複合世帯全体で購入する時に負担が大きかったようである。つまり、各世帯は、常に協同するわけでもなくとも将来の協同に備えて互酬的な関係を結んでおり、このことが分業による不満を生じさせないようにしていると考えられる。

第二は、協同する世帯とそれ以外の世帯の間での問題である。ここまで、世帯間協同のまとまりを複合世帯として記述してきたが、その編成原理は場合によりさまざまである。傾向としては、存命中の夫婦とその子孫が一つの複合世

帯としてまとまることが多いものの（Ⅲ-4(4)）、明確な規則として意識されているわけではない。このような条件のもとで、それぞれの世帯は、何を根拠として漁獲分配の範囲を決めているのであろうか。おそらく、さまざまな交渉を日々積み重ねることで、漁獲分配の範囲は次第に決まってくるのであろう。たとえば、親族関係がまったくないよそ者である筆者であっても、家屋を賃貸してくれている大家にとっては家族であると主張すると、魚の分配にあずかることができる。もちろんこれだけでは複合世帯の一員とはいえないが、日々の交渉を重ねていけば相互依存が増し、とくに要求をしなくとも魚の分配にあずかることができるようになるはずである。同様に、複合世帯の分裂も、日々の交渉が減っていく中で次第に起こり、分裂した二者の間に柵が立てられるに及んで誰の目にも明らかとなるのであろう。

## 第 IV 章

### 遠隔地出漁



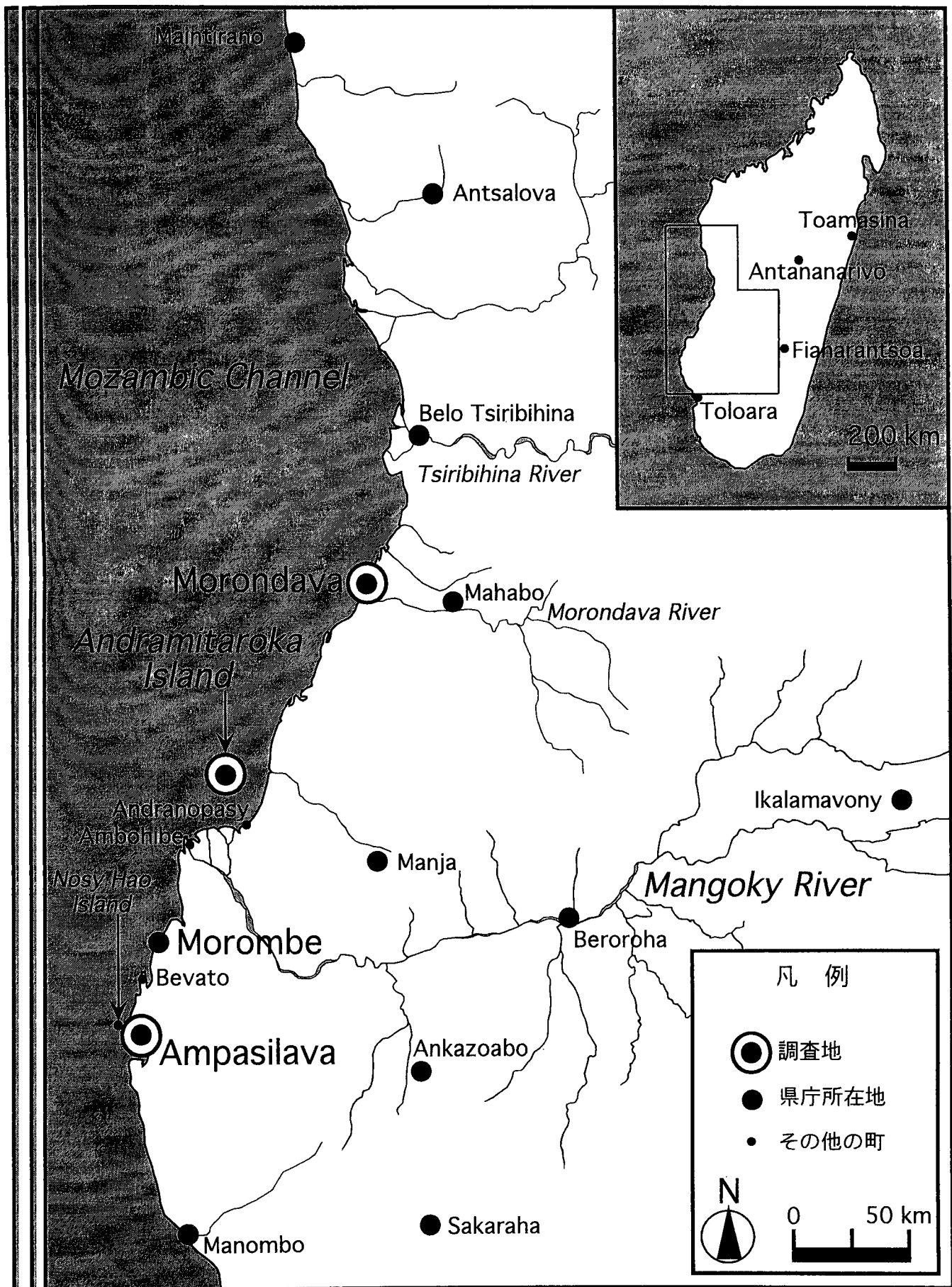
## IV-1 はじめに

前章では、アンパシラヴァ村の地先における漁撈を分析し、現金獲得を最大化させるという動機のもとに漁撈がおこなわれるわけではないことを示した。しかし同時に、日常的な漁獲だけでは、生活を成り立たせることが難しいことも明らかになった。漁民は主食作物を購入するために現金を必要とするにもかかわらず（第Ⅱ章）、日常的な漁獲を売却するだけでは十分な現金を得られないからである。いっぽう漁撈以外の生業は、すでに第Ⅱ章で検討したように、いずれも従事者が少数であるか、期待できる現金収入がわずかである。本章では、前章で取り上げなかった遠隔地における季節的な漁撈活動に着目し、それがアンパシラヴァ村民の家計において重要な経済的意義を持つことを論ずる。具体的には、1990年代になってアンパシラヴァ村民がおこなうようになった、遠隔地でのサメ刺網漁やナマコ潜水漁を、本章では取り上げる。

## IV-2 調査方法

調査は3つの地点でおこなった（図IV-1）。一つは、すでに詳しく紹介してきたアンパシラヴァ村である。1995年9月から翌年9月まで、この村の住民が出漁のために村を離れた期間を記録した。また、ナマコ採取やサメ捕獲が始まった状況などについて聞き込み調査をおこなった。

第二の調査地は、アンパシラヴァ村から約140km離れた無人島、アンザミタルカ島（Andramitaroka）である。この島では、これまで取り上げてきた複合世帯F1の構成員がサメ刺網漁をおこなっていた。そこで、1996年10月12日から25日までの14日間、F1の構成員のサメ刺網漁を観察するとともに、漁獲調査をおこなった。漁獲調査は第Ⅱ章および第Ⅲ章でおこなったものと同様で、漁獲を秤量し、どの魚がどれだけ売却あるいは自家消費されたかを記録した。その詳しい結果は巻末の付表1に示した。



図IV-1 調査地の位置

(Foiben-Taosarintanin' i Madagasikara [1990, 初版1966] 発行  
200万分の1地勢図をもとに作成)

第三の調査地は、アンパシラヴァ村から約 240km 離れたムルンダヴァ (Morondava) の町である。この町では、複合世帯 F2 の構成員がナマコ潜水漁をおこなっていた。そこで、1996 年 10 月 27 日から 11 月 9 日までの 14 日間、F2 の構成員のナマコ潜水漁を観察するとともに、漁獲調査をおこなった。その詳しい結果は巻末の付表 1 に示した。

## IV-3 ナマコ採取とサメ捕獲の歴史

### (1) ナマコ採取

マダガスカル南西海岸部におけるナマコ採取は、すでに 20 世紀初頭にかかなり詳しく報告されている (Grandidier et Grandidier, 1908: 377)。それらの報告によれば、ナマコは乾燥加工したのちインド系商人に売られ、彼らによって輸出されていた。ある報告は、「(ナマコ採取は) 奨励によって増益が可能であり、将来大きく発展する余地がある」と指摘している (Barbier, 1908: 41)。この指摘どおり、ナマコ採取は徐々に発展していった。1960 年代になると、アンパシラヴァ村の近くでもナマコ採取がおこなわれていたことが Koechlin (1975a: 43) の報告からわかる。ここでも、ナマコはインド系商人の手を通じ、香港方面に輸出されていた (ibid.: 57, 114)。

聞き込みによると、アンパシラヴァ村でナマコ採取が始まったのは 1970 年代頃である。水揚げ高は今より多かったが、きわめて安価だった。1979 年頃にナマコ買い付けを始めた者によると、長さ 4 尋のカヌーが 1 日でいっぱいになったという。その時の価格は、大きいナマコ 1 個が 5FMG 程度であった。これは、当時キャッサバ 25g 程度に相当する価格である。現在では、小さなナマコの価格でも 50~250FMG すなわちキャッサバ 200~1,000g 程度であることから、当時の買い付け価格はきわめて安かったといえる。

現在でも、潜水漁や磯漁により、村の地先でナマコが採取されている (第 III 章参照)。しかし漁師の話では、20 年前に比べてナマコの数が減り、とくに

大きいナマコが浅い場所に見られなくなったという。これは明らかに、過度な採取圧によって資源が減少したことを物語っている。漁師自身も、この現象を説明する際に、ナマコが「尽きた」と表現する。「尽きた」とは *lany* または *fonga* の訳であり、いずれも、食料を食べ尽くしたり燃料などを使い果たしたりした際に用いられる。20 年間でナマコの価格は上昇したものの、資源枯渇により漁獲水準が低下したため、村の地先ではナマコがほとんど採取されなくなったといえる。

しかし 1992 年になり、アンパシラヴァ村民のナマコ採取が再び活発になった。複合世帯 F2 の構成員を含む村の男たち数人が、500km 北方のマインティラヌ (Maintirano) におもむき、テント生活をしながらナマコ採取をおこなうようになったのである。その時に同行した者の話によると、マインティラヌでは高価なナマコがたくさん採れることを人づてに聞いたことが始まりだった。仲間のうちマインティラヌへ行ったことのある者は 1 人もいなかったが、何度も途中の町で海路のようすを尋ねながらカヌーを走らせた。その後、マインティラヌよりも近いムルンダヴァやアンザミタルカ島でナマコが豊富にあることがわかり、それらの場所でナマコ採取をおこなうようになった。遠隔地出漁の一環としてのナマコ採取が定着したのである。

## (2) サメ捕獲

20 世紀初頭には、ヴェズ漁民によるサメの細かい分類が報告されており (Barbier, 1908: 34-35)、ヴェズがサメを利用していたことがうかがえる。しかし、サメの捕獲法は明記されておらず、ナマコのように輸出されていたかどうかは明らかでない。1960 年代にアンパシラヴァ村の近くで詳細な調査をおこなった Koechlin (1975a) も、サメの肝臓は食用油として利用されると記すのみである。おそらく近年に至るまで、漁民がサメを主目的に漁をおこなうことはなく、サメは他の魚と一緒に混獲される程度だったのだろう。また、サメの経済的重要性もあまり大きくなかっただろう。

アンパシラヴァ村でも、サメは時おり魚に混じって捕獲されていたにすぎない。とくにサメを対象とした刺網漁が始まったのは、1991年のことである。最初に始めた複合世帯 F1 の者は、大きな網で大型のサメを捕るとフカヒレが高い値段で売れると聞き、その網を見たことはなかったが試作してみたという。その後も試行錯誤を繰り返し、村の地先でサメを捕ることができるようになった。1993年には、F1の一員(F1-2I)が知人と一緒にマインティラヌへ行ってサメ刺網漁をおこなった。この時にサメが多く捕れたため、以後はナマコ採取者と同様にテント生活をしながらサメ刺網漁をおこなうようになったという。現在では、マインティラヌよりも近いアンザミタルカ島においてサメ刺網漁をおこなうようになっている。

### (3) 村外での活動

以上のように、遠隔地でナマコ採取やサメ捕獲が始まったのは、1990年代に入ってからである。しかし、村を離れて活動をおこない、それを生活の一環に組み込むことは、ヴェズ漁民にとって決して新しい経験ではない。Koechlin

(1975a)の報告からは、そのような活動が少なくとも2種類あったことがわかる。一つは、村に少ない海産物を求めての漁撈活動である。当時のヴェズ漁師は、7月から12月半ばにかけて、海産物の多い海岸や大きな島へ移住して漁撈をおこなっていた(*ibid.*: 67-68)。村外における活動としてもう一つ、海産物の買い手を求めての交換(販売)活動がある。Koechlinは、ナマコを売却に行くベヴァトゥ村(Bevato)の漁民に同行し、約170km離れたトゥリアラまでの往復航海を日誌風に記録している(*ibid.*: 89-106)。ヴェズが「半漂海民(*les semi-nomades marins*)」(*ibid.*; Koechlin, 1984)と見なされたのは、このような移動生活のためであるといえる。

村外での活動は、地域と時代により多様なかたちで、ヴェズの生活に重要な意味を持っていた。たとえば、1960年前後にトゥリアラ市南方で調査をおこなった Battistini (1964: 121-123)によると、ヴェズ漁民は8月終わりから村を

離れる。そして、70~180km 南方にキャンプを設営し、ヨコシマサワラ *lamatsa* (*Scomberomorus commerson*)<sup>(1)</sup>を捕獲しながら数ヶ月を過ごしていたという。ただし、アンパシラヴァ村を含む北方のヴェズ地域ではヨコシマサワラ漁をおこなっていたという報告がなく、アンパシラヴァ村でもほとんどおこなわれてこなかったようである。

アンパシラヴァ村民による村外での活動に関しては、1940 年代頃以降のものについて、聞き込み調査から概略を捉えることができた。まず、1950 年代半ば頃まで、アンパシラヴァ村の漁民はマングキ川 (Mangoky) 流域 (図 IV-1 参照) と強いつながりを保っていた。植民地時代末期にあたる当時、この川の河口にあるアンブヒベ (Ambohibe) の町にはフランス人が住んでおり、物流の拠点となっていた。フランス人は、タバコ、ラッカセイ、ササゲ、キャッサバなどの農作物を川沿いの各村からムルンベ港まで運搬するため、ヴェズの各漁村から 6 艘ずつカヌーを徴用したという。そのために支払われた報酬は、ヴェズ漁民にとって大きな収入ではなかった。しかし、ヴェズ漁民は、途中で立ち寄った農村で魚と農産物を物々交換し、大量の食料を得ることができた。ある老人は、河口から 200km 以上離れたベルルハ (Beroroha) の町まで川をカヌーで遡り、地元の人を驚かせたという<sup>(2)</sup>。

しかしやがて、マングキ川流域との結びつきは弱くなり、代わって南のマヌンプ (Manombo) 周辺地域との結びつきが強くなる。この関係は 1950 年代に始まり、マダガスカル独立後の 1970 年代まで続いた。当時、マヌンプ地方の沿岸部では網を持った漁師が少なく、魚の供給がじゅうぶんでなかったという。アンパシラヴァ村漁民が持ち込んだ魚の干物 (写真 IV-1) は、キャッサバと交

<sup>(1)</sup> Battistini の記述では、学名 *Cybium commersoni*、方名 *lamatra* となっている。*C. commersoni* は *S. commerson* の別名 (Bauchot et Bianchi, 1984)。

<sup>(2)</sup> 1960 年前後にマングキ川流域を調査した Ottino (1963: 283) によると、ヴェズ漁民が川を 40km 遡上して魚を農村に販売していた。この頃、アンパシラヴァ村民はマングキ川流域にあまり出かけなくなっていたようであるが、いくつかの漁村はかろうじて上流の村とのつながりを保っていたのだろう。





写真 IV-1 かつて農作物と物々交換されていた干物 *vendra*

換された。キャッサバは、漁民にとってもっとも重要な主食作物であるにもかかわらず、アンパシラヴァ村付近の農村ではあまり栽培されていなかったためである（II-3 (2) 参照）。マヌンブ地方での物々交換が中止された理由は明らかでないが、貨幣経済の浸透が背景となっている可能性が高い。アンパシラヴァ村で魚をキログラム単位で買い上げ、塩魚に加工してムルンベで売却する者は、1970 年代初め頃に現れたと推測される。

以上のような交換（販売）活動とともに、漁撈活動も村外でおこなわれてきた。1960 年頃から 1970 年代初めにかけては、ムルンベへ季節的に出漁して刺し網漁や潜水漁をおこなう者がいた。当時ムルンベにはフランス人が住んでおり、鮮魚やロブスターが高価格で売れたからである。また、アンパシラヴァ村の約 5km 沖合に浮かぶヌサオ島でも、簡素な小屋やテントに泊まりながら漁撈をおこなうアンパシラヴァ村民がいる。一部の漁師は、島の方が海産物に富むと考えているためである。出漁季節は 4~12 月で、後述するアンザミタルカ島などへの出漁季節とほぼ一致する。おこなわれる漁撈の種類は村の地先とほぼ同じだが（第 III 章参照）、アンパシラヴァ村からの出漁者はとくに磯漁りや潜水漁を頻繁におこなう。島への出漁は、始まった時期こそ不明であるが、現在に至るまで細々と続いている。

以上のように、海産物の交換・販売や漁撈のために村外へ出かけることは、アンパシラヴァ村民も古くからおこなってきた。このような経験は、1990 年代に入ると、さらに遠くの地域におけるナマコ潜水漁やサメ刺網漁として展開するのである。

## IV-4 出漁先の概況

### (1) アンザミタルカ島

アンザミタルカ島は、周囲 1km に満たない小さな島である。ムルンベから直



線にして 85km 北東にあり、対岸の町アンザヌパシ (Andranopasy)<sup>(3)</sup>からは 30km 北の沖合に位置する (図 IV-1)。アンザミタルカ島はもともと無人島であり、現在でも家が 1 軒もない。島への出漁者は、櫂や底板などのカヌー備品と漁具で骨組みを立て、それにカヌーの帆をかぶせて居住用のテントとしている)。

島が無人なのは、島にあるタマリンド *kily* (*Tamarindus indica* L.) の木に憑依霊<sup>(4)</sup>が宿っているためだという。島では、この憑依霊の忌み嫌うことはすべて禁忌とされている。たとえば、酒を飲んだり音楽を奏でたりラジオを鳴らしたりして騒いだり、浜辺で鍋を洗ったり、タマリンドの木のそばで用便をしたりすることは、すべて禁忌である。ヤスを地面に突き立てることもかつては禁忌だったが、憑依霊の求めたものを捧げて許しを乞うたために、現在では禁忌でなくなっている。筆者がもっとも驚いたのは、島に多数住むネズミ *voalavo* を驚かすことが禁忌とされていることであつた。島のネズミの個体数はきわめて多く、夜になると傍若無人に人の寝ているそばを走り回る。たとえ腹の上に乗ったとしても驚かせてはならず、手で静かに誘導しなければならないという。打ち殺すことは論外である。漁のために島に来る人びとは、食糧をネズミから守るため、プラスチック製の水瓶の上に食糧を積み上げなければならない。

島の生活でもう一つ不便なことは、飲料水の入手である。水の湧かないこの島では、何日かに一度、カヌーで半日かけて井戸のあるアンザヌパシまで行かなければならない。数日分の水を汲んでくるためには、小さなパーティーでも、50 リットル入りのポリタンクが必要である。このポリタンクがネズミにかじられて破損しようものなら、漁を切り上げて村への帰途につかなければならない。水浴びも真水ではできないし、衣類の洗濯も海水でゆすぐ程度である。さらに、燃料となる薪も、この小さな島では入手できない。薪は水ほど頻繁に入手する必要はないが、水を汲みに行ったついでにアンザヌパシで購入してこなければ

<sup>(3)</sup> 行政的には、トゥリアラ州マンザ (Manja) 県アンザヌパシ郡の郡役場所在地。

<sup>(4)</sup> 憑依霊については第 II 章注 13、禁忌については第 I 章注 17 を参照。

ならない。

これらの不便にもかかわらず、乾季になって天候が安定してくると、多数の漁師がこの島まで出漁する。しかし、アンザヌパシなど近辺の町や村からの出漁者はほとんどない。筆者が 1996 年 10 月 18 日と 19 日におこなったサーヴェイでは、島に来ていたグループ<sup>⑤</sup>は 25 あり、人数は 135 人であった。人数の内訳は、男性 106 人、女性 20 人、労働力として期待されてはいないが親に連れられてきた幼児 9 人であった。男性が圧倒的に多いことがわかる。島以外の居住地について尋ねたところ、対岸のアンザヌパシから来ていたグループは 1 つだけであった。10 グループはムルンベから来ており、他のグループは、ムルンベの南 70km 以内に位置する村のうち 6 つの漁村から来ていた。ムルンベより南では、漁の対象となるサメや大型のナマコが少ないため、このような遠隔地を拠点としなければならないのである。

25 のグループのうち、3 つはナマコ買い付けを主な目的とし、2 つは小型の刺網漁を主な目的としていた。残りの 20 グループのうち、サメ刺網を所持する 4 グループはサメ刺網漁を主目的としていたが、ナマコ潜水漁に従事することもあった。他の 16 グループはもっぱらナマコ潜水漁を主目的としていた。

## (2) ムルンダヴァ市

ナマコ潜水漁の根拠地となっていたムルンダヴァは、アンザミタルカ島からさらに 105km、ムルンベからは 190km 北東に位置し、人口 1 万人を超える大きな町である (Association des Geographes de Madagascar, 1969-1971)。行政的には、トゥリアラ州ムルンダヴァ県を中心となっている。市内には大きな市場とたくさんの商店があつてにぎわう。首都アンタナナリヴからの道路はよく整備されており、行き交う車も多い。ビジネスや観光のために外国人もたくさん訪れる。ムルンダヴァの景観は、交通の不便なアンザミタルカ島とは対照

---

<sup>⑤</sup> ここでは、同じ食事を分け合っているかどうかを基準としてグループを定義した。人数中には筆者に同行したナマコ仲買人も含めたが、筆者自身は含めなかった。

的といえる。

ムルンダヴァとアンザミタルカ島ではどちらが好きかとアンパシラヴァ村の人びとに尋ねてみると、答えは2つに分かれた。前者が好きと答える者は、ムルンダヴァには見るべきものがたくさんあって退屈せず、好きなだけ酒を飲めて楽しいからだという。また、島での不便な生活を理由にする者もある。逆に後者が好きな者は、ムルンダヴァでは物価が高く、せっかく漁に出ても金がすぐなくなってしまうのでよくないという。

ムルンダヴァとアンザミタルカ島ではどちらがナマコを捕りやすいか、という点に関しても意見が分かれる。前者の方が捕りやすいという者は、海に濁りが少ないから、と答える。なぜ海に濁りが少ないかは不明である。後者の方が捕りやすいという者は、ムルンダヴァからの漁場の遠さを理由にあげる。アンザミタルカ島ではカヌーで10分も帆走すれば漁場に着くが、ムルンダヴァでは漁場が30kmほど離れているため、漁場に着くの半日かかりだというのである。

ムルンベ以南の村々からの出漁者は、ムルンダヴァ市内のあちこちでキャンプ生活をしてきたため、出漁者の規模を正確に把握することはできなかった。しかし、アンパシラヴァ村からの出漁者に関しては、互いに近い位置にテントを張っていたため、容易に把握できた。彼らのテントサイトは市の南部に位置し（写真IV-2）、入江を挟んだ南側には、Astutiがヴェズに関する集中的な調査をおこなった漁撈民集住地区ベタニア（Betania）がある（Astuti, 1995a）。アンパシラヴァ村在住者を中心としたグループは6つあり、それぞれのグループは1~2艘のカヌーとテントを共有し、食事をともにしていた<sup>⑨</sup>。これら6つのグループの総人数は、男性24人、女性1人、幼児1人、合計26人であった。

---

<sup>⑨</sup> それぞれのグループは、互いに親族関係にある者たちによって構成されており、日常的な出漁グループの編成とは大きな違いがないように見えた（III-4（4）参照）。これに対しグループ間の親族関係は、皆無とは言わないまでも非常に遠い場合があり、むしろ同じ村に住むという事実がキャンプ編成において重要であるように見えた。



写真 IV-2 ムルンダヴァ市はずれのキャンプ

このうち 18 人の男性はアンパシラヴァ村に在住しているが、4 人の男性は、アンパシラヴァ村に生まれ現在は他の村に在住している。後者のうち 1 人は、妻と子連れでいた。残る 2 人の男性は、アンパシラヴァ村在住者の姻族である。男性たちはすべて、ナマコ潜水漁を主目的に村から出てきていた。ムルンダヴァの近くにはサメもいるが、大型船舶の往来が多いため、サメ刺網漁をおこないにくい。

これら同郷の者たちは、あたかも一つのキャンプを形成しているように見えた。彼らは、漁に出たり町に散歩に出たりするときしばしば行動をともにし、アンザミタルカ島とムルンダヴァの間の移動もほとんど同時におこなっていた。彼ら自身も、「私たちは（互いに）連れ立って行く (*miarake zahay*)」「私たちは同じ一行である (*lia raike zahay*)」と認めていた。同時に、同郷で気心の知れた者 *olo raike*<sup>⑦</sup>のうち少数がテントを見張っていれば、他の者は漁に出払っても大丈夫なのだと語った。いっぽう、数十メートルほど離れてテントを張る他村出身の漁師や地元の漁師のことを、アンパシラヴァ村から来た漁師は「他人」*olo hafa*と呼んで警戒していた。ヴェズにとって「他人」という語は気心の知れない者を意味する。「他人」は、自分に対して恨みを持っていた場合、食べ物に呪薬 *aoly* を混ぜるなどの方法によって自分に害を及ぼす可能性があるからである<sup>⑧</sup>。じっさい、アンパシラヴァから来たある漁師は、筆者に対し、「彼ら（他村出身の漁師）は他人だから、ものをもらって食べたりしてはいけないよ」と申し渡した。つまり、アンパシラヴァ村の漁師たちは、出漁先でたまたま近くに住んだのではなく、意識的に集団で行動していたことがわかる。

筆者が 1996 年 11 月 7 日におこなったサーヴェイによると、このグループ群から目の届く範囲には、他に 7 つのグループがテントを張っていた。その内訳

⑦ この語は文字通りには「一つの人」であり、狭義には血縁で結ばれた者同士のことを指すが、気心の知れた者たち一般という広い意味でも用いられる。

⑧ 円滑な社会関係を結ぶよう期待される者は「親族」であり、そうでない「よそ者」は邪術を行使するという考え方は、マダガスカルの他地域にも見られる傾向である (e.g. 深澤, 1988)。

は男性 28 人、女性 10 人、労働力として期待されてはいないが親に連れられてきた幼児 5 人、合計 43 人であった。これらのグループがアンパシラヴァ村のグループのように明確なまとまりを持っていたかどうかは、明らかでない。しかし、このグループ群の中にはアンパシラヴァ村在住者が 1 人もおらず、かわりにベヴヒツェ (Bevohitse) 村の在住者が 27 人 (女性 6 人幼児 3 人を含む) と多数を占めていた。同郷者は互いに近くにテントを張り、不便なキャンプ生活においてさまざまな相互扶助をおこなう傾向にあるといえる。

## IV-5 1990 年代における遠隔地出漁の実態

### (1) アンパシラヴァ村民の遠隔地出漁

1995 年 9 月から 1996 年 9 月までの間にアンパシラヴァ村民が遠隔地で漁をおこなった期間を図 IV-2 に示す。この図から、遠隔地への出漁に関して次の 3 点を指摘できる。第一に、12 月から 4 月までは出漁する者がほとんどない。これは、雨季が 12 月から 3 月まで続くことと対応している。降水量が多く風向きが安定しない季節には、漁師たちは家族の住む村で漁をおこなう傾向にあるといえる。第二に、乾季 (4 月～11 月) の全期間を通じて出漁先で過ごす者はほとんどない。この図にあらわれる漁師たちの年間平均出漁日数は 91.64 日<sup>⑨</sup>で、出漁に適した期間の 4 割にすぎない。また、出漁の時期や日数には個人差が大きい。これらのことから、出漁の時期や日数はそれぞれの漁師の都合に応じて決められているといえる。第三に、成人男子の大部分が遠隔地に出漁している。アンパシラヴァ村の成人男子 40 人のうち、25 人 (62.5%) がこの図にあらわれている。このうち、サメ網漁を主な目的とした者は 7 人、ナマコ潜水漁を主

<sup>⑨</sup> 筆者は別所において「村の成人男性 47 人のうち 6 割にあたる 29 人」が遠方に出漁し、その平均出漁は「76.76 日」または「77 日」と書いた (飯田, 1998a: 12; 1998b: 63)。本論文では、第 II 章および第 III 章にしたがい、未婚の者を成人男性と見なさなかった。また、出漁期間が長かったために「村の」成人男性と見なしにくかった例も、ここでは含めた方が妥当と判断して新たに含めた。

1995年		1996年										備考
11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	
≡											≡	サメ網漁をおこなった家族F1構成員
≡	≡								≡	≡		他にサメ網漁をおこなった者
								≡	≡	≡		ナマコ潜水漁をおこなった家族F2構成員
									≡	≡		家族F2構成員に同行した者
≡						≡	≡	≡	≡	≡	≡	他にナマコ潜水漁をおこなった者
≡						≡	≡	≡	≡	≡	≡	

図 IV-2 アンバシラヴァ村民が遠隔地に出漁した期間  
(同一人物の出漁期間を同じ高さの段に示す)

な目的とした者は 18 人であった。

## (2) サメ刺網漁

1996 年にアンザミタルカ島でサメ刺網漁をおこなった F1 の成人男性は、2B、2C、2I、3A の 4 人であった（図 I-6 参照）。このうち 2B は、村では鮮魚とタコの仲買・加工を主な仕事としており、漁に出ることは他の 3 人に比べて少なかった。いっぽう他の 3 人は、村ではもっとも頻繁に漁に出る者たちであった。3A は未婚であるため厳密には成人男性と呼びにくい、年齢的には 2I よりむしろ年長であり、漁撈技術にも長けている。この 4 人が出漁しているあいだ、村に残された家族のうち、漁撈をおこなう成人男性は 2E のみであった。2E が刺網漁に出る際には、妻や幼い甥をとまっていたという。

F1 の漁撈活動は、2 週間あまりの観察期間を通じ、潮汐にはほとんど左右されずに似たような日課を毎日繰り返していた。日の出の頃に起き出すと、まず朝食としてコーヒーを飲む。7 時前頃になると、前日に仕掛けておいたザヌケ（沖合でおこなう置き刺網、III-3 (3) 参照）を取りに行く。用いるカヌーは小型の漁撈用カヌーではなく、村から乗ってきた大型の航海用カヌーである。このとき出かけるのは 3 人で、1 人は留守番である。アンパシラヴァ村の地先と違って漁場が近いので、カヌーを漕いで行っても 30 分あまりで網を回収して戻ってくる。ただし、獲物が多ければ網から獲物を外す手間がかかるため、それだけ時間がかかる。網を降ろして獲物を留守番に渡すと、今度はカヌーを帆走させてサメ刺網を置いてある場所へ向かう。3 人が漁に出ているあいだ、留守番は、ザヌケで捕れた魚を塩魚に加工したり昼食を準備したりしながら待つ。

島を出た者たちが帰り着くまでは、風を利用しても最低 2 時間半はかかる。つまり、それだけ離れた場所が漁場となっている。網の位置を見失ったり、大きなサメがかかっていて網を上げるのに手間取ったりすると、さらに長くかかることになる。

サメ刺網漁の漁場は水深が深く、40 尋ほどあるといわれる。漁場に着くと、



すでに入れておいたサメ刺網を引き上げる。サメ刺網は、普通の魚を捕獲するための長方形の刺網（図 III-1 参照）を大型にしたものである。F1 の男たちが用いていた網は高さが 5m ほどあり、幅は 90 尋もあるといわれていた。網の目は一辺が 18cm ほどであった。網は自家製で、ほとんどの部分はナイロン製の細引きを利用していたが、古い木綿製漁網を幾重にも束ねて細引きの代わりとしている部分もあった。小さな獲物しかかかっていなければ、獲物を外して網をもう一度入れる。網を上げたのと同じ場所に入れることもあるし、その場所が期待できそうになれば他の場所に入れることもある。網を入れる際には、数カ所にくくりつけられている魚を確認する。この魚は寄せ餌となるもので、切り身でなく丸ごと紐で網にくくりつけられている。これが落ちたり古くなったりすると、ザヌケで捕ってきた魚を新たににくくりつける。網に大きな獲物がかかったときには、狭いカヌーの上で外す作業が困難であるため、網ごと持ち帰って翌日網を刺しに来ることになる（写真 IV-3）。捕獲されるサメの種類は、メジロザメの仲間 *akio foty* (*Carcharhinus sp.*) や、ヒラシユモクザメ *akio viko* (*Sphyrna tudes*)、トンガリサカタザメ *soroboà* (*Rhynchobatus djiddensis*) など多様である。

大潮の日にサメ刺網を見た後で時間があれば、さらにナマコ潜水漁がおこなわれることもあるという。しかし、筆者が調査した期間は、F1 の男たちはナマコ潜水漁をおこなわなかった。島に帰り着くとただちに昼食を食べ、サメが捕れたときには解体をおこなう。サメが捕れなかった場合は、午後は休息の時間となる。寝そべって休んだり、他のグループを訪問したり、網の繕いをしたり、夕食の準備をしたりする。夕方になると、1 人を残して 3 人がザヌケを仕掛けに行き、戻ってから夕食をとって 1 日が終わる。

### (3) サメ刺網漁による漁獲の加工と売却

ザヌケで捕れた魚の一部はおかずとして自家消費したり、サメ刺網の寄せ餌に使ったりする。現金で売却したりする場合もあるが、島には魚の仲買人がい

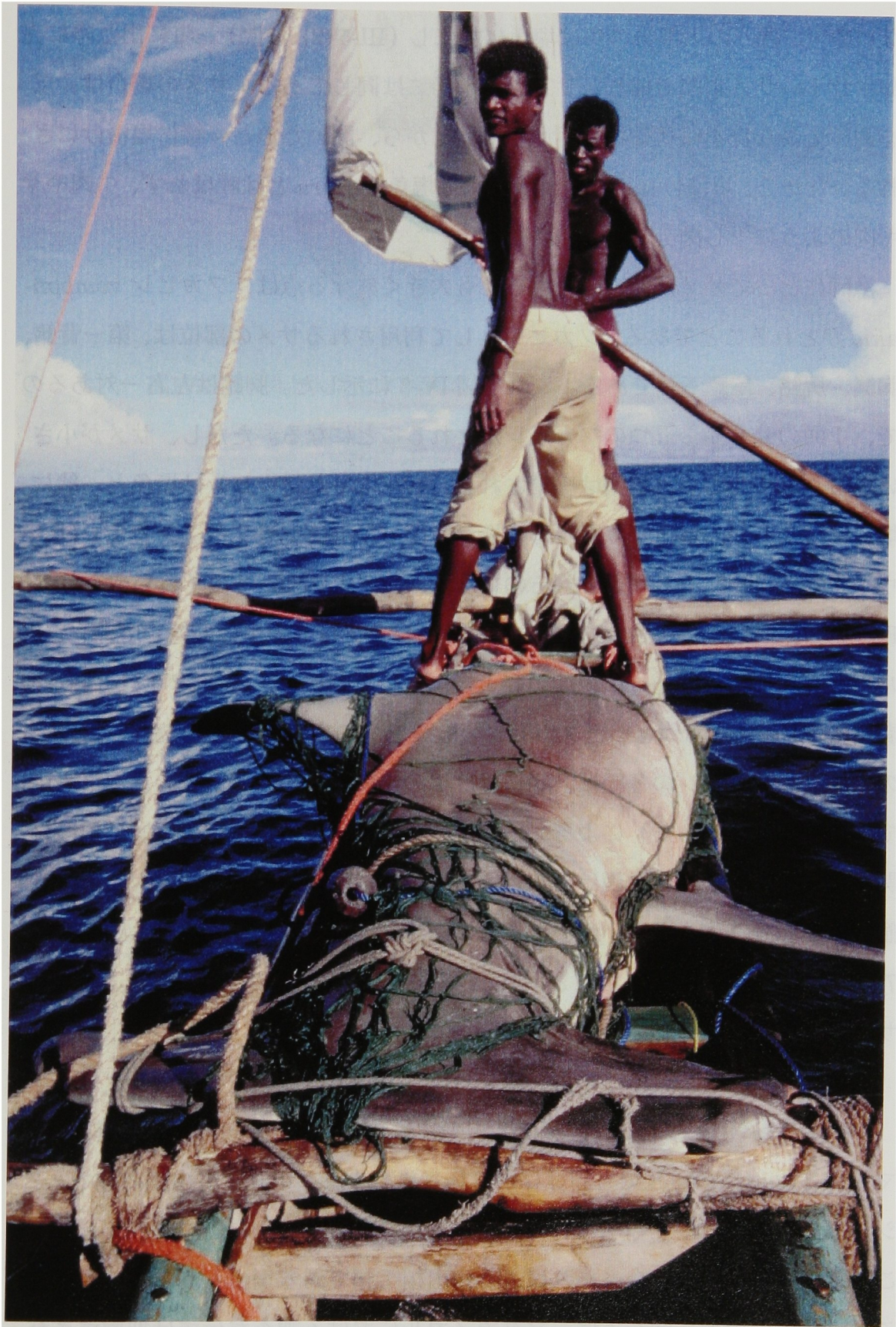
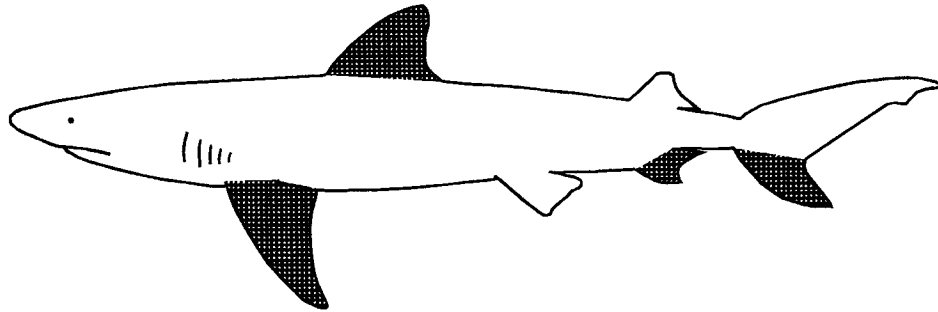


写真 IV-3 サメ刺網漁の獲物

ないので、残りの大部分の魚は塩魚に加工し（III-5 (2) 参照）、町に出た際に売却される。サメ刺網で捕れたサメも基本的には同じである。サメの場合は、皮を剥いてから身を紐状に細長く切り分けてから、開いた魚と一緒に塩漬けにされる。ただし、塩漬けにされたサメの肉は塩魚 *fia sira* とは呼ばれず、牛肉やヤギ肉のように干し肉 *kitoza* と呼ばれる。

漁師にとってサメが他の魚ともっとも大きく異なる点は、フカヒレ *vomboñakio* がとれることである。フカヒレとして利用されるサメの部位は、第一背鰭、胸鰭、尻鰭、尾鰭下葉である。これを図 IV-3 に示した。胸鰭は左右一対あるので、1頭のサメから五つのフカヒレがとれることになる。ただし、サメが小さい場合、尻鰭など小さな鰭は廃棄される。切り取ったフカヒレは塩魚と一緒に塩漬けにするが、塩魚よりも早めに塩から出して天日乾燥する。フカヒレは、ヴェズたち自身により利用されるのではなく、仲買人によって高く買い取られる。F1の男たちは、島で漁をするあいだフカヒレをテントの中に保管しておき、ムルンダヴァに出かけた折に現地の商人にまとめて売却した。表 IV-1 は、調査期間中に F1 の男たちがとったフカヒレの数量とその売り値を、等級別に示したものである。フカヒレの等級は、鰭の付け根の中央から鰭の先までの長さ（表中では「大きさ」とした）によってのみ決まり、サメの種類や鰭の位置は値段に関係ない。フカヒレの単価はこの大きさによって決まる。1等のフカヒレは8個で全体の8%にすぎないが、重量では全体の53%を占め、売り上げ金額では74%にも達している。このことから、大型のサメ1匹分のフカヒレは、小型のサメ数匹分のフカヒレよりはるかに高価であるといえる。

ムルンダヴァで買い取られたフカヒレは、陸路で首都アンタナナリヴ（Antananarivo）へ運ばれ、そこで別の業者に売られる。その後、外港トゥアマシナ（Toamasina）でも同様に別の業者に売られ、中華食材の集荷地であるシンガポールや香港へ輸出される。フカヒレが中華料理として消費されるのは、これらの土地である場合もあれば、再輸出相手国である場合もある。しかし、これより先の流通に関しては、マダガスカルにおける調査だけでは把握できな



図IV-3 フカヒレとして利用されるサメの部位（網がけ部分）

表 IV-1 調査期間中にとれたフカヒレの等級別内訳

	大きさ	個数	重量 (kg)	単価 (FMG/kg)	金額 (FMG)
1等	25cm 以上	8	4.28	225,000	963,000
2等	20-25cm	8	1.37	150,000	205,500
3等	15-20cm	46	1.95	60,000	117,000
4等	15cm 未満	37	0.50	30,000	15,000
合計		99	8.10		1,300,500



かった。ヴェズの人々がサメ刺網漁を熱心におこなうようになった背景には、このようにフカヒレが国際的な流通経路に乗り、高額で取引引きされるようになったことがあげられる<sup>(10)</sup>。

F1 が 2 週間の調査期間中にアンザミタルカ島で得たすべての漁獲を、表 IV-2 に示した。フカヒレの重量は売却時にはじめて明らかになったため、サメ刺網で捕れたかザヌケで捕れたかを明確に区別できなかった。魚の一部は自家消費されたが、鮮魚の取引価格にもとづいて金額換算した。この表を見ると、とれたフカヒレの重量はわずかであるにもかかわらず、その売り上げは全体の 67% を占めており、いかに高価であったかがわかる。しかも、フカヒレの売り上げの大部分に相当する 8 個の 1 等フカヒレは、いずれもサメ刺網にかかった 3 匹の大型サメ<sup>(11)</sup>からとれたものである。2 等フカヒレもすべて、サメ刺網にかかったサメからとれた。サメ刺網に獲物がかかる頻度は決して多くないが（付表 1 参照）、漁師にとって大きな経済的利益をもたらすのは、ザヌケではなくサメ刺網漁なのである。

表 IV-3 では、漁獲に加えて労働投入や効率の面でもサメ刺網漁を他の漁法と比較し、その特徴を示した。追い込み刺網漁に関する資料には、1996 年 6 月におこなった F1 の漁獲調査の結果を用いた（第 III 章参照）。フカヒレの売り上げは、1 等と 2 等をすべてサメ刺網漁の漁獲に含め、3 等と 4 等をすべてザヌケの漁獲に含めた。実際には、3 等と 4 等の一部はサメ刺網漁の漁獲であるので、サメ刺網漁の漁獲がやや低めに評価され、ザヌケの漁獲がやや高めに評価されている。この表から次のようなことがわかる。村の地先での調査期間中、F1 の男たちはもっぱら追い込み刺網漁のみを集中的におこなっていたにもかかわらず、アンザミタルカ島ではこれを上回るほど多くの労働量を投入している。しかし、村と島における漁撈の違いは、漁獲効率においてさらに著しい。ザヌ

<sup>(10)</sup> 東南アジア市場においてマダガスカル産フカヒレに対する需要が高まった経緯は今のところ不明であるが、1980 年代中葉における香港での価格高騰と取引増加（鈴木, 1994）に関わっているのかもしれない。

<sup>(11)</sup> その推定重量はそれぞれ、163kg、84kg、38kg である。

表 IV-2 アンザミタルカ島における複合世帯 F1 の漁獲

漁法	漁獲物の種類	単価 (FMG/kg)	重量 (kg)	金額 (FMG)
サメ網漁	サメ肉	800	303.21	242,568
	魚類 (塩魚に加工)	1,800	10.06	18,108
	// (即売・自家消費)	1,000	1.99	1,990
	(小計)		315.26	262,666
刺網漁 (ザヌケ)	サメ肉	800	82.98	66,384
	魚類 (塩魚に加工)	1,800	82.31	148,158
	// (即売・自家消費)	1,000	101.10	101,100
	イセエビ	9,000	5.87	52,830
	タコ	1,000	1.00	1,000
	(小計)		273.26	369,472
不明	フカヒレ	(表 IV-1 参照)	8.10*	1,300,500
合計			596.62	1,932,638

\* : 乾燥重量

表 IV-3 サメ刺網漁と通常の網漁の比較

	サメ網漁	刺網漁	追込網漁
調査日数 (日)	14	14	7
出漁回数 (回)	10	11	5
平均出漁者数 (人)	3	3.2	2.2
平均出漁時間 (時間)	6.43	2.04 <sup>*1</sup>	4.09
総労働投入 (人・時)	109.70	66.57 <sup>*2</sup>	45.28
漁獲量 (FMG)	1,431,166	468,792	59,570
漁獲効率 (FMG/人・時)	13,046	7,042	1,271

\*1 : 夕方網を置きに行ってから帰ってくるまでの時間と、朝網を回収しに行ってから帰ってくるまでの時間を、別々に算出して合計してある。

\*2 : 網を夜中に置きに行ったため、正確な出漁時間を測れなかったことがあったが、そのような場合は網を置きに行ってから帰ってくるまでの平均時間 (0.57 時間) を代用した。

ケの漁獲効率は高めに評価されているのであてにできないが、サメ刺網漁の漁獲効率は低めに評価されているにもかかわらず、追い込み刺網漁の漁獲効率の10倍以上に達している。

以上から、アンザミタルカ島における漁撈活動は、F1の家計に大きく寄与しているといえる。これを視覚的に示すと図IV-4のようになる。村の地先の漁を1年間続けたときの漁獲は、乾季および雨季における漁獲調査から推定した値である（表III-11参照）。また、年間主食購入費は、村の地先で漁獲調査をおこなった期間中の食事から推定したものである<sup>(12)</sup>。村の地先の漁だけでは、おかずにするべき魚を売却したとしても、主食を購入するだけの現金を手に入れることができない。それに対し、アンザミタルカ島でわずか2週間漁をおこなえば、村の地先で半年以上漁をおこなうのと同じだけの現金を手に入れることができる。また、1年間に家族全体が消費する主食を購入するためには、アンザミタルカ島でわずか6週間漁をすればじゅうぶんだということになる。

#### (4) ナマコ潜水漁

アンパシラヴァ村の漁師たちは、1996年の時点で、アンザミタルカ島とムルンダヴァの両方をナマコ潜水漁の根拠地としていた。以下の観察と漁獲調査は、ムルンダヴァでおこなったものである。

ムルンダヴァでナマコ潜水漁をおこなったF2の成人男性は、2B、3B、2C、2Dの4人であった。いずれも、村では頻繁に漁に出ていた者たちである。4人が村を離れてしまうと、女性と未成年だけが村に残され、磯漁り以外の漁はおこなわれなかった。その間、魚を捕獲することがめったにないので、おかず用の魚は貯蓄していた現金で購入したという。

F2の4人は、出漁先において、アンパシラヴァ村から来た他の漁師たちと

---

<sup>(12)</sup> 最低限必要な主食を購入するための費用は、実際に主食を購入するのに要した費用より低いはずである。しかし、生存に必要な熱量をもっとも安価なトウモロコシでまかなう場合に必要の費用を実際に算出してみても、主食の実費と大きな違いがなかった（表III-11参照）。

(単位：万 FMG)

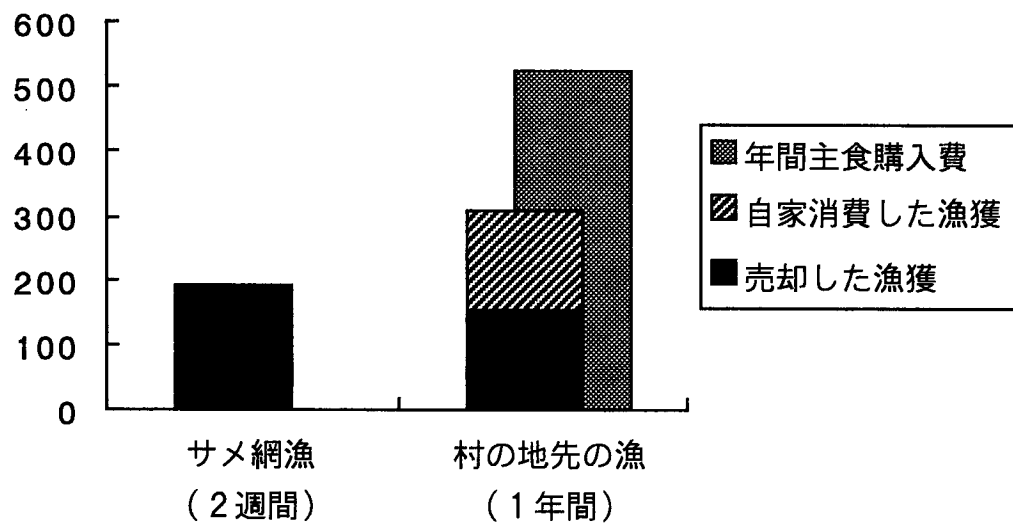


図 IV-4 複合世帯 F1 が遠隔地出漁によって得た漁獲



もに行動することが多かった。その中でもとくに 4 人と関係を保ちながら行動していたのは、既婚男性 X と未婚男性 Y の 2 人である。X は、2B や 2C や 2D にとって父方交叉従兄弟の息子 (FZSS)<sup>(13)</sup>にあたる。また、Y は、2B や 2C や 2D にとって父方叔母の夫の甥 (FZHBS) にあたる。この 2 人は、村では F2 と関係が深いわけではない。しかし出漁先においては、F2 の 4 人に誘われて、同じカヌーに同乗して漁をおこなっていた。つまり、出漁先で行動をともにするグループは近親の者たちによって構成されるが、「近親」の範囲は個別の事情に応じて柔軟だといえる。

6 人は、漁に出るときは 2 艘のカヌーに分乗した。ほとんどの場合、2B と 3B と X が同じカヌーに乗り、2C と 2D と Y がもう一つのカヌーに乗り込んだ。ただし、風向きの具合が悪く漁に出るか出ないか意見が分かれたときは、いつもと違ったメンバーで漁に出かけることもあった。漁獲されたナマコはそれぞれのカヌーごとに売却し、売り上げから食費などを差し引いた残りはカヌー乗組員に均等分配された。2 つのカヌーの乗組員は、売り上げから同じ金額を出し合って食料を購入し、同じものを調理して食べていた。つまり、食事の面では 6 人が一つのグループに属していたが、現金分配の面では 2 つに分かれていた。

ナマコ潜水漁には、水中眼鏡とヤスを用いる。村の地先でおこなわれている潜水漁とまったく同じである (III-3 (8) 参照)。しかし、漁場が遠いため、遠隔地での生活リズムは村とまったく異なっている。漁師たちは、早朝 4 時頃に声をかけ合って起きるとすぐさまカヌーで漁場へ向かう。朝は風が弱いため、漁場に着くには少なくとも 3 時間かかると思われる。しかし、これは順風の場合である。何時間もかけて沖へ出たとしても、風がうまく吹かずカヌーが走らなければ、漁場にたどり着く前に帰ってこなければならない。この場合、その日の漁獲はまったくないということになる。うまく漁場にたどり着いた場合、漁を終えてキャンプに帰着するのは午後 2 時頃である (写真 IV-4)。漁から帰っ

(13) 親族関係を表わす略号については、第 III 章注 10 を参照。



写真 IV-4 ナマコ潜水漁の獲物

てくると、持ち帰ったナマコを塩漬けにしたのち、炊事当番を残して町へでかけてお茶を飲む。1日のうちで食事らしい食事は、散歩から帰ってとる夕食ただ1度きりであった。

ナマコは、腹面を切開して内臓を取り出した後で塩漬けにする。村の地先でとれる小さいナマコはただちに乾燥させるが、ムルンダヴァのナマコは大きいので、そのようにすると傷んでしまうという。また、アンザミタルカ島にナマコを買い付けに来る仲買人は、買い取った生のナマコをただちにゆでるが、これには手間と時間がかかる。そこで、一刻も早くムルンダヴァの町で茶を飲みたい漁師たちは、ナマコを塩漬けにして保存がきくようにしておき、後日まとめてゆでるようにしている。ナマコをゆでる日には漁を1日休み、余った時間は仲買人への売り込みに専念する。ナマコをゆでる湯は、アンパシラヴァ村出身者すべてが交代で使う。個別に湯をわかすよりも効率的だからである。

#### (5) ナマコの加工と売却

ナマコは、ゆでて加工した日のうちに仲買人に売却してしまう。高い買い値を提示した仲買人には、ナマコ加工の日を前もって教えておくこともある。そうでない場合は、たとえ高い買い値ではなくとも、手近な仲買人を連れてきてナマコを売却してしまう。筆者の印象では、仲買人の多くがアンタナナリヴかムルンダヴァに住んでいた。ムルンダヴァで採取されていたナマコは3種類あり、種類ごとに単価が異なる。調査期間中には、イシナマコ *benono* (*Holothuria nobilis*) の単価が 30,000~39,000FMG/kg、バイカナマコ *zanga borosy* (*Thelenota ananas*) およびヨコスジナマコ *rorohankena* (*Stichopus variegatus*) の単価が 10,000~15,000FMG/kg であった。ナマコは、フカヒレと同様、ムルンダヴァからアンタナナリヴとトゥアマシナを経てシンガポールや香港へ輸出され、そこからさらに他の国々へ再輸出されて中華食材として消費される。

ムルンダヴァでは、村よりナマコが多くて見つけやすいだけでなく、一つ一

つのサイズが大きいために 1 個あたりの単価が高い。たとえば、ヨコスジナマコの村での重量あたり単価は 12,000FMG/kg 前後であるので、ムルンダヴァと大差がない。しかし、村では体長 10~15cm<sup>(14)</sup>のものが多く、ムルンダヴァでは体長 20cm 以上のものが多く。このため、1 個あたりの価格は、村では 150~400FMG であるのに対しムルンダヴァでは 2,000~3,000FMG である。また、イシナマコの村での単価は 5,000~15,000FMG/kg であり、ムルンダヴァでの単価と数倍の開きがある。その理由の一つは、大きなサイズのものが高級とされるためである。1 個あたりの価格差はさらに開き、村では 100~500FMG であるのに対しムルンダヴァでは 10,000~20,000FMG にも達する。これに加えて数が多いのであるから、ムルンダヴァでのナマコ漁獲効率は、村の地先より格段に高くなる。

このことを漁獲調査の結果から示したのが表 IV-4 である。村の地先での漁に関しては、1996 年 6 月におこなった F2 の漁獲調査の結果を用いた（第 III 章参照）。また、ムルンダヴァでの漁に関しては、F2 の構成員ではない X と Y の取り分を差し引いてある。村の地先での調査期間、F2 の男たちは釣り漁もおこなっていたので、労働投入量がある程度少なくて当然である。しかし、ムルンダヴァでは 1 回あたりの平均出漁時間がきわめて長い。これは、カヌーを帆走させて漁場にたどり着くまでの長時間をも出漁時間を含めているためである。実際にナマコを探す時間はこれよりはるかに少ないわけだが、それにもかかわらず、ムルンダヴァでは漁獲効率がきわめて高い。労働投入量と漁獲効率が村の地先の漁より高いという点で、ムルンダヴァでのナマコ潜水漁はアンザミタルカ島のサメ刺網漁と類似しているといえる。

このため、村を離れて出漁する期間中の漁獲高はきわめて多く、年間家計にとって無視できないものとなっている。これを図 IV-5 に示した。F1 の家計に

---

<sup>(14)</sup> 体長は、採取後しばらく空气中に放置され、ある程度水分が落ちた状態に計測した。この状態で重量をはかると、アンバシラヴァ村では 100g 前後のものが多く、ムルンダヴァではこの状態での秤量をおこなわなかったが、加工してさらに水分が落ちた状態で秤量すると 300g 程度のものが多かった。

表 IV-4 ムルンダヴァと村の地先における潜水漁の比較

	ムルンダヴァ	村の地先
調査日数（日）	14	7
出漁回数（回）	16	5
平均出漁者数（人）	2	1.2
平均出漁時間（時間）	11.81	3.58
総労働投入（人・時）	321	22
魚類の漁獲量（kg）	12.06	8.55
その他の漁獲量（FMG）	1,303,000	19,850
漁獲効率（FMG/人・時）*	4,100	1,291

\* 自家消費した魚類を 1,000FMG/kg として換算

（単位：万 FMG）

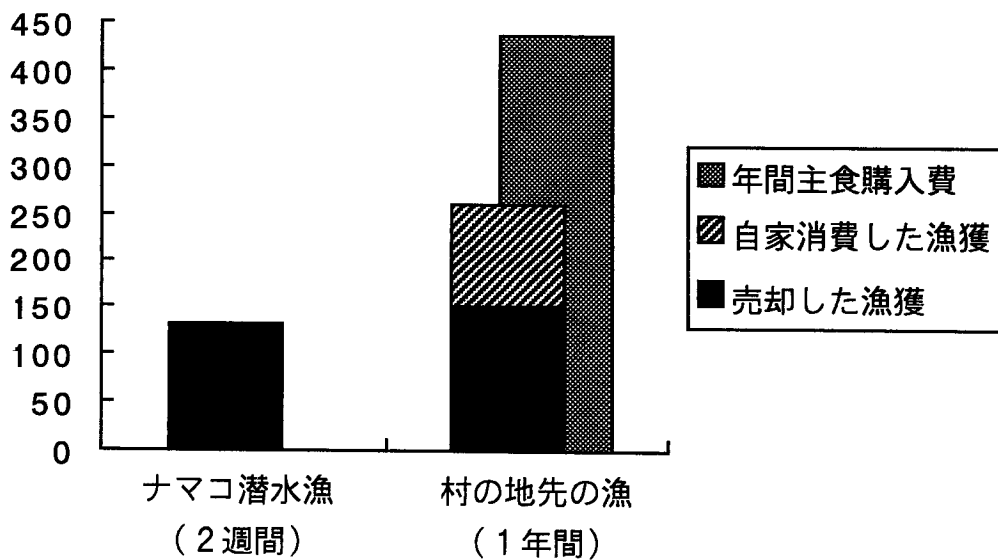


図 IV-5 複合世帯 F2 が遠隔地出漁によって得た漁獲

対する遠隔地でのサメ刺網漁の寄与と傾向がまったく同じである。すなわち、ムルンダヴァで2週間漁をおこなえば、村の地先で半年以上漁をおこなうのと同じだけの現金を手に入れることができる。また、1年間に家族全体が消費する主食を購入するためには、ムルンダヴァでわずか6週間漁をすればじゅうぶんだということになる。しかし実際には、F2の男たちのうち3人は111日、1人は73日を遠隔地で過ごしているので、遠隔地での漁獲は1年間の主食をまかなって余りあるといえる。

## IV-6 考察

### (1) 遠隔地出漁の経済的意義

アンパシラヴァ村では、1992年からわずか6年のあいだに、老人を除くほとんどの成人男性が遠隔地へ出漁するようになった。これほど急速に遠隔地出漁が盛んになったのは、少ない投資でも大きい漁獲を確実にあげられたためであろう。とくにナマコ潜水漁では、村の地先の漁撈とまったく同じ漁具を用いるため、成人男性であれば簡単に始めることができる。このような背景から起こった遠隔地出漁の広がり、アンパシラヴァ村のみの現象ではない。アンザミタルカ島でのサーヴェイから明らかなように、遠隔地へ出漁する漁師は他の村にも多い。これらの村々は、ムルンベから海岸沿いに南へ100km以上にわたって点在している。

遠隔地出漁は、ヴェズの人びとにとっていくつもの経済的意義を持っている。第一に、多くの漁師は、遠隔地出漁による収入の一部を生産資本に投資した。たとえばF2の男たちは、ナマコの売り上げによって得た金でナイロン製刺網を購入した。このためF2は、1996年の調査時におこなっていなかった刺網漁を1998年には頻繁におこなうようになっていた(III-6(1)参照)。また、F1は、陸上輸送のための牛車やそれを引かせるための牛、さらには牛泥棒を威嚇するための銃器を1996年から1998年にかけて購入している。そのための資金源と

しては、F1 が熱心におこなっていたカヌー製作による現金収入も無視できない。しかし、普通の漁民が持たない銃器などを購入するためには、フカヒレの売り上げも同等に重要な資金源となっていたはずである。

遠隔地出漁の第二の経済的意義として、食料以外の多様な消費物資の購入を容易にしたことがあげられる。ムルンダヴァでナマコ潜水漁をしていた漁師たちのほとんどは、漁が終わった夕方や休漁の日にムルンダヴァの商店街を歩き、村へ帰る日に買うものを熱心に思案するのを楽しみとしていた。実際に買って帰ったものを尋ねると、ラジカセ *manitò* (フランス語の *magnéto* に由来) や子供服 *sikiñ-ajà* などが目立った。筆者の印象では、これらの商品は農村に少なく、稀に目にしても古いものばかりであった。これに対し漁村では、どの家庭でも出漁期の終わりに新しい子供服が何着ずつか増えていた。ラジカセもほとんどの世帯にあり、中には短期間で何度も買い替える者もいた。

遠隔地出漁の第三の経済的意義は、先の2点ほど目立たないがもっとも重要である。それは、不足しがちな家計収入の不足を補填するということである。第III章で見たように、村の地先の漁撈では漁獲効率が低く、その日の主食購入費に見合う現金収入を得るためには長時間働かねばならない。しかし漁師たちは、そのような努力目標を達成するために村で漁撈をおこなうわけではなく、一定時間以上に漁撈をおこなうことは稀である。つまり、もっとも控えめな生活をしていたとしても、村の地先の漁撈だけでは収入に不足が生じる。時には長い時間をかけて大きな魚群を捕ったり、短時間で大量の漁獲を得たりすることもあるが、長期的に見れば収入は不足しがちである。このような毎日の収入不足を埋め合わせる大口収入を得る手段として、遠隔地への出漁は大きな役割を果たしている。

このことが示すのは、現代アンパシラヴァ村の家計経済がこれまで考えられてきたような漁撈経済とは異なっているということである。従来、ヴェズは1日の消費に必要な魚だけを捕獲し、次の日には別の新たな生産-消費サイクルを繰り返しているかのように考えられてきた (cf. Astuti, 1995a: 45-46)。しかし

アンパシラヴァ村では、もっと長いサイクルを経て初めて生産と消費の帳尻が合う。つまり、ある程度集中的な漁獲を得た後は、それによる利益を食いつぶしつつ、漁獲効率が低くとも漁に出る日が続くのである。このサイクルの周期は世帯や季節によって異なり、長い場合には、1年を経て初めてサイクルが完結することもある。これは、村の地先では毎日の主食購入費に見合う現金収入がほとんどなく、乾季の出漁で不足分を集中的に稼ぐような場合である。いずれにしろ、遠隔地出漁によるまとまった収入なくしては、村での漁撈も違ったものになっていたに違いない。遠隔地における漁撈は、たとえ短期間であろうとも、村の暮らしに欠かせない活動となっているのである。

## (2) 遠隔地出漁以前

とはいえ、ナマコ採取やサメ刺網漁を目的とする遠隔地出漁は、ごく最近に始まったばかりである。1990年代の遠隔地出漁がアンパシラヴァ村民にとって持つ意味を知るためには、それ以前の家計経済について検討する必要がある。

IV-3で述べた調査地の歴史からは、1970年前後に大きな転機がアンパシラヴァ村に訪れたことがわかる。1970年以前には、商品となる海産物の種類は少なく、漁獲の大部分は内陸の豊かな農村地帯へ運ばれていた。このことは、アンパシラヴァ村近隣の生業について触れた数少ない報告にも言及されている

(Rosiers, 1920)。この時代の漁民は、生活を成り立たせるため、漁獲物をなるべく多くの農作物と交換するよう腐心していた。このため、農作物が豊かでおかずをあまり食べない近隣農村(第II章参照)は、漁民にとって重要な物々交換の相手ではなかった。また、交換レートが有利であれば交換相手を乗り換えることもおこなわれた。前述したようにマングキ川流域まで取り引きに行ったり、1950年代にそれをやめてマヌンブ周辺地域を新たな取引先としたりしたことも、こうした点から説明できる。

ところが1970年頃になると、物々交換が重要でなくなり、代わって現金でさまざまな商品を購入するという市場経済が浸透するようになった。その経緯に



については不明な部分も多いが、トゥリアラとムルンベの間の道路が整備され、大量輸送の手段として自動車が普及したのが直接のきっかけであろう。このためさまざまな工業製品がムルンベの町で手に入るようになった。アンパシラヴァ村でも、ナイロン製漁網が普及し、漁師自身が魚を買い付けて加工したものを町で売却するようになった。また、ムルンベ県内で捕れるさまざまな海産物が、インド系商人によって州都や州外へ輸送されるようになった。ナマコはその一例である。この頃にベヴァトゥ村で調査をおこなった Koechlin によれば、年間 1,388.4 フランの主食購入費<sup>(15)</sup>を費やす 5 人家族が大潮の 4~5 日間ナマコ採取（磯漁り）をおこなうと、200 フランの収入を得ることができる。年間の漁獲は 3,600 フラン程度だったと推定できるので、主食作物を購入するための漁獲としては十分だっただろう (Koechlin, 1975a: 107-115)<sup>(16)</sup>。Koechlin はこのほか、香料の原料となる貝の蓋 *fimpy* を得るため、イトマキボラ *bozike* (*Pleuroploca trapezium*) やテングガイ *dronka* (*Chicoreus ramosus*)<sup>(17)</sup> が換金用海産物として採取されていたと記している (*ibid.*: 43)。

新しく商品化した海産物は、アンパシラヴァ村でも集中的に採取され、重要な収入源になったと思われる。ナマコの採取が盛んだったことは IV-3 で述べたとおりである。イセエビも 1960 年代に採取されるようになった。1kg あたりの価格はキャッサバ 10kg 相当と現在より安い（現在はキャッサバ 50kg 相当）、水揚げははるかに多かったという。また、トゥヴェ *tove* と呼ばれるカタクチイ

<sup>(15)</sup> ここでは、トウモロコシとキャッサバと米の購入費を主食購入費と考え、調味料や嗜好品を含めなかった。なお、この時代にマダガスカルはフラン圏から離脱していないので、通貨単位はマダガスカル・フラン (FMG) でなく CFA フランである。

<sup>(16)</sup> ただし Koechlin によれば、他の出費をも考慮すると平均的ヴェズの家計収支はほぼ均衡しており、課税は酷であるという (Koechlin, 1975a: 114)。

<sup>(17)</sup> Koechlin は、それぞれの貝を *Fasciolaria trapeziums* および *Murex ramosus* と同定している。これらの貝類は筆者の調査時にも磯漁りの際に採取されていたが（表 III-10 参照）、数回の漁につき 1 個程度が持ち帰られるだけであり、キロ単位で売って家計の足しにできるとは思えなかった。

ワシ科の小魚 (Engraulidae)<sup>(18)</sup> も 1970 年代半ばに採取が始まった。この魚が毎年 9~12 月に回遊してくると「トゥリアラからムルンベまでの海域に満ち溢れた (*Nahatsike rano baka Toliara jiska Morombe*) 」ほどで、村中の漁師が総出で漁をしてもなかなか尽きなかったという。

しかし、これらの海産物資源は、やがて枯渇の兆しを見せ始める。ナマコが流通し始めた頃に資源量が豊富だったことは多くの証言から明らかであるが、現在ではわずかの漁獲しかない (第 III 章参照)。トゥヴェも、1995 年に回遊してこなくなって以来、まったく漁獲されていない。また、ある漁師は、1970 年代にナイロン製漁網が普及する以前は魚が豊富だったと証言している。もしこれが事実とすれば、新素材の導入と漁獲効率の向上により資源が減少した可能性がある。

このように、市場経済が顕著に浸透して以降、漁民の生活は一時的な景気に湧いたが、大局的には資源枯渇によって徐々に新しい局面を迎えるようになった。漁民たちは、村の地先で漁撈を続けるかたわら、補助的な収入を得る手段をそれぞれに模索しなければならなくなった。F1 の男などはカヌー製作に秀でていたため、現金収入にはそれほど困らなかったようである。F2 では、現在より熱心に畑の手入れをしており、1 年間家族が食べられるほど多くのキャッサバを収穫したこともあったという。こうした語りの真偽は確かめようがないが、一部の人々は現在より熱心に農耕をおこなっていた可能性が高い。また別の人は、魚の価格が高いムルンベや、海産物が多く捕れるヌサオ島などへ出漁した。しかし、この時期の出漁は 1990 年代の遠隔地出漁ほど大きな収入をもたらすものではなかったため、出漁者は少数にとどまっている。ある者がこの時代について述べるように、「昔は生活が苦しかった (*Nisarotse fiaina taloha*) 」のである。

---

(18) 筆者自身は、この魚を見る機会がなかった。文献によれば、*tove* の方名を持つ魚には、*Stolephorus commersonii*、*S. heterolobus* (ミズスルル)、*S. indicus* (インドアイノコイワシ)、*Thryssa baelama*、*T. setirostris*、*T. vitrirostris* などが含まれる (Bauchot et Bianchi, 1984)。

### (3) 遠隔地出漁以後の生計戦略

1990年代の遠隔地出漁は、大部分の漁民にまとまった現金収入の機会を提供した。これまでの村外の活動による利益はあまり大きなものでなく、それに依存する漁民の割合も多くなかったことから、1990年代の遠隔地出漁は異質なものであったといえる。市場経済が浸透するようになった1970年以来初めて、漁民は安定した生計を営むことができるようになったといつてよい。

しかしそれだけにとどまらず、1990年代の変化は、今後の生計戦略のあり方をも大きく変えてしまうことになるだろう。そのことは、ナマコ資源枯渇に対する漁師たちの対応に見て取れる。ナマコは、採取が容易なために資源枯渇に陥りやすいことが知られており（須田, 1995b; 赤嶺, 1999）、マダガスカルでもすでに資源枯渇の兆候を見せている。1998年の初頭にアンパシラヴァ村の漁師から聞いた話によると、アンザミタルカ島やムルンダヴァでは、深い場所まで潜らないと大きなナマコが見つからなくなっているという。これが資源枯渇の兆候であることはIV-3で述べた通りであるし、漁師たち自身もこの現象を「ナマコが尽きた」ためだと説明する。しかし、漁民たちは、もはやナマコ採取をやめて「生活が苦しかった」時代に逆戻りすることはできない。彼らは、生計を維持するため、その年の出漁期にはさらに遠くのマインティラヌまで行こうと話し合っていた。

アンパシラヴァ村の人々は、村の地先や後背地における生計手段でなく、遠隔地における換金用海産物を模索するようになっているのである。しかし、遠隔地における模索は、単に換金用海産物が見つければよいといった安易なものではなく、出漁先の人々との交渉という複雑な問題を解決しなければならないことが多い。じっさい、ムルンベ県の漁師たちがアンザミタルカ島とムルンダヴァ市を出漁先として選んだのは、地元の漁師との競合や葛藤を避けてきた結果なのである。アンザミタルカ島は無人島であったし、そこで従うべき禁忌は、本土アンザヌバシの住民が指示するとおりに遵守されている。また、ムルンダ

ヴァには漁撈民集住地区もあるが、アンパシラヴァ村からの出漁者が言うように「彼ら（ムルンダヴァの漁師たち）は潜水漁ができない（*Tsy mahay mañirike rozy*）」ため、出漁者とは競合しない。漁撈民集住地区から毎朝沖へ帆走するカヌーは、ナマコを採取しに行くのではなく、ヨコシマサワラを釣りに行くものばかりであった。このように競合や葛藤は表面的に回避されているにもかかわらず、妬みもしくは妬みを受けているという幻想は拭いきれないらしい。体調がおかしくなり一時的に帰村して治療を受けたある若者は、出漁先の漁師に呪薬を盛られたのだと語っていた。このように、海産物市場が拡大するにつれ、アンパシラヴァ村の人々は国内の他の社会とも積極的に交渉する機会を持つようになった<sup>(19)</sup>。

---

<sup>(19)</sup> このように、市場経済化のプロセスが村の地先の資源枯渇をもたらし、遠隔地における換金用海産物が重視されるようになるという経緯は、州都トゥリアラ近辺で数十年前に生じている可能性がある。この地域では、20世紀初頭にナマコ採取がおこなわれていたことからわかるように、市場経済の浸透は比較的早かった。また、Battistini が報告している遠隔地のヨコシマサワラ漁（IV-3（3）参照）は、重要な現金収入をもたらしていた。Battistini（1964: 129-132）によれば、ある世帯は年間 6,000 フランの主食購入費に対して 28,000 フランの収入を得ており、別の世帯は 9,000 フランの主食購入費に対して 68,000 フランの収入を得ていたという。もしこれがヨコシマサワラ漁を基盤にしているとすれば、その経済的役割はアンパシラヴァ村の遠隔地出漁ときわめて類似していることになる。

## 第 V 章

### 結論

## V-1 アンパシラヴァ村の漁撈経済についての総括

これまで、アンパシラヴァ村の漁撈活動と家計経済をさまざまな側面から記述および分析し、村外の社会経済状況との関わりをふまえつつ考察してきた。以下にこれを要約する。

まず、内陸にある近隣のK村との比較から、アンパシラヴァ村の漁撈経済の特質を浮かび上がらせた。生業の比較から明らかになったのは、2つの村では漁撈と農耕を両方おこなうにもかかわらず、アンパシラヴァ村は漁撈に重点を、またK村では逆に農耕に重点をおくという違いである。そして、このような生業の違いが食生活の違いとなってあらわれていることを示した。K村では、生産した農作物のかかなりの割合を自家消費しているのに対し、アンパシラヴァ村では、漁獲物を売却して得た現金で主食作物を購入する。副食についてはこの逆で、K村では現金購入し、アンパシラヴァ村では自給する傾向にある。しかし、副食に関する違いは主食作物ほど顕著ではなく、エネルギー源として食生活に不可欠なのは主食の方なので、主食自給度の高いK村の方が安定した食料確保戦略をとっているといえる。それにもかかわらず漁撈が必ずしも不利な家計戦略と認識されていない理由として、①漁撈から得られるまとまった現金収入の機会が年間を通じて分散していること、②それら現金収入の通年的な合計額が決して少なくないということ、の2点があげられる。

次に、アンパシラヴァ村の地先海域における漁撈活動と家計経済について記述するとともに、その特質を指摘した。ここでおこなわれる漁撈活動の多くは、サンゴ礁を主な漁場としており、そのことが漁撈活動のさまざまな特質となつてあらわれている。潮汐の影響を強く受けること、サンゴ礁に棲息する多様な種類の魚を漁獲対象としていること、漁法や漁獲効率が季節的に制限されることはほとんどないこと、漁法がサンゴ礁の複雑な地形に対応しているが大規模な資本や労働力を必要としないことなどである。これとは別に、男性が漁撈活動の主力となること、男性のあいだでもゆるやかな分業体制がみられることな

ど、労働面での特質もみられた。

もっぱら換金用の海産物を対象とした漁法が広くおこなわれていることは、アンパシラヴァ村の漁撈活動が市場経済と深く関わることを示している。しかし実際には、換金用にも自家消費用にもできる海産物を対象とした「融通型」の漁法も頻繁におこなわれ、漁獲の大部分はおかずとして自家消費されている。つまり、村の地先の漁撈は、主におかず捕りとして位置づけられている。村の地先における漁撈では、たとえすべての漁獲を売却したとしても、その日の主食さえ購入できない程度の現金しか得られないことが多いからである。アンパシラヴァ村の人々がまとまった現金収入を期待するのは、大きな魚群が回遊してきた時や、遠隔地出漁の時などに限られている。

そこで、アンパシラヴァ村民にとって経済的に重要な、遠隔地における潜水ナマコ漁とサメ刺網漁について詳細に記述し、これらの漁撈活動による現金収入の意義を指摘した。すなわち、①生産資本に投資するための資金をもたらすこと、②新しい欲望を刺激する消費物資の購入費をもたらすこと、③村の地先の漁撈活動だけではとうていまかなえない主食購入費を補填することの3点である。しかし、これらの活動を目的とした遠隔地出漁が始まったのは1992年のことであり、それ以前には遠隔地出漁によるまとまった現金収入を期待できなかった。遠隔地出漁は、海産物が盛んに商品化されるようになった1970年以来初めて、大多数の漁民の生計を安定させることができたといえる。今後、漁業資源の枯渇などによってアンパシラヴァ村民が生活に困窮する時には、遠くによりよい漁場を求めることが第一の解決案と認識されるようになるだろう。そして、さらに広い地域の人々との接触と交渉が必要となるだろう。1990年代の変化は、より広い地域社会への参画の契機としても、大きな意味を持っているといえる。

## V-2 市場経済の受容と漁撈経済の展開

本論文全体の結びとして、広域的な社会経済状況に関わりながら生きていかねばならないヴェズ漁民にとって、漁撈活動とは何なのかについて述べてみたい。漁撈活動がヴェズのアイデンティティの根拠の一つであることは、Astuti (1995a; 1995b) がすでに指摘している。しかし、ヴェズに固有な何らかの漁撈活動の伝統があって、それに従事することがアイデンティティの保持につながっているというわけではない。むしろ、新しいタイプの漁撈活動をアイデンティティの根拠とするような語りも少なくないのである。たとえば、文脈によってはヴェズであるともヴェズでないとも考えられるK村の人々について、アンパシラヴァ村のある漁師は次のように述べた。「彼らはサメ刺網漁をおこなわないのでヴェズではない (*Tsy raha Vezo rozy fa tsy mahay jarifa*) 」と<sup>(1)</sup>。

近年になって新しくおこなわれるようになったサメ刺網漁がヴェズであることの根拠として引き合いに出されるのは、巨大なサメを捕獲する活動が「海と格闘する」というイメージにぴったりするからではなかろうか。「海と格闘する (*struggle with the sea*) 」とは、ヴェズが何者であることを説明する時にヴェズ自身が引き合いに出す言い回しである (Astuti, 1995a: 1) 。この語りには、海で生活するために先人が凝らしてきた工夫を単に受け継ぐだけでなく、自らも革新と創造を担っていくという意気込みが感じられる。のみならず、折にふれて生活に打撃を与える外部条件との関わりの中では、漁民は不確定性に対処するための革新性をつねに要求されている。ヴェズ漁民にとって、ヴェズとして漁撈をしながら海で暮らすということは、まさしく革新と創造の連続なのだろう。

遠隔地出漁は、村の地先での漁撈が停滞した時代に新しい生活を切り開き、

---

<sup>(1)</sup> ただし、K村の人々はこのような考え方に対して異を唱えると予想される。K村の人々が自分たちのことをヴェズでないと認めることはまずない。彼らによれば、K村民はたとえ稀でも磯漁りに出ることがあり、磯漁りをする能力がある、ゆえにK村民はヴェズなのである (*Io maha-Vezo anay*: 字義どおりには、「それ(磯漁り)が我々をヴェズたらしめる」) という。アンパシラヴァ村民とK村民は、海との関わりをヴェズの証しと考える点で共通しているが、その関わりの具体的なイメージが異なっているといえる。したがって、以下の記述は、漁撈を主な生業とするヴェズのみを念頭においている。



大きな成功をおさめた革新の一つであった。サメ刺網を完成させた漁師はサメ刺網を見たことがなかったし、ナマコ潜水漁を始めた漁師も、最初から漁場に行くまでの航路を知っていたわけではない。しかし、刺網の作り方やカヌーの操縦知識など、それまで海の生活を通して重ねてきた工夫を応用することで初めての試みを達成したのである。その結果、遠隔地への出漁によって多数の漁民がかなりの経済的安定を約束されることになった。同時に、海産物を求めてさらに遠くの土地へと乗り出す契機も訪れた。このように、海に生きるものの可能性を切り開いたという意味で、遠隔地出漁はヴェズ的な現象といってよい。そして、ヴェズとして生き続けることを求めた末に活路を見いだしたという意味で、遠隔地出漁はヴェズ自身による主体的な選択だったといえる。

いっぽう、村の地先の漁撈活動にはそのような革新性はあまり感じられない。この活動は、おかず捕りとしての位置づけを与えられているが、同時に、買い手さえ来れば漁獲が売却されるという曖昧な性質を持っている。しかし、次のことに注意する必要がある。たとえアンパシラヴァ村の漁師たちが遠隔地出漁で多額の現金収入を得たとしても、彼らが村での漁撈をおろそかにすることは決してない。現金収入がもたらされなくとも、村の地先の漁撈活動の意味が減じることはないのである。それどころか、村の地先の漁撈活動は、依然として「海と格闘する」ことにほかならない。たとえ経済的な意義が小さくとも、村の地先の漁撈は「革新」を生み出す母胎となりうるからである。

村の地先の漁撈は革新をもたらす工夫の宝庫であり、遠隔地出漁は輝かしい革新の成果である。両者はいずれも、海との「格闘」に結びつく重要な活動である。

ヴェズにとって、海で生きるための文化と技術は、資本主義経済システムで生き抜くための資源である。竹沢（1999）によれば、ニジェール川中流域のボゾが歴史的に培ってきた「漁の知識や身体技法、生き方の理念やモラルなど、さまざまな文化的小および技術的資源」は、「かれらが現在という困難な時代を生き抜くための、手持でかつ処分可能な資源」であり、それを所有することの

意識が「私はボゾである」という発話を導くという。ヴェズにとって「資源」となる文化や技術は、村の地先の漁撈によって培われた。そして、この「資源」は、市場経済下における生活を安定させるため、遠隔地出漁というかたちで活かされた。やがては、遠隔地出漁を通してさらに新しい文化的/技術的資源が生み出されるであろう。「資源」の利用は新しい「資源」を生み出し、新たなアイデンティティの根拠となる。ヴェズにとって漁撈活動とは、外部への対処の手段であり、外部への対処の結果であり、そしてヴェズのアイデンティティについての動態的な根拠だといえる。

## 謝辞

本論文のもととなった現地調査の大部分は、日本学術振興会特別研究員（平成6年度採用・DC1）の採用期間中に実施された。その後、平成11年にも再び特別研究員（PD）として採用していただき、論文執筆に専念させていただくことができた。また、資料の整理と分析にあたっては科学研究費補助金（特別研究員奨励費）を活用させていただいた。機関ならびに関係者の方がたにまずお礼申し上げる。

現地調査の実施にあたり、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の小山直樹教授、チンバザザ動植物園の Albert Randrianjafy 氏、Gilbert Rakotoarisoa 氏には、調査許可の取得からトラブル解決に至るまで、さまざまな面で援助してくださった。漁業・海洋資源研究所の Man-Wai Rabenevanana 氏は、私がヴェズの村を訪問するにあたり、貴重な情報をくださるとともに便宜をはかってくださった。Daniel Rakotomalala 氏は、短期間のあいだにマダガスカル標準語とヴェズ方言の教授をしてく下さるとともに、ヴェズについての有益な情報を与えてくださった。

帰国後に論文を構想する段階になってからは、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の市川光雄教授にきめ細かな御指導をいただいた。市川教授には修士課程いらい御指導いただいているが、浅学菲才の私がこれまで研究を続けてこれたのも、教授の熱心かつ的確な御指導のおかげだと思っている。また、京都大学大学院人間・環境学研究科の金坂清則教授には、博士後期課程いらい数々の御助言と御指導を賜った。田中二郎教授をはじめとする、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ専攻の先生がたと諸先輩ならびに院生諸君は、さまざまな機会に私の研究内容について議論をしてく下さった。「問題解決の糸口は日常的なつき合いの中にある」という、いささか楽観的だが人類学者にとって貴重な生活態度を私が身につけることができたとなれば、ひとえにアフリカ専攻の皆様のおかげであると感謝している。

論文の執筆にあたっては、以上の方がたとともに、国立民族学博物館の秋道

智彌教授、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の深澤秀夫助教授ならびに広島市立大学の森山工助教授にも草稿に目を通していただき、貴重な御助言をいただいた。とくに、マダガスカルについてまったく知識のなかった私がまがりなりにも調査の成果を形にできたのは、マダガスカル研究に長らくたずさわってこられた深澤先生と森山先生の御助言と御支援によるところが大きい。また、測量した農地の面積を算出するにあたっては、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の木村大治助教授が作成したコンピューターソフト“Vector Data Processor”を利用させていただいた。

いちいち御名前を記すことができず残念に思うが、アンバシラヴァ村およびアンキリマリニカ村の皆様にはひとかたならぬ御世話になった。不審な挙動をとりがちな外来者を暖かく見守り、飽きずに最後までつき合ってくださいったことに感謝申し上げます。

最後になったが、父 守と母 康子ならびに家族の者にも感謝の意を記しておきたい。母が 67 歳で永眠した 1998 年 2 月 23 日、私はマダガスカルで調査中であり、最後の孝行を尽くすことができなかった。その後、決して順調とはいえなかった時期にも、父と家族は道楽のような研究生活を私に許してくれた。

以上の方がたに厚くお礼を申し上げます。

追記。1999 年 12 月 12 日、論文完成を笑顔で讃えてくれた父も永眠した。改めて両親の恩に感謝するとともに、今後の精進を誓う次第である。

## 参考文献

- アボット, R. T. ・ ダンス, S. P. (渡部忠重・奥谷喬司 監修・訳) 1985 [1982].  
『世界海産貝類大図鑑』平凡社.
- Acheson, James M. 1981.  
Anthropology of Fishing. *Annual Review of Anthropology* 10: 275-316.
- Acheson, James M. and James A. Wilson 1996.  
Order out of Chaos: The Case for Parametric Fisheries Management. *American Anthropologist* 98 (3): 579-594.
- 赤嶺淳 1999.  
「フィリピンにおける干ナマコ産業について」『族』31: 36-62.
- Akimichi, Tomoya. 1975.  
Individual Tuna Trolling Strategies and Transmission of Fishing Skills in a Local Community of Shimokita Peninsula. *Journal of Human Ergology* 4: 83-101.
- 秋道智彌 1976.  
「漁撈活動と魚の生態ーソロモン諸島マライタ島の事例」『季刊人類学』7 (2): 76-131.
- 秋道智彌 1977.  
「伝統漁撈における技能の研究ー下北半島・大間のババガレイ漁」『国立民族学博物館研究報告』2 (4): 702-764.
- 秋道智彌 1995a.  
「東南アジア・オセアニアの水産資源とエスノ・ネットワーク」秋道智彌 (編) 『イルカとナマコと海人たちー熱帯の漁撈文化誌』日本放送出版協会, pp.7-50.
- 秋道智彌 1995b.  
『海洋民族学ー海のナチュラリストたち』東京大学出版会.
- 秋道智彌・市川光雄・大塚柳太郎 1995.  
「生態人類学の領域と展望」秋道智彌・市川光雄・大塚柳太郎 (編) 『生態人類学を学ぶ人のために』世界思想社, pp.3-16.
- Association des Géographes de Madagascar 1969-1971.  
*Atlas de Madagascar*, Tananarive: Bureau pour le Développement de la Production Agricole.
- Astuti, Rita. 1991.  
Learning to Be Vezo: The Construction of the Person among Fishing People of Western Madagascar. PhD thesis, University of London.
- Astuti, Rita 1993.  
Food for Pregnancy: Procreation, Marriage and Images of Gender among the Vezo of Western Madagascar. *Social Anthropology* 1 (3): 277-290.

- Astuti, Rita 1994.  
Invisible Objects: Mortuary Rituals among the Vezo of Western Madagascar. *Res* 25: 111-122.
- Astuti, Rita 1995a.  
*People of the Sea: Identity and Descent among the Vezo of Madagascar*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Astuti, Rita 1995b.  
'The Vezo Are Not a Kind of People': Identity, Difference, and 'Ethnicity' among a Fishing People of Western Madagascar. *American Ethnologist*, 22 (3): 464-482.
- Astuti, Rita 1998.  
"It's a Boy," "It's a Girl!" Reflections on Sex and Gender in Madagascar and Beyond. In Lambek, Michael and Andrew Strathern (eds.) *Bodies and Persons: Comparative Perspectives from Africa and Melanesia*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 29-52.
- Barbier, Le 1908.  
Les Pêches maritimes dans la province de Toliara. *Bulletin Economique de Madagascar* 1-2: 30-47.
- Battistini, René 1964.  
*Géographie humaine de la plaine cotière Mahafaly*, Paris: Editions Cujas.
- Bauchot, Marie-Louise et Gabriella Bianchi 1984  
*Guide des poissons commerciaux de Madagascar: Espèces marins et d'eaux saumâtres*, Rome: Organisation des Nations Unies pour l'Alimentation et l'Agriculture (Fiches FAO d'identification des espèces pour les besoins de la pêches).
- Berkes, Fikret 1985.  
Fishermen and 'The Tragedy of the Commons.' *Environmental Conservation* 12 (3): 199-206.
- Berkes, Fikret (ed.) 1989.  
*Common Property Resources: Ecology and Community-Based Sustainable Development*, London: Belhaven Press.
- Biersack, Aletta 1999.  
Introduction: From the "New Ecology" to the New Ecologies. *American Anthropologist* 101 (1): 5-18.
- Bromley, Daniel W (eds). 1992.  
*Making the Commons Work: Theory, Practice, and Policy*, San Francisco: ICS Press.
- Bryant, Raymond L. and Sinéad Bailey 1997.  
*Third World Political Ecology*, London: Routledge.

- Cancian, Frank 1989.  
Economic Behavior in Peasant Communities. In Plattner, Stuart (ed.) *Economic Anthropology*, Stanford: Stanford University Press.
- Cannon, L. R. G. and H. Silver 1994.  
*North Australian Sea Cucumbers* (CD-ROM), Amsterdam: Expert Center for Taxonomic Identification, University of Amsterdam.
- Cordell, John (ed.) 1989.  
*A Sea of Small Boats*, Cambridge: Cultural Survival, Inc.
- Dahl, Otto Chr. 1991.  
*Migration from Kalimantan to Madagascar*, Oslo: Norwegian University Press.
- Dance, S. Peter 1992.  
*Shells*, London: Dorling Kindersley.
- Dasyuva, Germain, Valencia Ranarivelo and Jacqueline Razanoelisoa 1994.  
*Enquête socio-économique sur les communautés de pêcheurs traditionnels dans la région de Toliara* (rapport du Programme Sectoriel Pêche (MAG/92/004) par PNUD et FAO), Antananarivo: Ministère d'Etat à l'agriculture et au développement rural, Direction des ressources halieutiques.
- Dufour, Darna L. and Nicolette I. Teufel 1995.  
Minimum Data Sets for the Description of Diet and Measurement of Food Intake and Nutritional Status. In Moran, Emilio F. (ed.) *The Comparative Analysis of Human Societies: Toward Common Standards for Data Collection and Reporting*, Boulder: Lynne Rienner Publishers, pp. 97-128.
- Engelvin, Ambroise 1936.  
*Les Vézos ou "Enfants de la mer": Monographie d'une sous-tribu Sakalava*, Paris: Librairie Vincentienne et Missionnaire.
- Escobar, Arturo 1999.  
After Nature: Steps to an Antiessentialist Political Ecology. *Current Anthropology* 40 (1): 1-30.
- Estrade, Jean-Marie 1985.  
*Un culte de possession à Madagascar: Le tromba*, Paris: L'Harmattan.
- Fanony, F. 1986.  
A propos des Mikea. In Kottak, Conrad P. et al. (eds.) *Madagascar: Society and History*, Durham: Caroline Academic Press, pp.133-142.
- Faublée, Marcelle et Jacques Faublée 1950.  
Pirogues et navigation chez les Vezo du sud-ouest de Madagascar. *L'Anthropologie* 54: 432-454.

- Feeny, David, Fikret Berkes, Bonnie J. McCay and James M. Acheson 1990.  
The Tragedy of the Commons: Twenty-Two Years Later. *Human Ecology* 18 (1): 1-19.
- Firth, Raymond 1966 [1946].  
*Malay Fishermen: Their Peasant Economy*, London: Routledge & Kegan Paul Ltd.
- Forman, Shepard 1970.  
*The Raft Fishermen: Tradition & Change in the Brazilian Pesant Economy*,  
Bloomington: Indiana University Press.
- 深澤秀夫 1988.  
「遍在する邪術、見えない邪術——北部マダガスカル ツィミヘティ族社会におけるある  
呪術告発についての一考察」『国立民族学博物館研究報告』13 (2): 253-296.
- Gezon, Lisa L. 1997.  
Political Ecology and Conflict in Ankarana, Madagascar. *Ethnology* 36 (2): 85-100.
- Grandidier, Alfred et Guillaume Grandidier 1908.  
*Ethnographie de Madagascar, tome IV*, Paris: Imprimerie National.
- Griffith, J. F. and R. Ranaivoson 1972.  
Madagascar. In Griffith, J. F. (ed.) *World Survey of Climatology 10: Climates of Africa*,  
Amsterdam: Elsevier Publishing Company, pp.461-499.
- Gross, Daniel R. 1984.  
Time Allocation: A Tool for the Study of Cultural Behavior. *Annual Review of  
Anthropology* 13: 519-558.
- Hames, Raymond 1992.  
Time Allocation. In Smith, Eric Alden and Bruce Winterhalder (eds.) *Evolutionary  
Ecology and Human Behavior*, New York: Aldine de Gruyter, pp.203-235.
- 原口武彦 1995.  
「構造調整とアフリカ農業」原口武彦（編）『構造調整とアフリカ農業』アジア経済研究  
所, pp.3-9.
- 原子令三 1972.  
「嵯峨島漁民の生態人類学的研究——とくに漁撈活動をめぐる自然と人間の諸関係につ  
いて」『人類学雑誌』80 (2): 81-112.
- Hodd, Michael 1991.  
*The Economies of Africa*, Aldershot: Dartmouth.
- 堀信行 1990.  
「世界のサンゴ礁からみた日本のサンゴ礁」サンゴ礁地域研究グループ（編）『熱い自然  
——サンゴ礁の環境誌（日本のサンゴ礁地域 1）』古今書院, pp.3-22.
- Hornell, James 1920.  
Les Pirogues à balancier de Madagascar et de l'Afrique orientale. *La Géographe* 34



(1): 1-23.

市川光雄 1977.

「宮古群島大神島における漁撈活動」加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫（編）『探検・地理民族誌』中央公論社, pp.495-533.

飯田卓 1997a.

「漁村の食事と農村の食事—マダガスカル南西部乾燥地帯の食生活」『アフリカレポート』25: 42-45.

飯田卓 1997b.

「漁民の居場所と農民の居場所—マダガスカルでのタイムアロケーション調査から」『生態人類学会ニュースレター』3: 1-3.

飯田卓 1998a.

「マダガスカルのナマコ漁」『月刊アフリカ』38 (2): 9-13.

飯田卓 1998b.

「マダガスカルの海洋民ヴェズ」『季刊民族学』86: 59-67.

Irimoto, Takashi 1972.

The Ecological Study of the Sea-Food Gatherers on Rocky Coast: Role of Age and Sex in Time-Space Structure of Human Ecological System. *Journal of Anthropological Society of Nippon* 80 (4): 351-373.

掛谷誠 1974.

「トングウェ族の生計維持機構—生活環境・生業・食生活」『季刊人類学』5 (3): 3-99.

児玉谷史朗 1993.

「アフリカにおける商業的農業の発展と経済発展、国家」児玉谷史朗（編）『アフリカにおける商業的農業の発展』アジア経済研究所, pp.3-18.

Koechlin, Bernard 1971.

Vuru-bé: Un conte malgache en langue Sakalava-Vezo. *L'Homme* 11 (4): 31-60.

Koechlin, Bernard 1973.

Quelque exemples de communications avec la surnature chez les Vezo du sud-ouest de Madagascar. *Asie du sud-est et monde insulindien* 4 (3): 85-132.

Koechlin, Bernard 1975a.

*Les Vezo du sud-ouest de Madagascar: Contribution à l'étude de l'éco-système de semi-nomades marins*, Paris: Mouton.

Koechlin, Bernard 1975b.

Notes d'ethno-technologie sur l'habitation permanente Vezo. *Asie du Sud-Est et Monde Insulindien* 4 (2-3): 3-34.

Koechlin, Bernard 1984.

Une communauté de semi-nomades marins de Madagascar: Processus historique et

- changements irréversibles de l'écosystème Vezo. In Gunda, Béla (ed.) *The Fishing Culture of the World*, Budapest: Akadémiai Kiadó, pp.745-776.
- Koechlin, Bernard 1987.  
Esquisse pour un lexique iconographique de gestuelle culturelle: Le port traditionnel du vêtement masculin chez les Vezo du sud-ouest de Madagascar. In Koechlin Bernard, François Signaut, Jacqueline M. C. Thomas et Gérard Toffin (eds.) *De la voute céleste au terroir, du jardin au foyer*, Paris: École des Haut Études en Sciences Sociales, pp.557-571.
- Koechlin, Bernard 1992.  
Prolegomenon to the Elaboration of a New Discipline: Ethnogestics. In Poyatos, Fernando (ed.) *Non-Verbal Communication*, Amsterdam: John Benjamins, pp.59-76.
- Koechlin, Bernard et Jacqueline Matras 1971.  
Pour une ethno-technologie: Élément d'un manuel de technologie culturelle. *Asie du sud-est et monde insulindien* 2 (3): 3-172.
- Kottak, Conrad P. 1999.  
The New Ecological Anthropology. *American Anthropologist* 101 (1): 23-35.
- Kuchikura, Yukio 1975.  
The Structure of the Fishing Activity System and Division of Labor According to Age in a Local Fishing Community of Okinawa. *Journal of Human Ergology* 3: 105-130.
- 口藏幸雄 1995.  
「エネルギーと栄養」秋道智彌・市川光雄・大塚柳太郎（編）『生態人類学を学ぶ人のために』世界思想社, pp.42-66.
- 栗本英世・井野瀬久美恵（編） 1999.  
『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院.
- Lavondès, Henri 1967.  
*Bekoropoka: Quelques aspects de la vie familiale et sociale d'un village malgache*, Paris: Mouton.
- Lees, Susan H. and Daniel G. Bates 1990.  
The Ecology of Cumulative Change. In Emilio F. Moran (ed.) *The Ecosystem Approach in Anthropology: From Concept to Practice*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp. 247-277.
- 益田一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫（編） 1988.  
『日本産魚類大図鑑』東海大学出版会.
- 松田素二 1999.  
『抵抗する都市』岩波書店.
- McCay, Bonnie J. and James M. Acheson (eds). 1987.

*The Question of the Commons: The Culture and Ecology of Communal Resources*,  
Tucson: The University of Arizona Press.

Millot, J. et A. Pascal 1952.

Notes sur la sorcellerie chez les Vezo de la région de Morombe. *Mémoire de l'institute scientifique de Madagascar, série C, I* (1): 13-28.

Molet, L. 1958.

Aperçu sur un groupe nomade de la forêt épineuse des Mikea. *Bulletin de l'Académie Malgache* 36: 241-243.

Moran, Emilio F. 1990.

Ecosystem Ecology in Biology and Anthropology: A Critical Assessment. In Emilio F. Moran (ed.) *The Ecosystem Approach in Anthropology: From Concept to Practice*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp. 3-40.

森山工 1996.

『墓を生きる人々——マダガスカル、シハナカにおける社会的実践』東京大学出版会.

Mulder, Monique Borgenhoff and T. M. Caro 1985.

The Use of Quantitative Observational Techniques in Anthropology. *Current Anthropology* 26 (3): 323-335.

中井達郎 1990.

「北限地域のサンゴ礁——サンゴ礁とは」サンゴ礁地域研究グループ（編）『熱い自然——サンゴ礁の環境誌（日本のサンゴ礁地域 1）』古今書院, pp.57-65.

中森亨・井龍康文 1990.

「サンゴ礁の地形区分と造礁生物の礁内分布」サンゴ礁地域研究グループ（編）『熱い自然——サンゴ礁の環境誌（日本のサンゴ礁地域 1）』古今書院, pp.39-56.

Nash, June 1981.

Ethnographic Aspects of the World Capitalist System. *Annual Review of Anthropology* 10: 393-423.

National Research Council 1986.

*Proceedings of the Conference on Common Property Resource Management*,  
Washington, D.C.: National Academy Press.

西島信昇 1988.

「サンゴ礁海域における増養殖と漁場利用の方向」諸喜田茂充（編）『サンゴ礁域の増養殖』緑書房, pp.26-35.

Nishimura, Asahitaro 1984.

Fishing in Indonesia from the Marine Ethnological View with Respect to Wallace's Line. In Gunda, Béla (ed.) *The Fishing Culture of the World*, Budapest: Akadémiai Kiadó, pp.677-703.

NP/NCCD (Nutrition Program, National Center for Chronic Disease Control) and FAO (Food and Agriculture Organization) 1968.

*Food Composition Table for Use in Africa*, Bethesda: NP/NCCD.

Ohtsuka, Ryutaro 1970.

Ecology of the Nasake Fishermen (Progress Report): The Temporal and Spatial Structure of their Activity System as Revealed by an Individual-Tracing Method. *Journal of Anthropological Society of Nippon* (『人類学雑誌』) 78 (2) : 121-139.

Orlove, Benjamin S. 1980.

Ecological Anthropology. *Annual Review of Anthropology* 9: 235-273.

Ottino, Paul 1963.

*Les économies paysannes malgaches du Bas Mangoky*, Paris: Editions Berger-Levrault.

Peet, Richard and Michael Watts 1996.

Liberation Ecology: Development, Sustainability, and Environment in an Age of Market Triumphantism. In Peet, Richard and Michael Watts (eds.) *Liberation Ecologies: Environment, Development, Social Movement*, London: Routledge, pp. 1-45.

Pichon, M. 1972.

The Coral Reefs of Madagascar. In Battistini, R. and G. Richard-Vindard (eds.) *Biogeography and Ecology in Madagascar*, Hague: Dr. W. Junk B. V. Publishers, pp. 367-410.

ラクトゥマララ 1985.

「漕げ！ 海の人ーベズ族の舟と生活」『週刊朝日百科 世界の地理』11 (108): 223-224.

Rappaport, Roy A. 1968.

*Pigs for Ancestors: Ritual in the Ecology of a New Guinea People*, New Haven: Yale University Press.

Roseberry, William 1988.

Political Economy. *Annual Review of Anthropology* 17: 161-185.

Rosiers, M. E. 1920.

Pêcheries des côtes ouest et sud-ouest de Madagascar: Et Richess en poissons de ces régions. *Bulletin Economique de Madagascar* 17: 199-205.

Ruddle, Kenneth and Tomoya Akimichi (eds.) 1984.

*Maritime Institutions in the Western Pacific*, Osaka: National Museum of Ethnology.

Ruud, Jørgen 1960.

*Taboo: A Study of Malagasy Customs and Beliefs*, Oslo: Oslo University Press.

Sahlins, Marshall 1972.

*Stone Age Economics*, New York: Aldine de Gruyter.

坂本慶一 1998.

「アフリカ農業の内発的発展ーその可能性を探る」高村泰雄・重田眞義（編）『アフリカ農業の諸問題』京都大学学術出版会, pp.27-56.

Scoones, I. 1999.

New Ecology and the Social Sciences: What Prospects for a Fruitful Engagement?  
*Annual Review of Anthropology* 28: 479-507.

島田周平 1999.

「新しいアフリカ農村研究の可能性を求めてーポリティカル・エコロジー論との交差から」池野旬（編）『アフリカ農村像の再検討』アジア経済研究所, pp.205-254.

Shipton, Parker 1990.

African Famines and Food Security: Anthropological Perspectives. *Annual Review of Anthropology* 19: 353-394.

諸喜田茂充 1988.

「サンゴ礁域の環境特性」諸喜田茂充（編）『サンゴ礁域の増養殖』緑書房, pp.8-25.

Smith, M. Estellie 1977.

Introduction. In Smith, M. Estellie (ed.) *Those Who Live from the Sea: A Study in Maritime Anthropology*, St. Paul: West Publishing. pp.1-22.

Smith, Margaret M. and Philkip C. Heemstra (eds.) 1991 [1986].

*Smiths' Sea Fishes*, Southern Book Publishers: Johannesburg.

Stiles, Daniel 1991.

Tubers and Tenrecs: The Mikea of Southwestern Madagascar. *Ethnology* 30 (3): 251-263.

Stiles, Daniel 1998.

The Mikea Hunter-Gatherers of Southwest Madagascar: Ecology and Sociology.  
*African Study Monographs* 19 (3): 127-148.

Suda, Kazuhiro 1994.

Methods and Problems in Time Allocation Studies. *Anthropological Science* 102 (1): 13-22.

須田一弘 1995a.

「生態と社会変化ーパプアニューギニアの事例をもとに」秋道智彌・市川光雄・大塚柳太郎（編）『生態人類学を学ぶ人のために』世界思想社, pp.217-237.

須田一弘 1995b.

「ナマコ漁とキワイ社会のゆらぎ」秋道智彌（編）『イルカとナマコと海人たちー熱帯の漁撈文化誌』日本放送出版協会, pp.141-163.

鈴木隆史 1994.

『フカヒレも空を飛ぶ』梨の木舎.

高橋基樹 1998.

「現代アフリカにおける国家と市場：資源配分システムと小農発展政策の観点から」『アフリカ研究』52: 1-28.

竹川大介 1996.

「沖縄系満系漁民の進取性と環境適応——潜水追込網漁アギヤーの分析をもとに」『列島の文化史』10: 75-120.

竹沢尚一郎 1999.

「ボゾとは誰のことか」『民族学研究』64 (2): 223-236.

Tanaka, Jiro 1991.

Egalitarianism and the Cash Economy among the Central Kalahari San. *Senri Ethnological Studies* 30: 117-134.

田中二郎・掛谷誠（編） 1991.

『ヒトの自然誌』平凡社.

田中二郎・掛谷誠・市川光雄・太田至（編） 1996.

『続 自然社会の人類学——変貌するアフリカ』アカデミア出版会.

田和正孝 1997.

『漁場利用の生態——文化地理学的考察』九州大学出版会.

寺嶋秀明 1977.

「久高島の漁撈活動——沖縄諸島の一沿岸漁村における生態人類学的研究」伊谷純一郎・原子令三（編）『人類の自然誌』雄山閣出版, pp. 167-239.

テスタール, アラン（山内昶訳） 1995 [1982].

『新不平等起源論——狩猟=採集民の民族学』法政大学出版局.

戸川安雄 1977.

「マダガスカル的海洋民ヴェズ族の舟『ラカ』と、その系譜について」『海事史研究』28: 58-76.

Tudor, Gill 1998 [1971].

Madagascar: Economy. In *Africa South of Sahara 1999 (28th Edition)*, London: Europa Publications, pp. 638-643.

van der Elst, Rudy 1981.

*A Guide to the Common Sea Fishes of Southern Africa*, Cape Town: Struik.

Vayda, Andrew P. and Bonnie J. McCay 1975.

New Directions in Ecology and Ecological Anthropology. *Annual Review of Anthropology* 4: 293-306.

Vayda, Andrew P. and Bradley B. Walters 1999.

Against Political Ecology. *Human Ecology* 27 (1): 167-179.

渡辺仁 1977.

「生態人類学序論」人類学講座編纂委員会（編）『人類学講座 12 生態』雄山閣出版, pp. 3-29.

Watts, Michael 1983.

*Silent Violence: Food, Famine and Peasantry in Northern Nigeria*, Berkeley:  
University of California Press.

Woodburn, James 1982.

*Egalitarian Societies*. *Man* (n. s.) 17 (3): 431-451.

山下晋司・山本真鳥（編） 1997.

『植民地主義と文化——人類学のパースペクティヴ』新曜社.

付表1 調査対象となった複合世帯による漁獲  
(従事者の略号については図I-6および本文第IV章を参照)

1-1. F1 (1996年乾季、村の地先)

日付	漁種	売却しなかった漁獲		売却した漁獲		漁撈時間 (時：分)	従事者	漁獲効率 (FMG/人・時)
		内訳 (kg)	金額(FMG)	内訳 (kg)	金額(FMG)			
6月 9日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
11日	追い込み刺網	魚6.5	6,500	-	3,470	4:28	2C, 3A	1,116.045
13日	追い込み刺網	魚5.95	5,950	-	4,500	3:46	3A	2,774.336
15日	追い込み刺網	魚3.75	3,750	-	9,750	3:43	2C, 3A, 2fの夫	1,210.762
	磯漁り	-	0	-	750	1:31	2e	494.505
	磯漁り	-	0	-	1,150	2:35	2c	445.161
	磯漁り	-	0	-	0	1:10	2f, 2j	0.000
17日	追い込み刺網	魚7.3	7,300	-	500	4:26	2C, 2E, 3A	586.466
	磯漁り	魚0.15	150	-	1,760	1:57	2c, 2f, 2j	326.496
	磯漁り	-	0	-	700	2:01	2e	347.107
19日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
21日	追い込み刺網	魚8.85、イカ1.5	10,350	-	0	4:04	2C, 2i	1,272.541

1-2. F2 (1996年乾季、村の地先)

日付	漁種	売却しなかった漁獲		売却した漁獲		漁撈時間 (時：分)	従事者	漁獲効率 (FMG/人・時)
		内訳 (kg)	金額(FMG)	内訳 (kg)	金額(FMG)			
6月10日	釣り	-	0	魚1.2(浜売)	1,200	3:40	3B	327.273
12日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
14日	釣り	魚3.75	3,750	-	0	3:17	2D	1,142.132
	潜水漁	魚1	1,000	魚1(浜売)	1,800	2:59	3B	938.547
	磯漁り	タコ0.15	150	魚1(他の漁師へ)	0	2:54	2d	51.724
16日	潜水漁	魚1.3	1,300	2.1(浜売)	2,100	4:12	3B	809.524
	潜水漁	魚1.5	1,500	イセエビ1	9,000	4:05	2C, 2D	1,285.714
18日	潜水漁	-	0	タコ7.5	8,950	3:27	2C	2,594.203
	釣り	魚3.18	3,180	ナマコ(7個)	2,490	4:23	3B	1,293.536
	磯漁り	-	0	魚2.49(浜売)	400	2:48	2d	142.857
20日	潜水漁	魚0.65、タコ0.1	750	ナマコ(6個)	2,000	3:12	2C	859.375
	釣り	魚2.72	2,720	ナマコ(10個)	0	4:31	2D	602.214
22日	釣り	魚2.35	2,350	-	0	3:59	2C	589.958
	釣り	魚1.7	1,700	-	0	3:34	2D	476.636

1-3. K1 (1996年乾季、村の地先)

日付	漁種	売却しなかった漁獲		売却した漁獲		漁撈時間 (時：分)	従事者	漁獲効率 (FMG/人・時)
		内訳 (kg)	金額(FMG)	内訳 (kg)	金額(FMG)			
6月25日	追い込み刺網	ワタリガニ0.78	312	小魚4.72	7,260	9:03	2D	836.685
27日	カニ刺突漁	ワタリガニ2.15	860	ワタリガニ2.5	1,000	4:25	2D	421.132
	カニ刺突漁	ワタリガニ11.14	4,456	-	0	4:16	2B	1,044.375
	追い込み刺網	小魚0.5、魚0.35	4,250	小魚0.65	1,000	2:48	2A	1,875.000
29日	出漁せず	ワタリガニ7.63	-	-	-	-	-	-
7月 1日	追い込み刺網	小魚5.34、魚2.41	12,518	小魚1.4	2,250	6:37	2A	2,231.940
3日	磯漁り	タコ1.03	-	-	0	5:11	2B	721.543
	追い込み刺網	タコ2.2、魚1.54	3,740	-	0	6:41	2A	424.938
5日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
7日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-



1-4. F1 (1996年乾季、アンザミタルカ島)

日付	漁種	売却しなかった漁獲		売却した漁獲		漁撈時間 (時:分)	従事者	漁獲効率 (FMG/人・時)
		内訳(kg)	金額(FMG)	内訳(kg)	金額(FMG)			
10月12日	ザヌケ	魚7.46	7,460	魚11.52(塩魚)	20,736	0:38	2C, 2I, 3A	7,518.933
	(網の設置)	-	-	-	-	0:37	2C, 2I, 3A	-
	サメ刺網	-	0	-	0	4:51	2B, 2C, 2I	0.000
13日	ザヌケ	魚3.84	3,840	魚21.51(浜売)	57,240	2:40	2B, 2C, 2I	6,201.015
	(網の設置)	-	-	-	-	0:37	2B, 2C, 2I	-
	サメ刺網	魚1.99	1,990	魚6.51(塩魚)	11,718	2:23	2B, 2C, 2I	1,917.203
14日	ザヌケ	魚4.04	4,040	魚6.16(浜売)	14,494	0:30	2B, 2C, 2I, 3A	5,532.537
	(網の設置)	-	-	魚4.63(塩魚)	-	0:27	2B, 2C, 2I	-
	サメ刺網	-	0	-	0	3:08	2B, 2C, 2I	0.000
15日	ザヌケ	魚4.86	4,860	魚5.77(塩魚)	10,386	1:58	2B, 2C, 2I	1,752.414
	(網の設置)	-	-	-	-	0:56	2B, 2C, 2I	-
	サメ刺網	-	0	-	0	3:06	2B, 2C, 2I	0.000
16日	ザヌケ	魚9.35	9,350	-	0	0:35	2B, 2C, 2I, 3A	2,621.495
	(網の設置)	-	-	-	-	0:37	2I, 3A	-
	(サメ網の設置)	-	-	-	-	2:47	2B, 2C, 2I	-
17日	ザヌケ	魚2.47	2,470	魚1.52(浜売)	3,356	0:49	2B, 2C, 2I, 3A	1,248.429
	(網の設置)	-	-	魚1.02(塩魚)	-	0:21	2B, 2C, 2I, 3A	-
18日	サメ刺網	-	0	魚3.55(塩魚)	6,390	2:39	2B, 2C, 2I	803.774
19日	ザヌケ	魚9.3、タコ1	10,300	魚7.49(浜売)	36,722	2:30	2B, 2C, 2I	4,610.000
	(網の設置)	-	-	魚4.49(塩魚)	-	0:54	2B, 2C, 2I	-
	サメ刺網	-	0	イセエビ2.35	0	1:50	2B, 2C, 2I	0.000
20日	ザヌケ	魚4.54	4,540	魚0.85(浜売)	4,810	0:37	2C, 2I, 3A	3,339.286
	(網の設置)	-	-	魚2.2(塩魚)	-	0:19	2B, 2C, 2I	-
	サメ刺網	-	0	-	0	2:35	2C, 2I, 3A	0.000
21日	ザヌケ	魚7.66	7,660	-	52,790	1:43	2C, 2I, 3A	7,556.250
	(網の設置)	-	-	-	-	0:57	2B, 2I, 3A	-
	サメ刺網	-	0	-	0	2:31	2C, 2I, 3A	0.000
22日	サメ刺網	-	0	-	0	3:55	2C, 2I, 3A	0.000
23日	ザヌケ	魚0.86	860	魚2.41(塩魚)	4,338	0:31	2C, 2I, 3A	1,528.824
	(網の設置)	-	-	-	-	0:37	2C, 2I, 3A	-
	サメ刺網	-	0	-	0	4:31	2C, 2I, 3A	0.000
24日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
25日	ザヌケ	魚6.44	35,200	魚2.62(塩魚)	4,716	1:52	2C, 2I, 3A	5,493.028
	(網の設置)	-	-	-	-	0:25	2B, 2C, 2I, 3A	-

1-5. F2 (1996年乾季、ムルンダヴァ)

日付	漁種	売却しなかった漁獲		売却した漁獲		漁撈時間 (時:分)	従事者	漁獲効率 (FMG/人・時)
		内訳(kg)	金額(FMG)	内訳(kg)	金額(FMG)			
10月27日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
28日	潜水漁	魚2.82	2,820	ナマコ(26個)	117,000	11:31	2C, 2D, Y	3,468.017
	潜水漁	-	0	ナマコ(15個)	324,000	11:27	2B, 3B, X	9,432.314
29日	潜水漁	-	0	ナマコ(15個)	116,000	9:52	3B, Y, X	3,918.919
30日	潜水漁	-	0	ナマコ(15個)	124,000	10:48	2C, 2D, Y	3,827.160
	潜水漁	-	0	ナマコ(12個)	128,000	11:08	2B, 3B	5,748.503
31日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
11月1日	潜水漁	-	0	-	0	4:15	2C, 2D, Y	0.000
	潜水漁	-	0	-	0	4:12	2B, 3B	0.000
2日	潜水漁	魚4.22	4,220	ナマコ(31個)	122,000	11:29	2C, 2D, Y	3,663.861
	潜水漁	魚0.94	940	ナマコ(33個)	130,000	11:37	2B, 3B, X	3,757.245
3日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
4日	潜水漁	-	0	ナマコ(19個)	124,000	12:00	2C, 2D, Y	3,444.444
	潜水漁	-	0	ナマコ(8個)	31,000	12:23	2B, 3B, X	834.455
5日	潜水漁	魚4.08	4,080	ナマコ(3個)	11,000	11:07	2C, 2D, Y	452.174
	潜水漁	-	0	ナマコ(2個)	8,000	11:16	2B, 3B, X	236.686
6日	潜水漁	-	0	-	0	7:53	2C, 2D, Y	0.000
	潜水漁	-	0	ナマコ(2個)	24,000	12:06	2B, 3B	991.736
7日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
8日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
9日	潜水漁	-	0	ナマコ(3個)	44,000	12:14	2C, 2D, Y	1,198.910

## 1-6. F1 (1998年雨季、村の地先)

日付	漁種	売却しなかった漁獲		売却した漁獲		漁撈時間 (時:分)	従事者	漁獲効率 (FMG/人・時)
		内訳(kg)	金額(FMG)	内訳(kg)	金額(FMG)			
1月10日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
12日	まき網	魚2.6 キビナゴ0.6	3,050	魚1.5(塩魚) キビナゴ35.8	28,200	2:31	1A, 2E	3,078.818
	(他のカヌーによる協業)	-	-	-	-	2:26	2C	-
	(他のカヌーによる協業)	-	-	-	-	2:41	2fの夫	-
14日	追い込み刺網	魚10.5	10,500	魚1.9(塩魚)	1,710	4:56	3A, 2fの夫	1,237.500
16日	まき網	魚1.6	1,600	-	0	3:58	3A	213.333
	(他のカヌーによる協業)	-	-	-	-	1:46	1A, 2fの夫	-
18日	追い込み刺網	魚2.7	2,700	魚0.5(浜売)	500	1:54	3A	1,684.211
20日	追い込み刺網	魚6.09	6,090	-	0	1:49	2I, 2gの夫	1,676.147
22日	追い込み刺網	魚3	3,000	-	0	1:36	2I, 2hの夫の弟	937.500
24日	追い込み刺網	魚3.8	3,800	-	0	1:56	2E, 3A	982.759
26日	追い込み刺網	魚3.1	3,100	-	0	2:00	2E, 2e	775.000
	まき網、置き刺網(浅瀬)	魚0.05	50	キビナゴ18.5	13,875	3:20	2I	1,212.627
	(他のカヌーによる協業)	-	-	-	-	2:43	1A, 2E, 3A	-
28日	まき網、置き刺網(浅瀬)	魚2.9	2,900	魚1.3(塩魚) タコ0.4	1,370	4:21	2I	390.549
	(他のカヌーによる協業)	-	-	-	-	3:57	3A	-
	(他のカヌーによる協業)	-	-	-	-	1:19	1A, 2E	-
30日	追い込み刺網	魚3.4、タコ0.3	3,550	魚1.75(塩魚)	1,575	3:40	2I, 3A	698.864
	磯漁り	-	0	ナマコ(3個)	450	1:30	2g, 2j	150.000
2月 1日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
3日	まき網、置き刺網(浅瀬)	魚6.73	6,730	魚1.77(塩魚)	3,186	2:29	1A, 2C, 3A	894.677
	(他のカヌーによる協業)	-	-	-	-	2:10	2E	-
	(網の設置)	-	-	-	-	0:44	2E, 2jの婚約者	-
5日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
7日	追い込み刺網	魚4.05	4,050	-	0	3:26	2E, 3A	589.806

## 1-7. F2 (1998年雨季、村の地先)

日付	漁種	売却しなかった漁獲		売却した漁獲		漁撈時間 (時:分)	従事者	漁獲効率 (FMG/人・時)
		内訳(kg)	金額(FMG)	内訳(kg)	金額(FMG)			
1月11日	追い込み刺網	魚6.85	6,850	-	0	3:45	2C, 3B	913.333
13日	追い込み刺網	魚6.35	6,350	-	0	3:35	2C, 2D	886.047
	磯漁り	タコ0.6	300	-	0	2:08	3b	140.625
15日	追い込み刺網	魚7.9	7,900	-	0	3:46	2C, 2D	1,048.673
17日	追い込み刺網	魚6	6,000	-	0	2:45	2C, 2D	1,090.909
	追い込み刺網	魚4.05	4,500	-	0	4:37	3B	974.729
19日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
21日	置き刺網(浅瀬)	魚7.62	7,620	魚1(浜売)	1,000	1:12	3B	5,621.732
	(網の設置)	-	-	-	-	0:20	3B	-
23日	置き刺網(浅瀬)	魚3.9	3,900	魚2(浜売) 魚8.4(燻製)	14,600	3:00	3B	5,550.000
	(網の設置)	-	-	-	-	0:20	3B	-
	追い込み刺網	魚5.65	5,650	-	0	1:59	2C, 2D	1,424.370
25日	置き刺網(浅瀬)	魚3.04	3,040	-	0	2:39	3B	1,018.994
	(網の設置)	-	-	-	-	0:20	3B	-
	追い込み刺網	魚4.6	4,600	-	0	3:34	2C, 2D	644.860
27日	追い込み刺網	魚0.81	810	魚2.7(燻製)	4,050	3:13	3B	1,510.881
	磯漁り	イセエビ0.05	450	-	0	1:46	2d	254.717
29日	磯漁り	-	0	イセエビ0.2	1,800	1:31	3a	1,186.813
	追い込み刺網	魚1.5	1,500	-	0	3:48	3B, 3b	197.368
31日	追い込み刺網	魚5.35	5,350	ナマコ(1個)	300	3:14	3B	1,747.423
2月 2日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
4日	追い込み刺網	魚3.6	3,600	-	0	2:30	2C, 2D	720.000
6日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-
8日	置き刺網(浅瀬)	魚2.14	2,140	-	0	1:11	3B, 3b	792.593
	(網の設置)	-	-	-	-	0:20	3B	-
	置き刺網(浅瀬)	魚5.25	5,250	-	0	2:41	2C	1,740.331
	(網の設置)	-	-	-	-	0:20	2C	-
	潜水漁	魚1.15、タコ1.15	1,725	ナマコ(1個)	900	2:28	3B	1,064.189

付表2 主食品目と副食品目の月変化  
(それぞれの食材を昼食で食べた世帯数/夕食で食べた世帯数)

2-1. 主食 (アンバシラヴァ村=F村)

	米	キャッサバ	トウモロコシ	サツマイモ	ウリ類	その他	(合計)
1995年10月31日	2/9	15/10	1/0	0/0	0/0	0/0	18/19
11月30日	3/8	13/8	2/1	0/0	0/0	0/0	18/17
12月28日	1/7	15.5/14	5.5/0	0/1	0/0	0/0	22/22
1996年1月29日	2/8	16/12	3/2	0/0	0/0	1/0	21/22
2月27日	1/10.5	16.57/8.5	2.33/0	0/0	1/1	0/0	20/20
3月30日	3/10	1/0	16/11	0/0	0/0	0/0	21/21
5月1日	0/6.5	0/0	22/15.5	0/0	0/0	0/0	22/22
5月31日	1/8	0/1	20/12	0/0	0/0	0/0	21/21
6月30日	1/12	0/0	18/8	2/1	0/0	0/0	21/21
7月30日	0/11.5	2/2	15/2.5	4/5	0/0	0/0	21/21
8月31日	0/10	8/3	11/4	1/2	0/0	0/0	20/19
9月27日	0/7	7/9	14/4	1/1	0/0	0/0	22/21
(合計)	14/107.5	93.17/67.5	129.83/60	8/10	1/1	1/0	247/246
1998年1月9日	0/9	9/4	13/9	0/0	0/0	0/0	22/22
1998年3月10日	1/10	10/6	10/5	0/0	0/0	0/0	21/21

2-2. 副食 (アンバシラヴァ村=F村)

	魚	他の海産物	豆	肉、その他	副食を食べず	(合計)
1995年10月31日	5.5/3.5	1/2	2.5/4.5	1/1	8/8	18/19
11月30日	7/8	1/1	6/5	0/1	4/2	18/17
12月28日	10.5/14	0/1	10.5/3	0/0	1/4	22/22
1996年1月29日	16/11.33	0/0	0/2.33	0/0.33	5/8	21/22
2月27日	9.5/10	0/0	2.5/2	2/0	6/8	20/20
3月30日	11.5/6	0/1	3.5/1.5	0/3.5	6/9	21/21
5月1日	9/7.5	1/3	2/0.5	0/2	10/9	22/22
5月31日	9.5/10	0/0	1.5/0	0/0	10/11	21/21
6月30日	10.5/18	0/0	0.5/2	0/0	10/1	21/21
7月30日	13.5/10	0/2	0.5/2	0/0	7/7	21/21
8月31日	9/9	1/0	3/2	0/4	7/4	20/19
9月27日	6/12	0/2	9/5	0/0	7/2	22/21
(合計)	117.5/119.3	4/12	41.5/29.83	3/11.83	81/73	247/246
1998年1月9日	11/6	1/2	1/3	0/1	9/10	22/22
1998年3月10日	12.5/7.5	0/2	5.5/7.5	0/0	3/4	21/21

2-3. 主食 (アンキリマリニカ村=K村)

	米	キャッサバ	トウモロコシ	サツマイモ	ウリ類	その他	(合計)
1995年10月30日	0/2	17/16	2/0	0/1	0/0	0/0	19/19
11月28日	2/1	17/19	2/1	0/0	0/0	0/0	21/21
12月29日	4/8	13/9	2/1	0/0	0/0	0/0	19/18
1996年1月30日	1/4	11/9.5	3/0	0/0	5/4.5	0/0	20/18
2月28日	5/10	7/1	0/2	0/0	8/6	0/0	20/19
3月29日	1/2	0/0	8/5	0/0	2/3	0/1	11/11
5月2日	0/1	0/0	13/13	0/0	0/0	0/0	13/14
5月30日	1/1.5	0/4	15/11.5	0/0	0/0	0/0	16/17
7月1日	0/4	1/1	6/5	11/10	0/0	0/0	18/20
7月31日	4/6	2/0.5	5/2	7/8.5	0/0	0/0	18/17
8月29日	1/5	3/1	3/1	5/6	0/0	0/0	12/13
9月26日	2/5	7.33/10	1.33/2	8/2	0/0	0.33/0	19/19
(合計)	21/49.5	78.33/71	60.33/27.5	31/27.5	15/13.5	0.33/1	206/206
1998年1月8日	2/7	8/5	4/3	0/0	0/0	0/0	14/15
1998年3月11日	3/7	2/3	12/7	0/0	0/0	0/0	17/17

2-4. 副食 (アンキリマリニカ村=K村)

	魚	他の海産物	豆	肉、その他	副食を食べず	(合計)
1995年10月30日	1/2	1/2	0/2	0/1	17/12	19/19
11月28日	1/2	3/2.5	4/1.5	0/0	13/15	21/21
12月29日	4.5/4	1/1	6.5/6	0/0	7/7	19/18
1996年1月30日	4.5/2	2/5	4.5/4	0/0	9/7	20/18
2月28日	8/4	2/1	0.5/0	0.5/1	9/13	20/19
3月29日	1/1	0/0	2/2	0/0	8/8	11/11
5月2日	1/2	0/0	0/2	0/0	12/10	13/14
5月30日	2/6	0/0	3/1	0/1	11/9	16/17
7月1日	4/3	1.33/1	0.33/2	1.33/0	11/14	18/20
7月31日	5.5/5	1.5/0	0/0	2/4	9/8	18/17
8月29日	4/8	0/0	0/0	0/1	8/4	12/13
9月26日	8.5/10	1/1	1.5/3.5	0/0.5	8/	19/19
(合計)	45/49	12.83/13.5	22.33/24	3.83/8.5	122/111	206/206
1998年1月8日	6/2	1/0	5/9	0/0	2/4	14/15
1998年3月11日	10/6.5	0/1	1/2.5	1/1	5/6	17/17